



輝く無敵

軍隊教育漫画

陸軍

330

C-78

参謀
陸軍大將 阿部信行 題字
東京憲兵隊検閲済



0057026000

0057026-000

特501-516

輝く無敵陸軍

軍事普及会

昭和13. 11序

AJF

風俗
年
月

特501
516



77W33794

有備無

患

行り五

軍事參議官 陸軍大將

阿部信行閣下題字

序

今や長期聖戦は第三段階に入り、無敵皇軍は崇高なる民族的大使命達成の爲め、刻一刻驚異的戦果を擴大、以て世界史上に新らしき頁を書き加へつゝある。吾々同胞たるもの、偶々この千載一遇の時代に際會せる事を、無上の光榮とすると共に、聖戦下に發揮せられたる皇軍不朽の威武を、永へに子々孫々に傳へ、同時に國防の重大性を、深く肝に銘せしめなくてはならぬ。

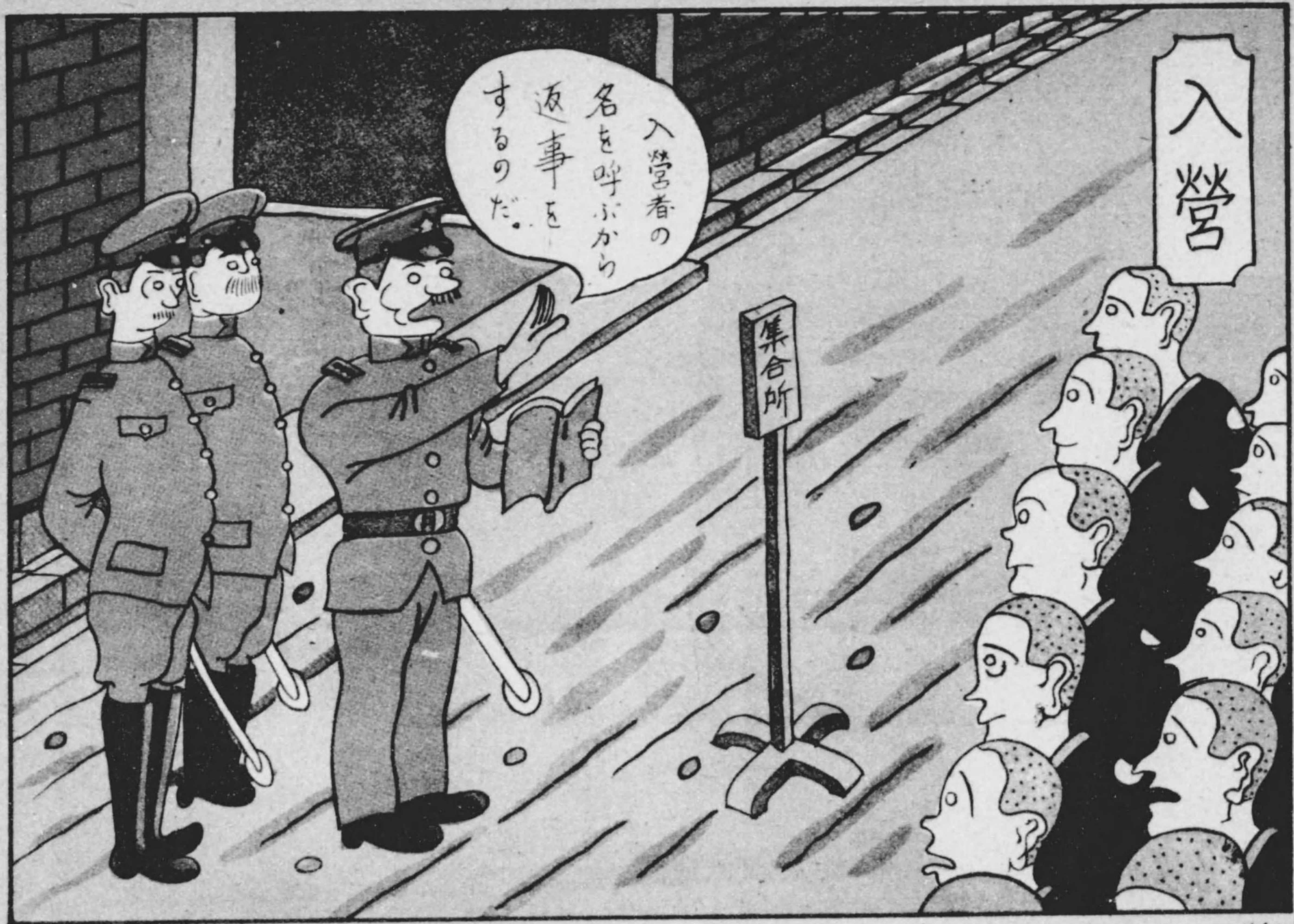
かゝる時に際し、威武赫々、全世界を慍伏せしめる無敵皇軍に對して、汎く一般國民を親しませる目的を以て整然たる軍隊の組織、その行動、將兵の日常生活等を細大洩らさず最も大衆性に富んだ漫畫を以て紹介せる「輝く無敵陸軍」の刊行せられたることは、今次聖戦を記念する意味に於ても、將又一般國民の軍事教育に資する意味に於ても、極めて有意義な企てと信ずる蓋し天真爛漫童心に富んだ兵士、和氣霽々家族兄弟にも等しき軍隊生活は眞に漫畫の好材料にして、獨り漫畫を以てのみ初めてその眞面目を躍如たらしめ得るのである。この點に着眼して、軍隊生活を漫畫によつて紹介するに成功せるものは、正に本書を以て嚆矢とすべきであらう。

軍民の緊密彌々深きを加ふる時、本書が更に光輝ある皇軍に對して國民大衆を接近せしめ堅き親和の楔たらん事を望んで止まぬ。

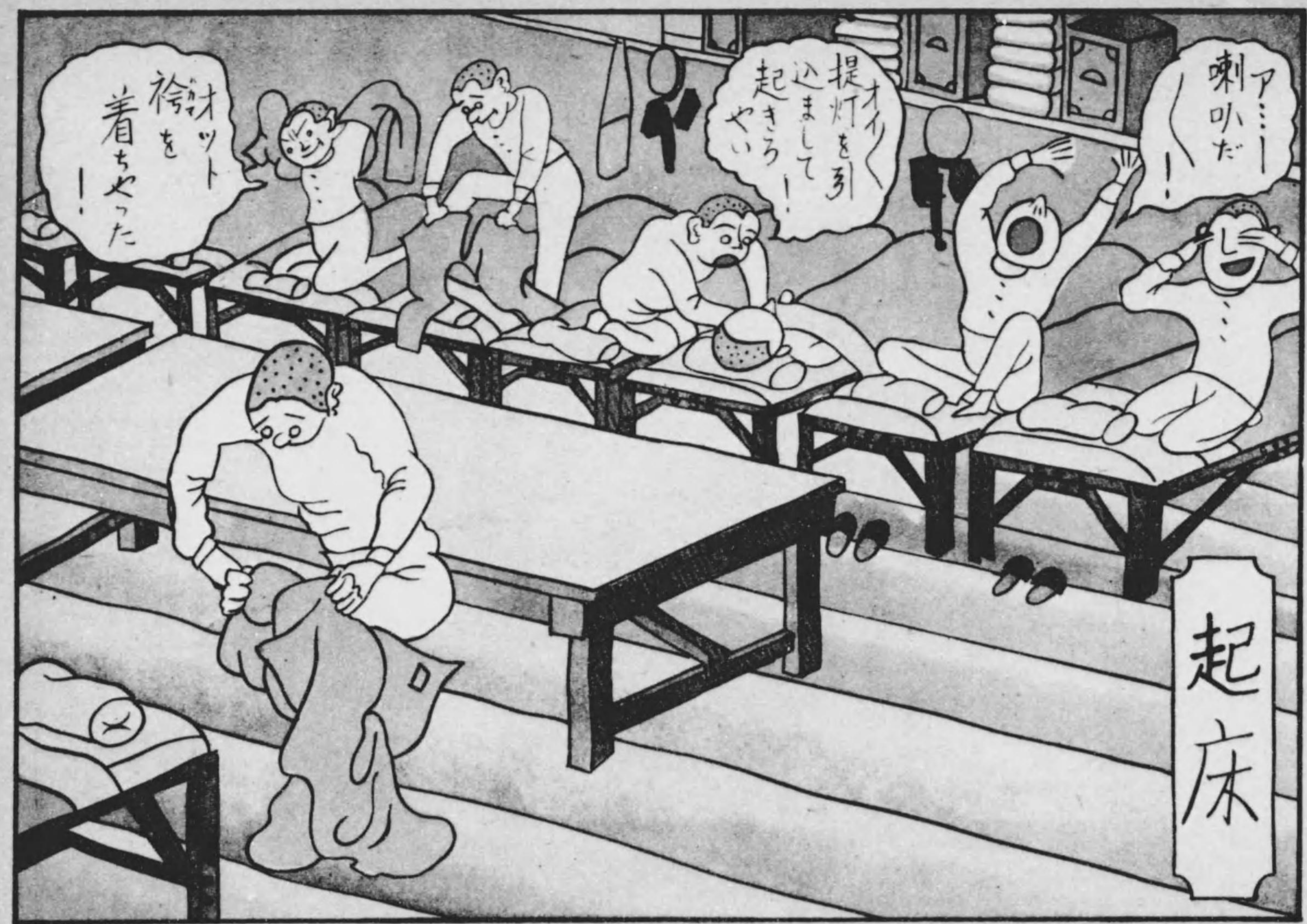
昭和十三年十一月

編者識す

一	入營	三二	檢閱
二	就床起床皆喇叭	三三	兵器檢査
三	洗面床	三四	基本體操
四	洗面	三五	梁木通過
五	舍内外掃除	三六	鐵棒
六	食事と食糧運搬	三七	飛越臺と跳降臺
七	衛兵所及學科	三八	不動の姿勢
八	衛兵交代	三九	折敷と伏せ
九	歩哨交代	四〇	速歩行進
一〇	執銃の敬禮	四一	捧銃と飛行機射撃
一一	身體檢査	四二	照準監査
一二	治療と診斷	四三	演習集合
一三	豫防接種	四四	行軍
一四	武器掃入	四五	偽裝網
一五	軍器掃除	四六	地形地物利用
一六	被服手入及洗濯	四七	輕機關銃
一七	外出	四八	夜間歩哨
一八	面會	四九	斥候
一九	軍隊理髮と演藝會	五〇	突擊
二〇	入浴	五一	俸給
二一	酒保	五二	演習中止
二二	記念攝影	五三	防毒マスクと擲彈
二三	點呼	五四	筒射撃
二四	娛樂室	五五	喇叭演習
二五	消燈及不寢番	五六	軍歌演習
二六	靴工	五七	銃劍術
二七	縫工	五八	游泳演習
二八	銃工	五九	豫行演習
二九	木工	六〇	銃口檢査
三〇	炊事場	六一	射擊
三一	軍馬手入場		洗滌



徴兵は師管毎に各聯隊區の區域に従つて徴集し、入營するのが通例である。現役兵の入營期日は、特別の兵科の外は翌年一月十日、短期現役兵の入營は四月一日と定めてある。言ふ迄もなく兵役は國民の一大義務、召されて國家の干城たる、正に男子至上の名譽と言ふべきである。



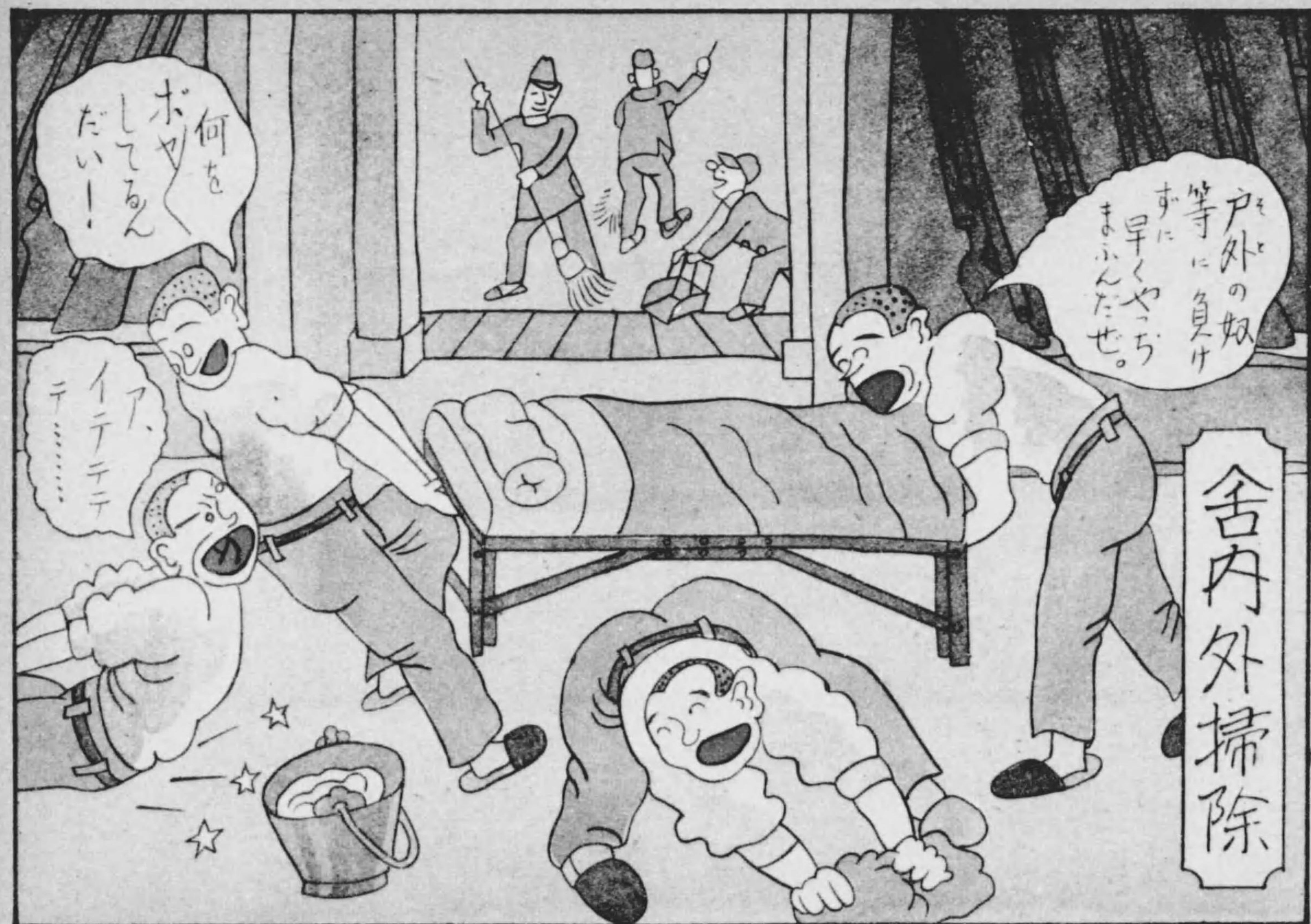
(3)

兵隊さん達は毎朝起床の號音で起床し、日朝號呼の號音で、所定の位置で人員檢査を受ける。それから洗面、朝食、規律ある和氣藪々たる軍隊生活が始まるのである。起床後から夕食時までは敷敷に寝たはる事は許されない。但し休日、或は特に許された場合は差支へない。



(2)

喇叭と兵隊内に響き渡る起床喇叭の音! 圓らかな夢から覺めて兵士達はスハとはかり英氣纏束ベッドからハネ起きる。かくて一日の兵隊生活が始まる。——やがて、楽しい晩飯、日夕號呼が終ると待ちに待った起床喇叭! 兵士達は吾勝にベッドへ潜へ込んで、夢は一路なつかしの我が家へ——



(5)

兵隊さんは清潔好き。吾が家とも思ふ營舎が汚れてゐては兵隊さんの恥辱であるばかりでない、皇軍の恥だ。だから寒風肌を切る日も、炎熱を堪へず日も「掃除始め」の號令一下一齊に持場々々に馳せつけて、瞬く間にさしも廣い兵舎も塵一つ落ちてゐないほど綺麗に掃除してしまふ。

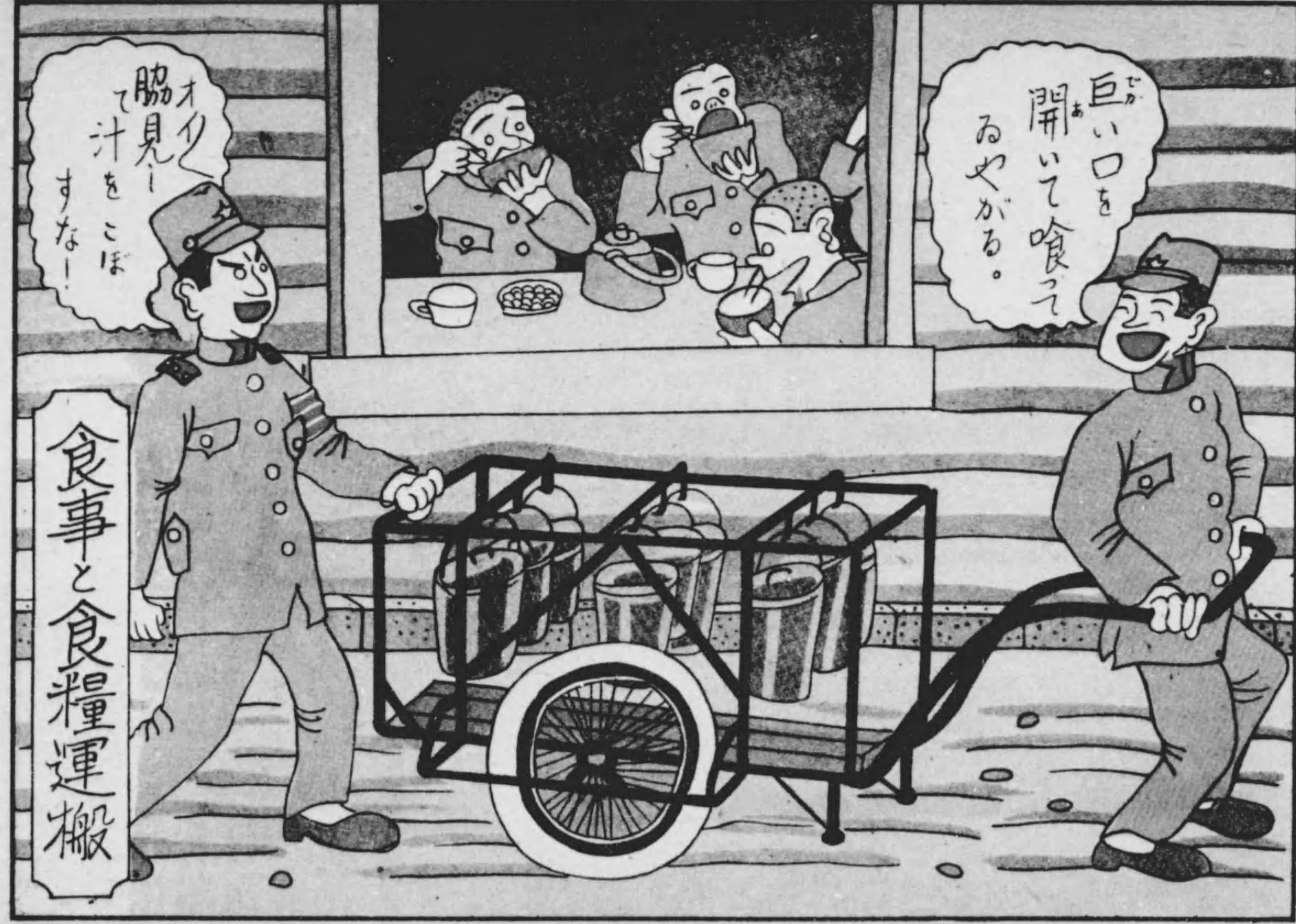


(4)

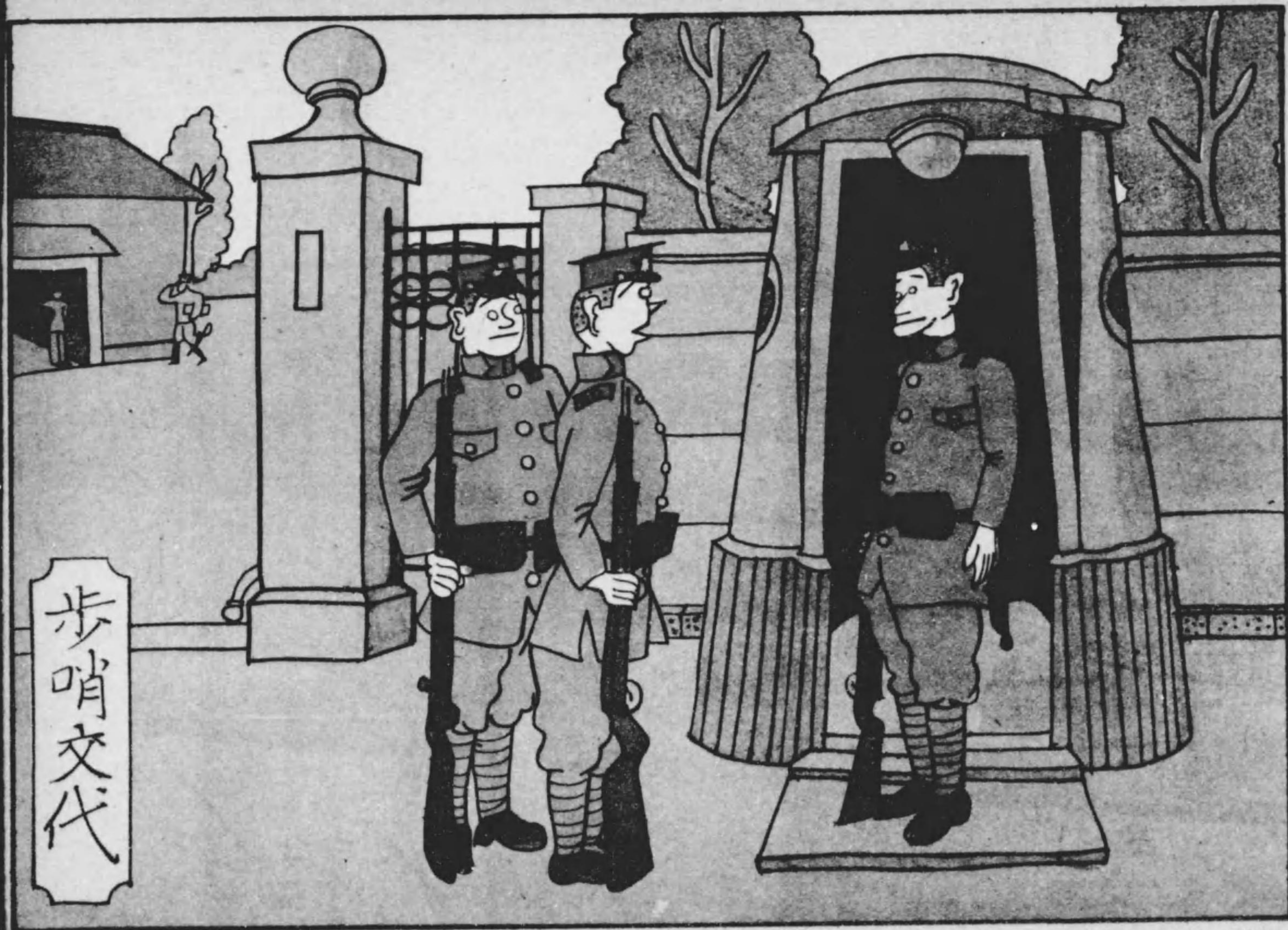
起床喇叭、日朝點呼、つゞいて洗面所へ殺到する「オイ、貴様何處へ行く、そつちは便所だぞ、寝惚けるな」ヤツしまた「オイ、昨夜下サリと音がしたが、誰だ」誰かから落ちたのは？ 甲田、又貴様だらう「いや、遠ふく」イヤハヤ賑やかなことく



學科は將校が兵に對して、軍人としての必須知識を講義して、軍人精神を涵養せしめる大切な教育の一つである。衛兵は司令、徳舎場、歩哨場、歩哨及び喇叭手からなり、哨所は普通軍旗、密門、餐倉、彈藥庫等に在る。その任務は營内の取締並に警戒、密門出入の者を監視するに在る。

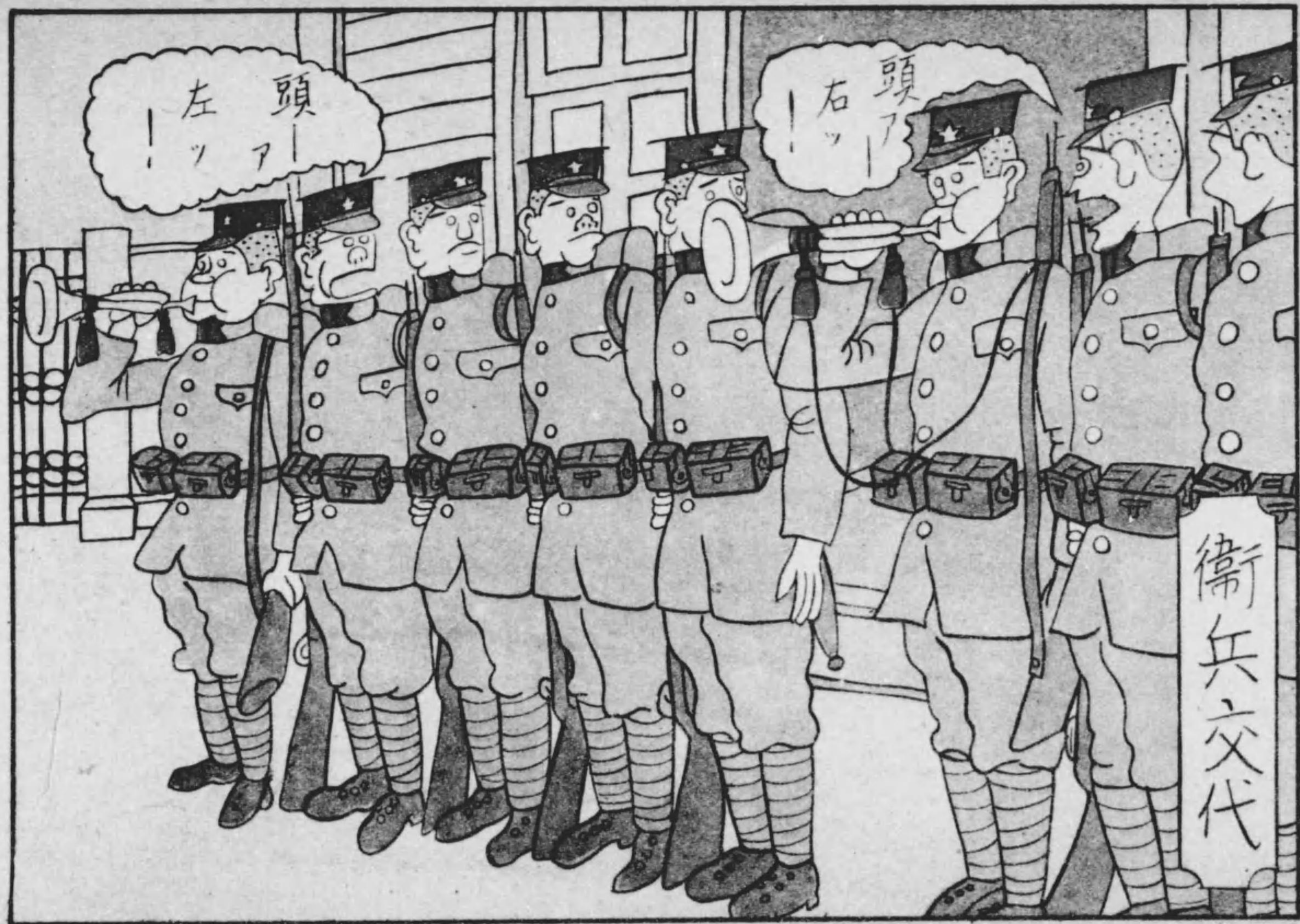


今日は我等の炊事當番だ。食糧運搬はチト辛い、なアに戦友達がウマさうにパクつく笑顔を見れば、自分の腹が減つたのなんかケロリと忘れてしまふ。「さアウンと喰へ〜」食糧運搬にリヤカーを使ふのはモダンな方で、大抵は大きな板に載せて、二人でエツサラエツサラ運んでゐる。



(9)

總て歩哨は命令の、あらざる時は常に立ち、銃を手にして放つなよ、その法は「腕に銃」又は「立て銃」「提げ銃」夜は「提げ銃」「握へ銃」又は「腕に銃」隨意とす。若しも上官來られても敬禮せずに監視せよ、若し問はれたる其時は、監視を止めずに答ふべし。これを歩哨の守則なる。(軍歌歩哨の任務)



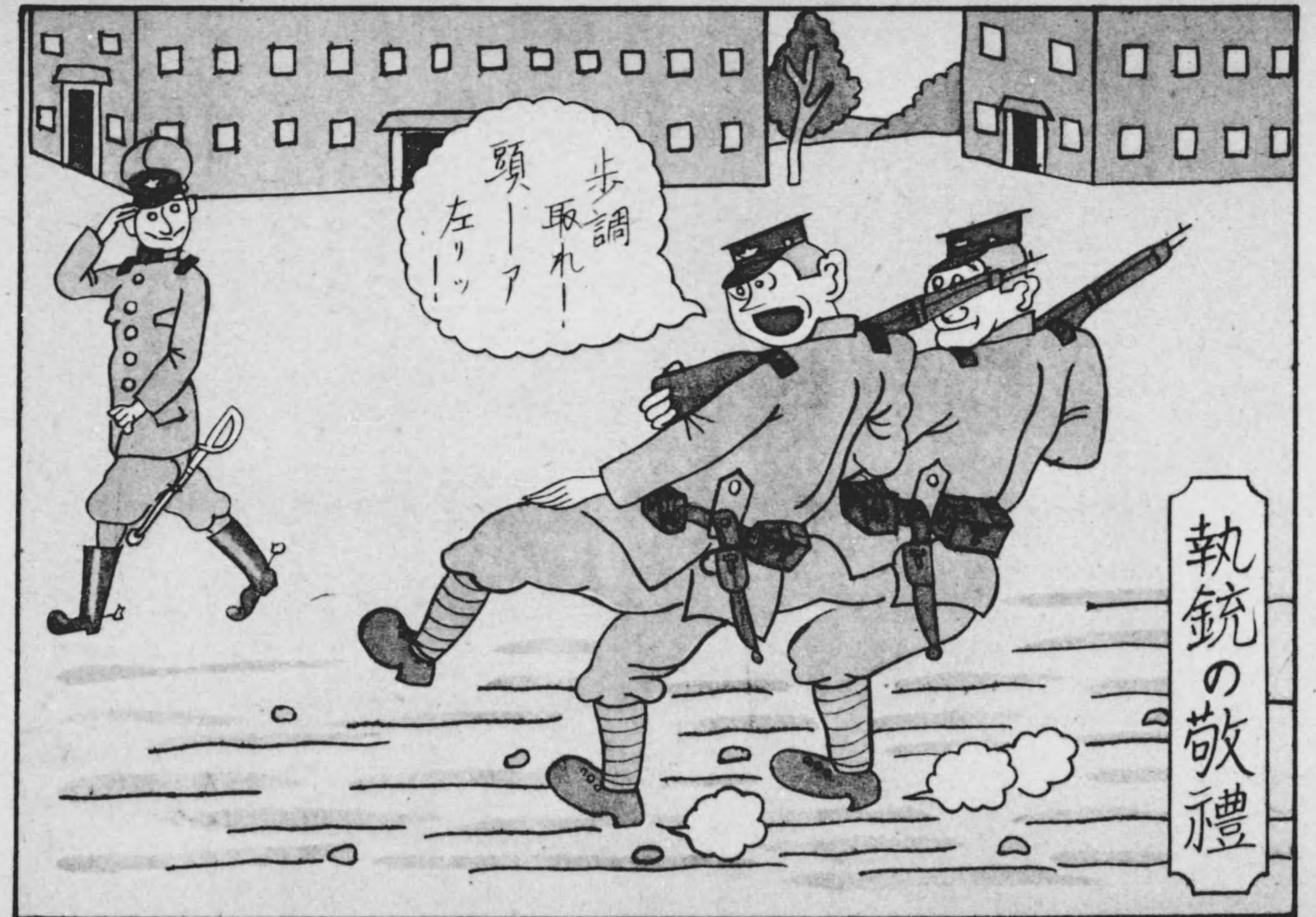
(8)

風紀衛兵は週番司令の指揮の下に、營内の取締並に警戒に任じ、營門出入の者を監視するものである。風紀衛兵は司令(通常下士官)衛生掛、歩哨及び喇叭手から成つてゐて、その哨所は軍旗、營門、營倉、彈藥庫である。歩哨の交代には、歩哨掛に引率せられて歩哨へ行き、下番歩哨から守則の申渡及び職務中見附した事の傳告を受けるのである。



一人の不健康も全隊の戦力を減殺する。故に毎月一回身体検査と稱して、總ての下士官の身体検査が行はれる。この際若し身体に異状ある者は直ちに療養を命ぜられる。斯くして皇軍の將士は益々壯健、士氣いよく壯なるのである。

(11)



銃行進間上官に對する敬礼は、歩調を取り乍ら踵を向けて受禮者に注目するのである。但し中隊長以上の直屬上官に對しては、停止して受禮者に對し、棒銃をして目迎目送をする。軍人勲章に俟つまでもなく、帝國軍人たるものは、禮節を重んじなくてはならぬ。

(10)



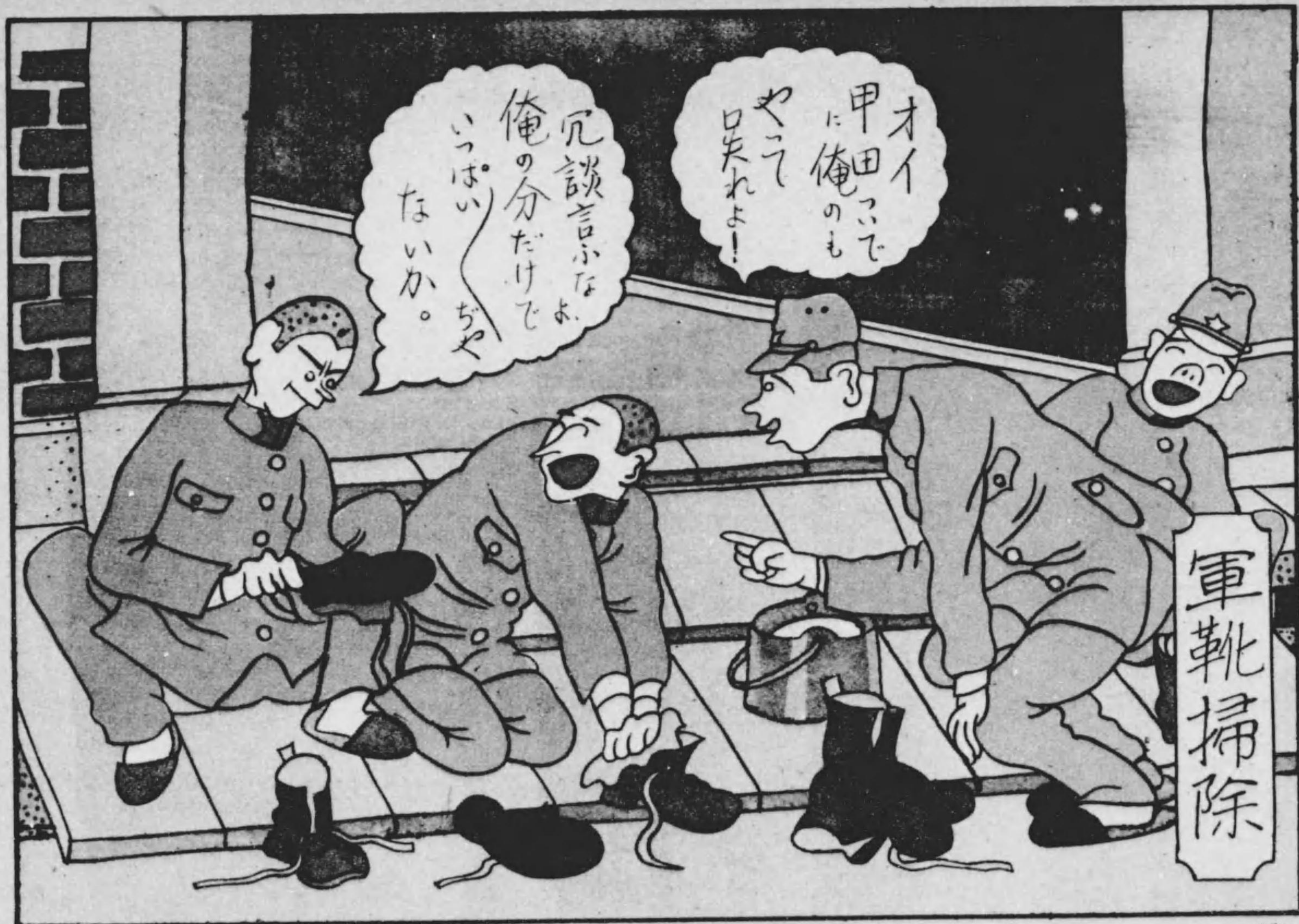
(13)

君國に身心を捧げた兵士達の健康は絶えず軍醫によつて注意され、傳染病豫防注射、種痘等は隨時行はれる。當番勤務とは兵士が、傳令其他業務に服する事で、交替に勤める。當番の交替は定められた時刻に、上下番の者立會で申繼をし、監督者に報告し、又諸物品の受渡しをするには品目表と對照し、破損紛失を調べてそれを監督者に報告するのである。



(12)

若し身體に異状ある者は、毎朝行はれる脈呼の點診を受け度き旨を内務班長に申出る。そして許されたら隊内勤務へ行つて軍醫の治療を受ける。大抵の病傷はこの醫務室で治療出来るが、更に重症のものは陸軍病院へ送られて、適切な手当を受ける。



(15)



(14)



(17)

外出は祭祝日、靖國神社大祭日、陸軍記念日、年末年始、日曜日である。外出は通常朝食後から夕食時限までである。外出する者は軍隊手帳を持つてゐなければならない。一般休日以外に外出する時は、内務班長を経て中隊長から外出證明書又は外泊證明書を買ひ、副番下士官に届出て外出する。

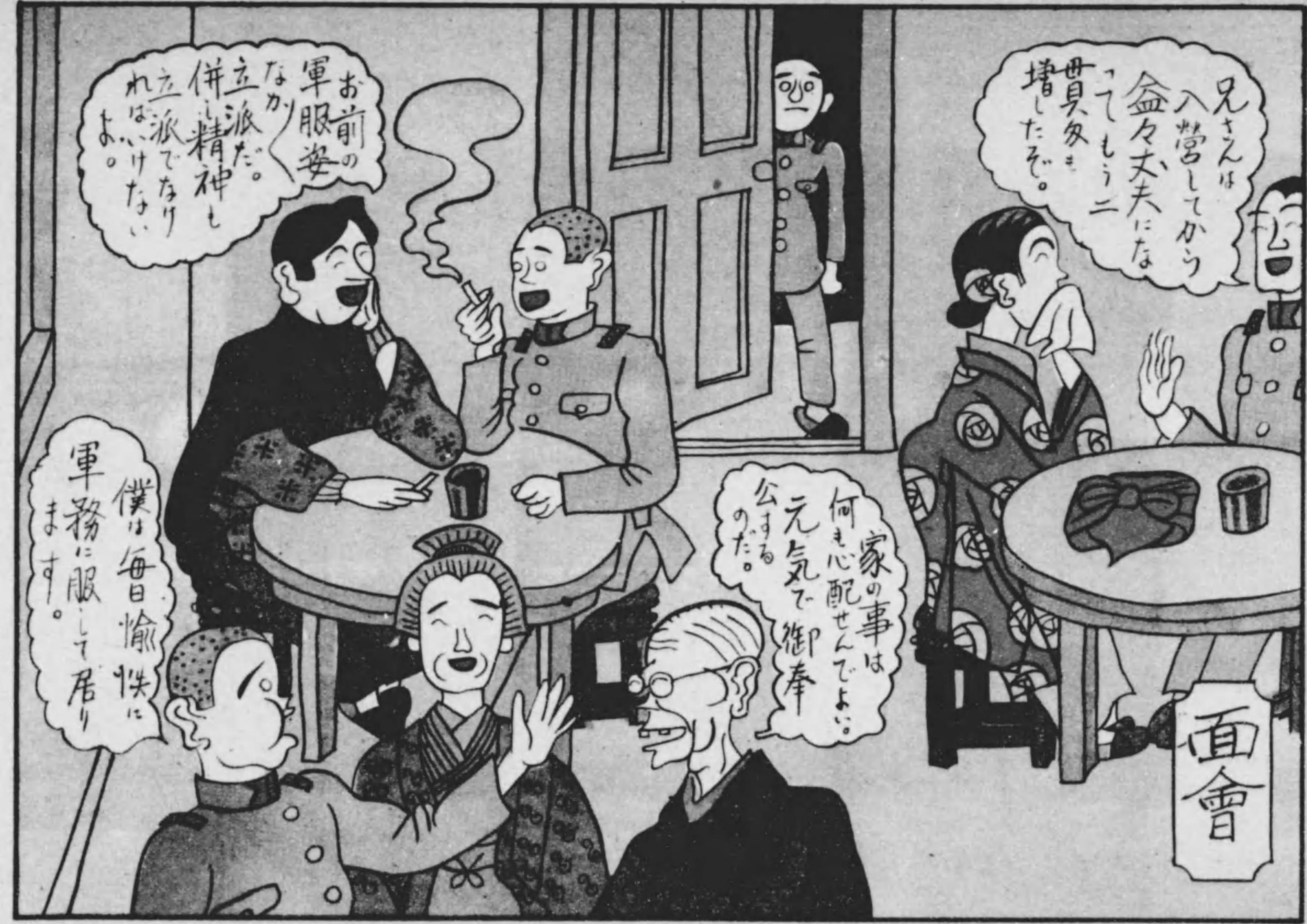


(16)

被服には軍帽、軍衣袴、夏衣袴、作業衣袴、外套、夏外套、巻脚絆、纏上靴、營内靴、夏多襪、袴下、襟布、背袋、飯盒、水筒、進級、携帶天幕、寝具等がある。尚被服手入具としてラシャ刷、靴、洗濯刷、油蓋、小刀、針、糸巻、燕口袋、麻袋を供與されてゐる。各々の被服の手入、洗濯等は手落なく行つて、常に清潔整然たらしめなくてはならぬ。



軍隊の理髪はお互ひに頭の刈りつくいだ。中には本職の奴もあるが、運悪く下手な奴に掛つたら災難、段々刈やぶ刈はまだいゝが、バリカンで毛を捲り抜かれて泣面掻かされる。楽しいのは祭日や軍旗祭の慰安會だ。珍珍奇奇百出、抱腹絶倒、正に命の洗濯デーだ。

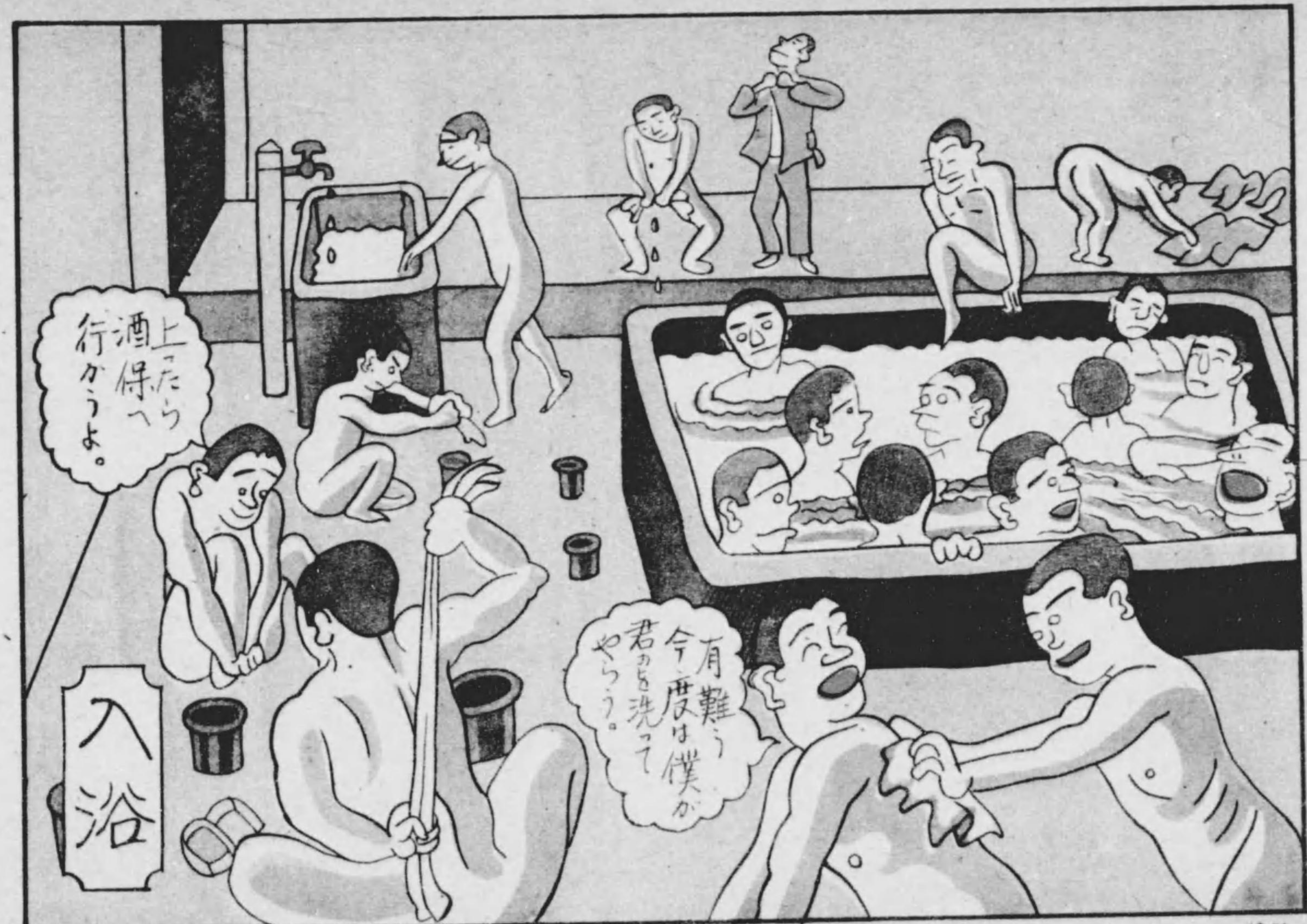


兵隊さんの何よりの楽しみは酒保と面會だ。面會は特別の事情のない限り何日でも許される。先づ歩哨の許しを得て、營内に入り、衛兵所に面會を願ひ出ると、當人を呼び出してくれる。面會所では彼方此方で久し振りに會ふ内親や家族友人達と數談の花を咲かせ、和氣藹々の光景が現出してゐる。



(21)

酒保は兵隊内で、兵隊さんに日用品や飲食物を賣る所だ。又こゝには書物、新聞、雑誌等も備へつけておき、兵隊さんに自由に見せる外、遊戯器具の設備してある所もある。正に兵隊さんに取つては、唯一の慰安場——だからこゝへ一足入るや兵隊さんの相恰は忽ち崩れる。



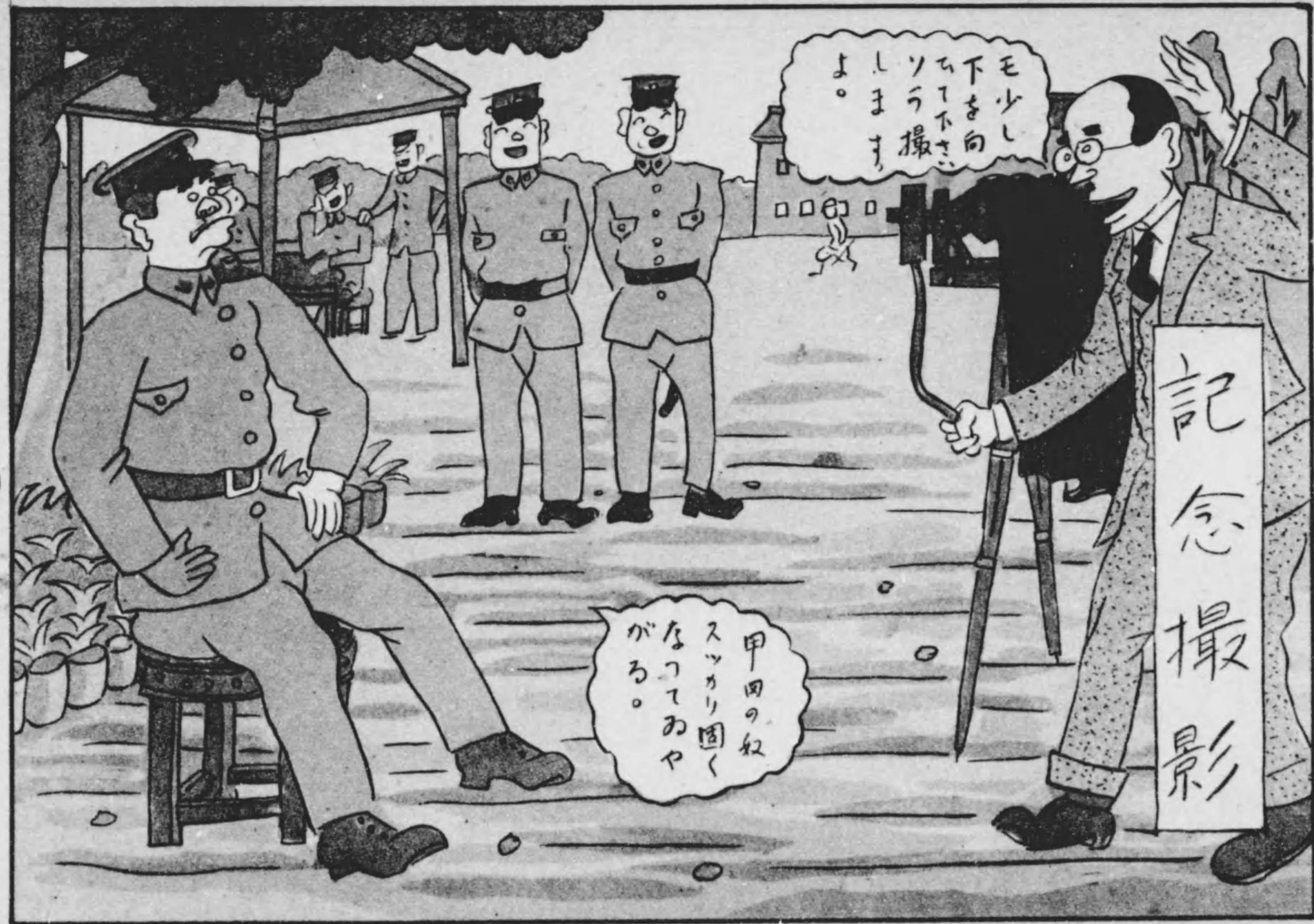
(20)

「入浴用意！ ようし、入れ！」の號令で、下士も兵も一切無差別の赤裸々で、一齊に浴場に突撃だ。「オイ、今度は俺の背中を流してくれ」「よし来た」「やつ！ 班長殿ですか！」これは失禮しました。「ハッハッ構はん、風呂の中は無禮講だ、さア其方に向け」こんなナンセンスもあつて和氣イヤ湯気なんだ。



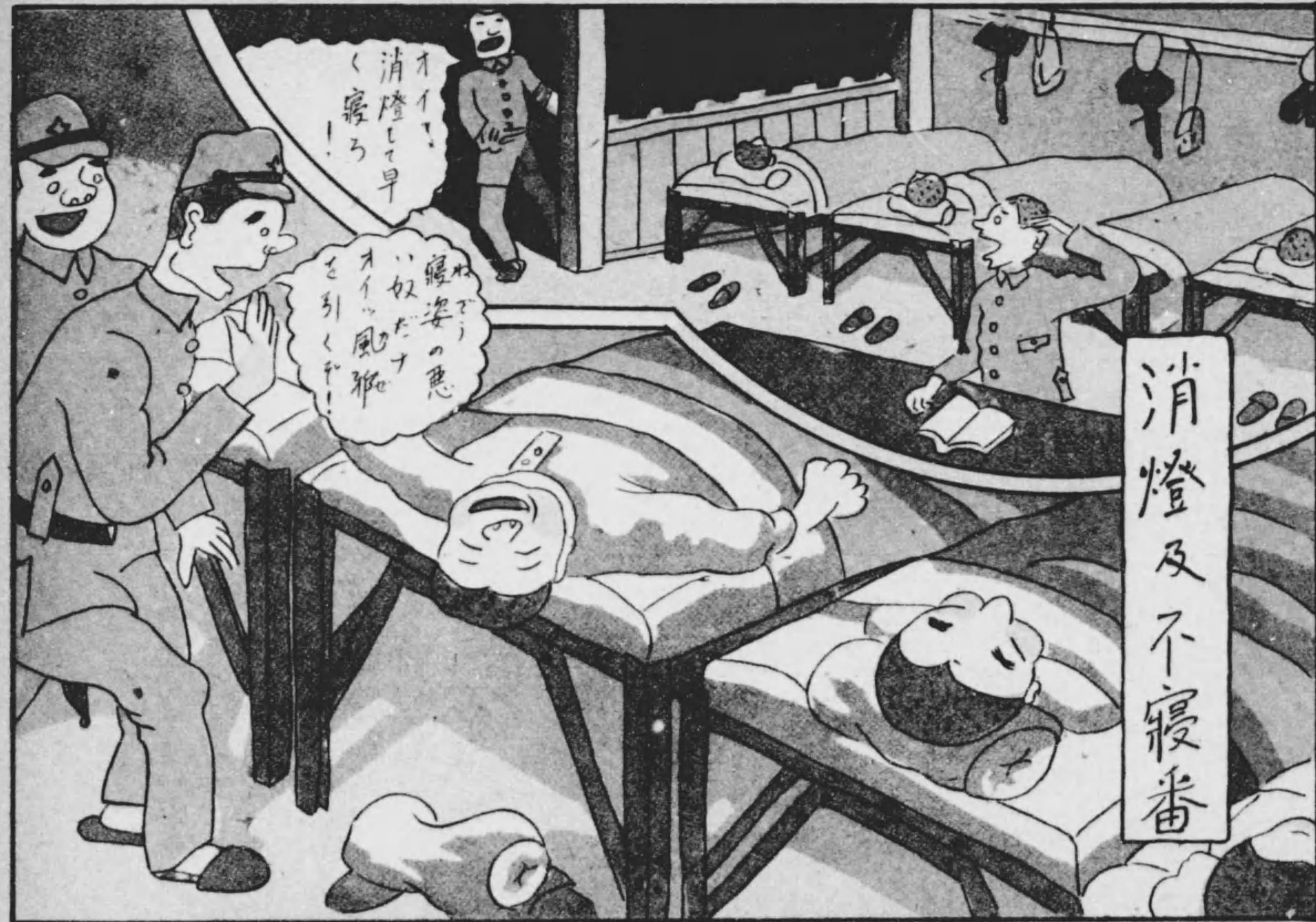
(23)

點呼には普通日朝點呼と日夕點呼とがあつて、毎日朝點二回之を行ふ。日朝點呼は起床した時、軍服を着て夫々所定の位置で人員検査を受けるのである。點呼を受ける者はこの時その旨を内務班長に届出る。日夕點呼は通常消燈時三十分乃至一時間前に行ふが、命令訓示等はこの時に傳達される。



(22)

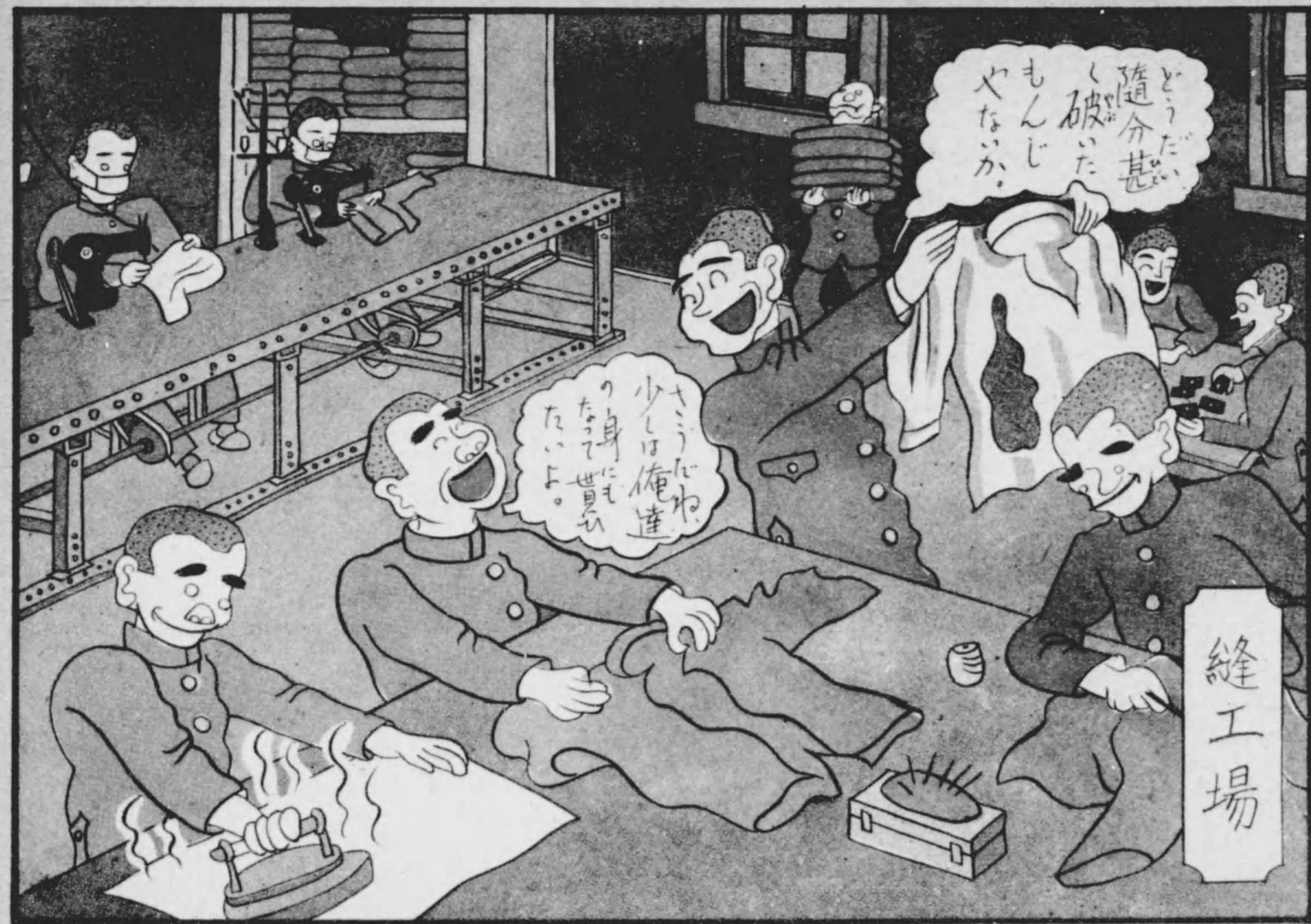
營内には特に寫眞屋が出張して撮影をしてくれる。休日等は殊に大衆喜で、兵隊さん達颯爽として他所行きの前でカメラに絡まる。入營後や、除隊間近になると、千客萬來で、寫眞屋さん、てんでこ舞ひで目の眩るやうな忙しさだ。



楽しい晩餐を終へて戦友達と談笑してゐる中に日夕點呼が行はれる。それから三十分乃至一時間経つと、待望の消燈喇叭だ。この時は一齊に燈を消してベッドに入らなければならない。但し遠燈願ひをして許可された時間内消燈したまゝ勉強することが出来る。やがて、しんと静寂まつた營内を、不寝番がコックと靴首をさせて火氣、戸締用心の爲各兵室を巡檢する



兵隊さん唯一のオアシス、慰安場は娯樂室だ。娯樂室は消燈と一緒になつてゐる所もあれば獨立した娯樂室のある隊もある。そこには書物、新聞、雑誌も備へてあつて自由に讀めるし遊戯器具も設備してあるので、兵隊さん達は子供の様に打興じて遊ぶ。戦談、笑話、和氣話、娯樂室はいつも春の様に長閑だ。



(27)

銃靴を執れば、猛き男の子も、武骨な指先を働かせて、ミシン嚙に向ふ時は、いとも優しい風情ではないか！ 兵営内では被服の縫ひも自ら縫ひ、アイロンをかけ、總て自己のものは自己で始末するのである。これも武士のたしなみの一つ。



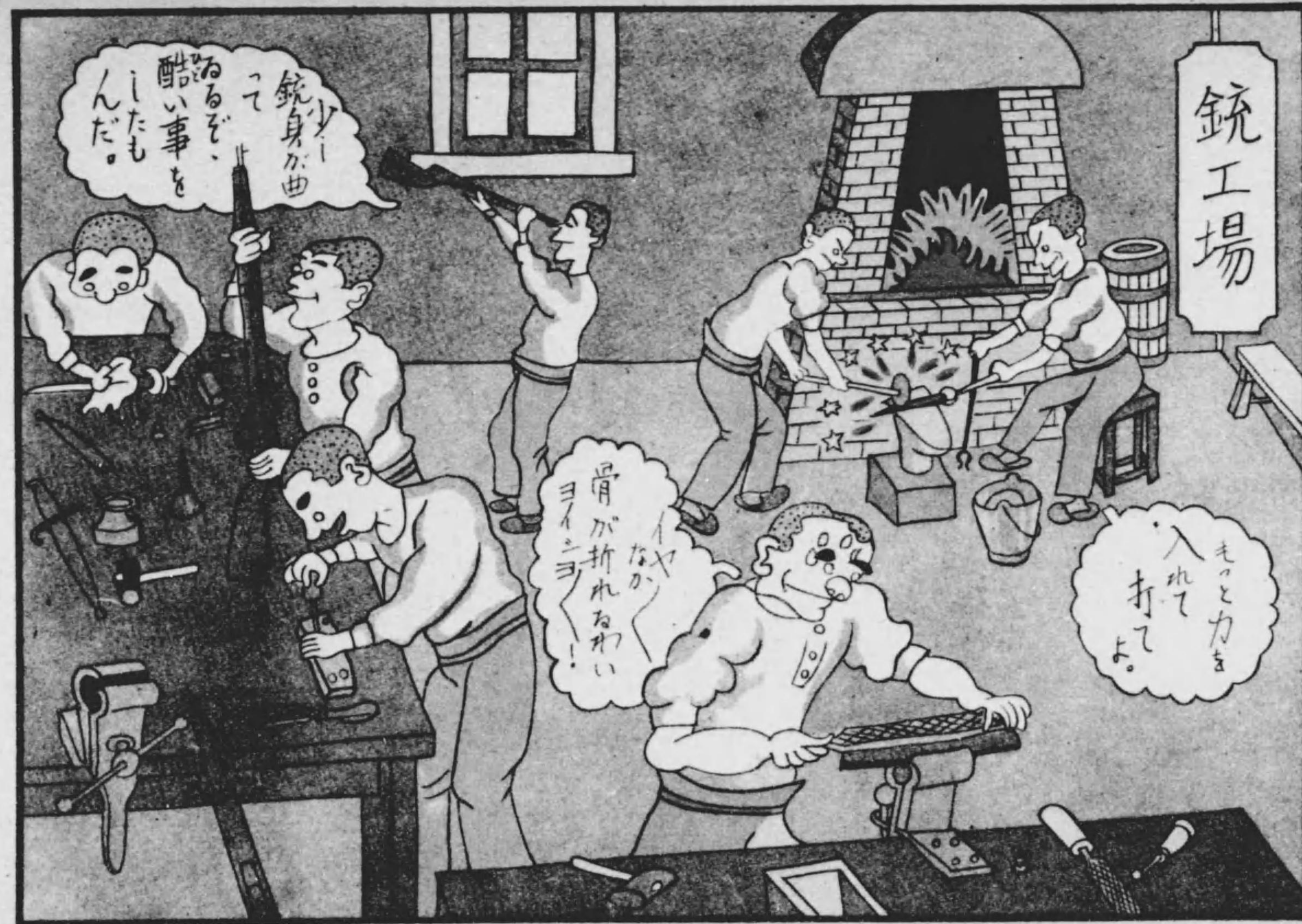
(26)

軍靴の修理、修繕等は外部に頼まず一切兵営内でやる。職人は何れも兵隊さんだ。而もその器用なこと本職そちのけだろオイ、有難いことには、俺達ア、除隊になつても、立派に靴屋で喰つて行けるぜ」と大得意、これもみんな軍隊のお蔭だ。



(29)

木工場は所謂大工さんの仕事場だ。従つて大工出身とか大工に自信ある兵隊さんが選ばれる。大いに誇りを振ふ。勿論、大建築等は専門家にたのむが、兵舎の修理、指物、小道具なんかは朝飯前にアツサリ片付けてしまう。そのお手並正に舌を巻くに足るものがある。



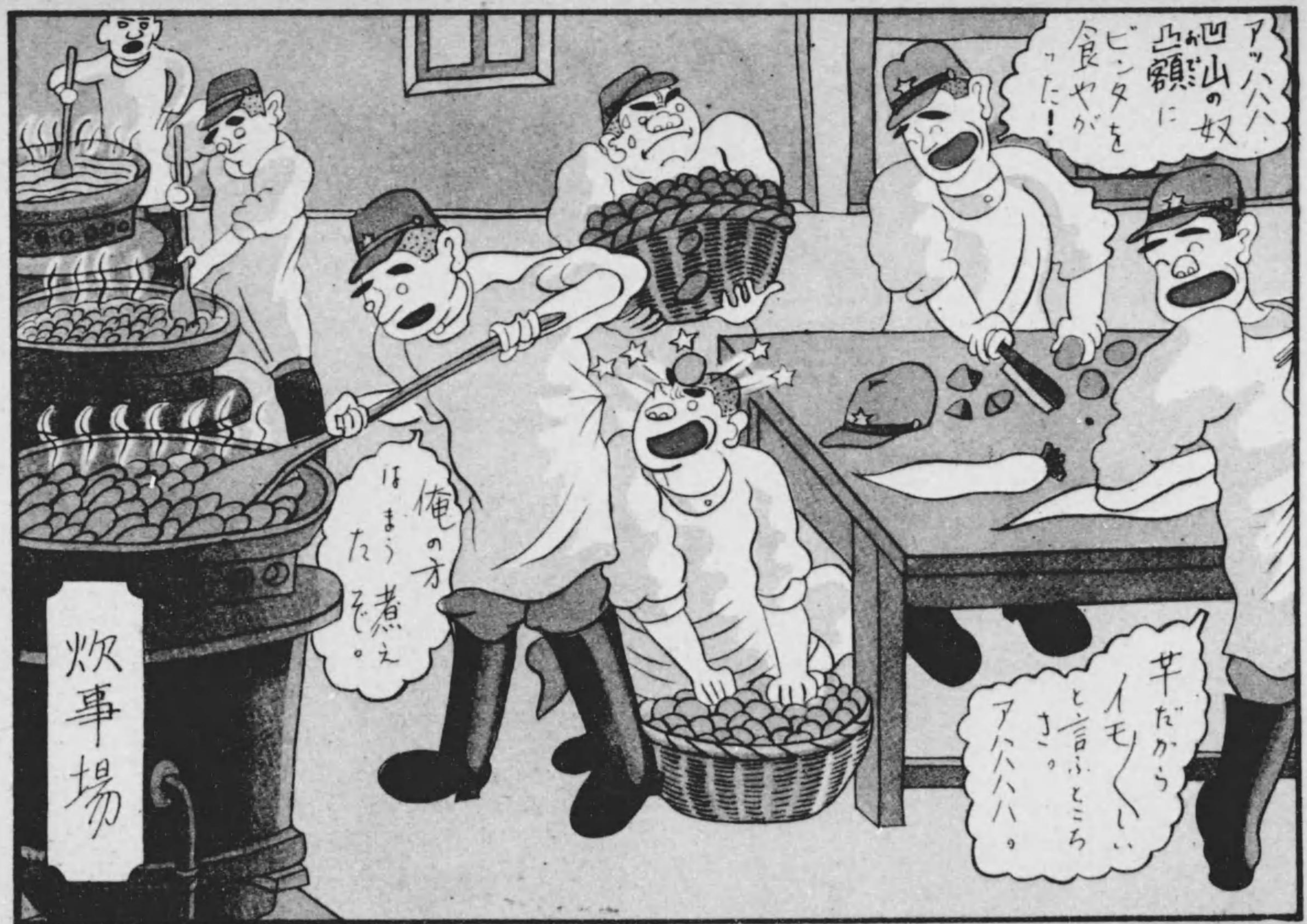
(28)

銃の修理も工廠へ廻すほどの大修理でない限り、大抵隊内の銃工場で作つてのける。鍛冶屋出身の兵隊さんだつたら持つて来たが、どうして素人上りでもテンカン／＼、結構鮮やかにやつてのけ、本職の鍛冶屋さんをメアと言はせる。こゝにも隠れたる鍛冶屋權國のあることを忘れてはならない。



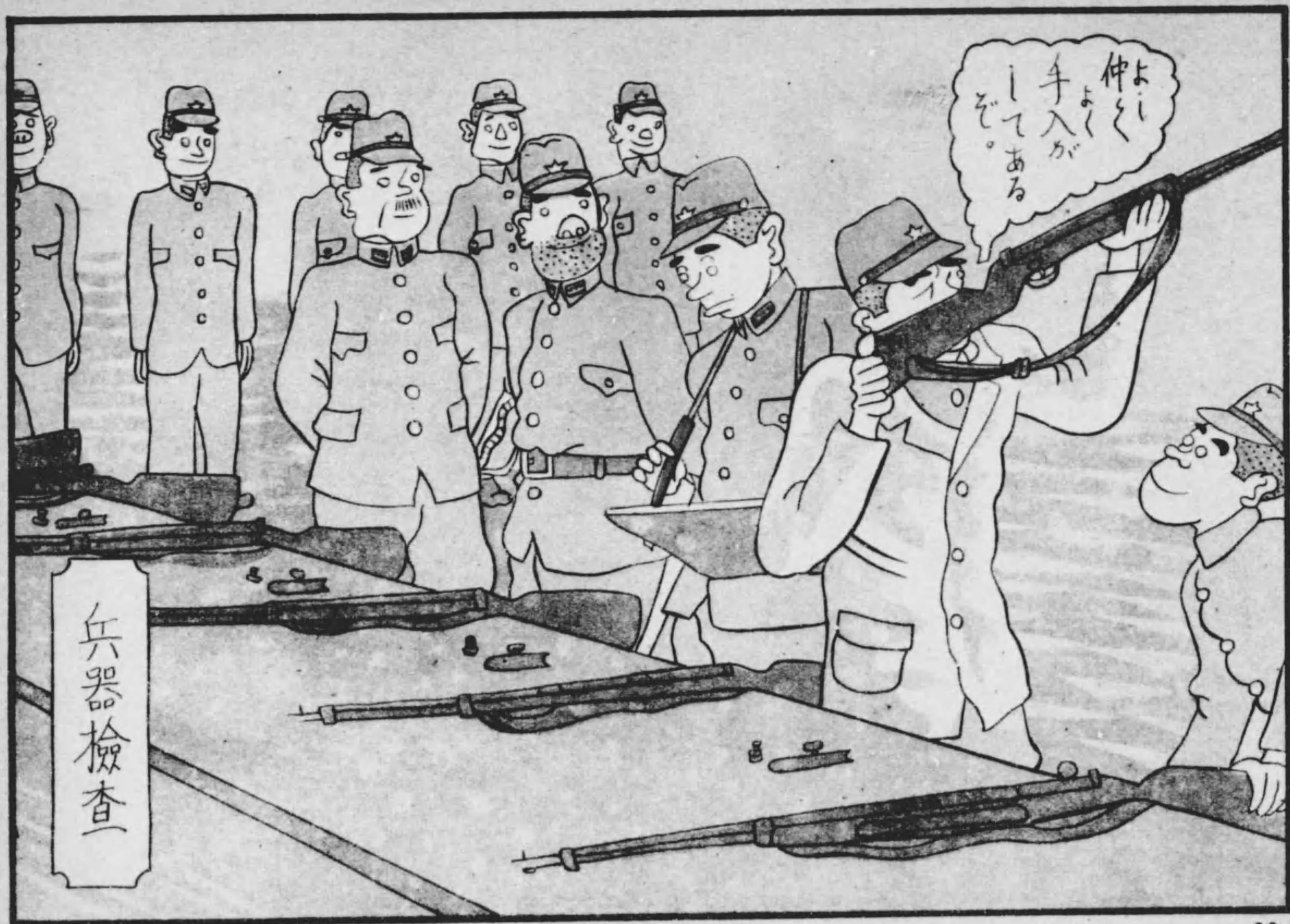
(31)

物言はぬ戦士、軍馬こそは兵隊さんの無二の親友だ。水で洗ってやる。鬃毛でこすってやる。馬糞を御馳走してやる、病馬に手当てをしてやる。見るから涙ぐましい情状だ。それだけに馬もすっかり兵隊さんに懐いて、切つても切れぬ仲良しだ。



(30)

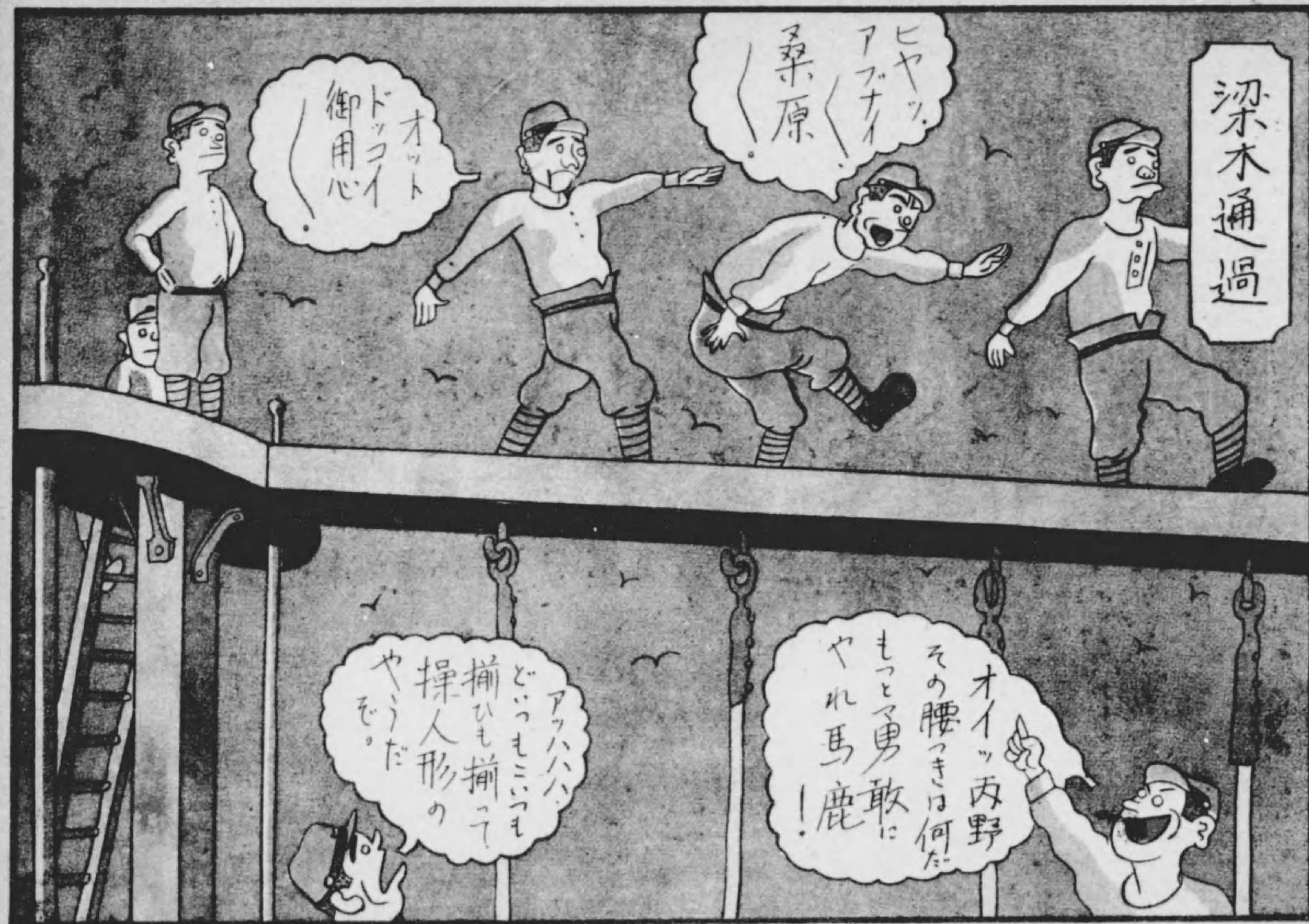
營内の食事は炊事兵によつて調味満腹、カロリー豊富に献立される。炊事兵の庖丁の捌きの何と鮮なことよ！ 日本料理、西洋料理、支那料理、何でもOK！ 正た玄人腕である。かゝるエネルギーによつて、無敵軍の將兵は、不屈不撓の剛志を養ふのだ！



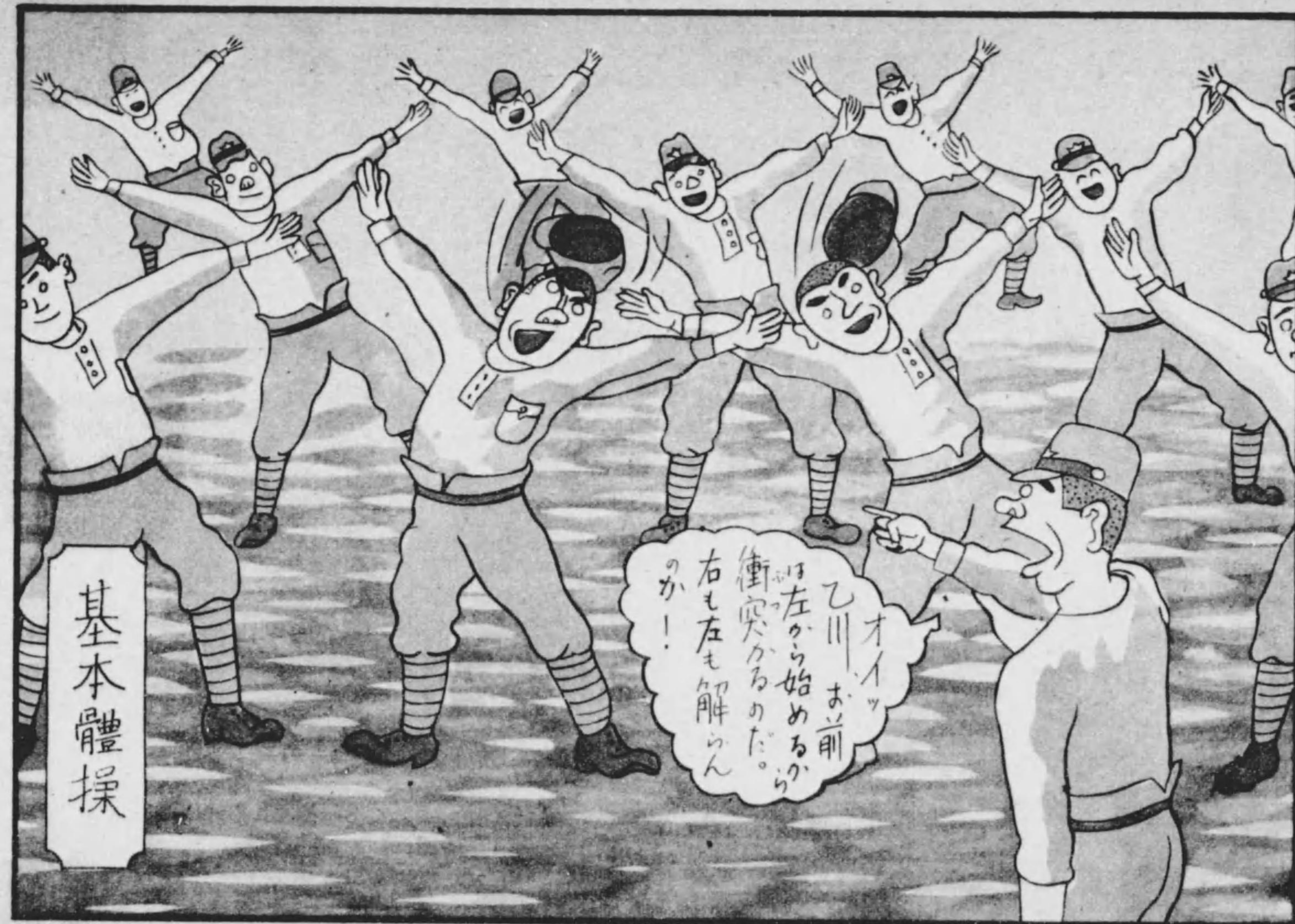
兵器こそは武士の魂だ。兵器を磨くことは軍人精神を琢磨することだ。故に兵隊さんは常に治にゐて亂を忘れずの心掛けを以て、絶えず兵器を磨いて、寸毫の故障もないやうに努めてゐる。従つて、不意に行はれる兵器検査に手入れを怠つて、上官からお目玉を頂戴する様な者は一人もゐない。



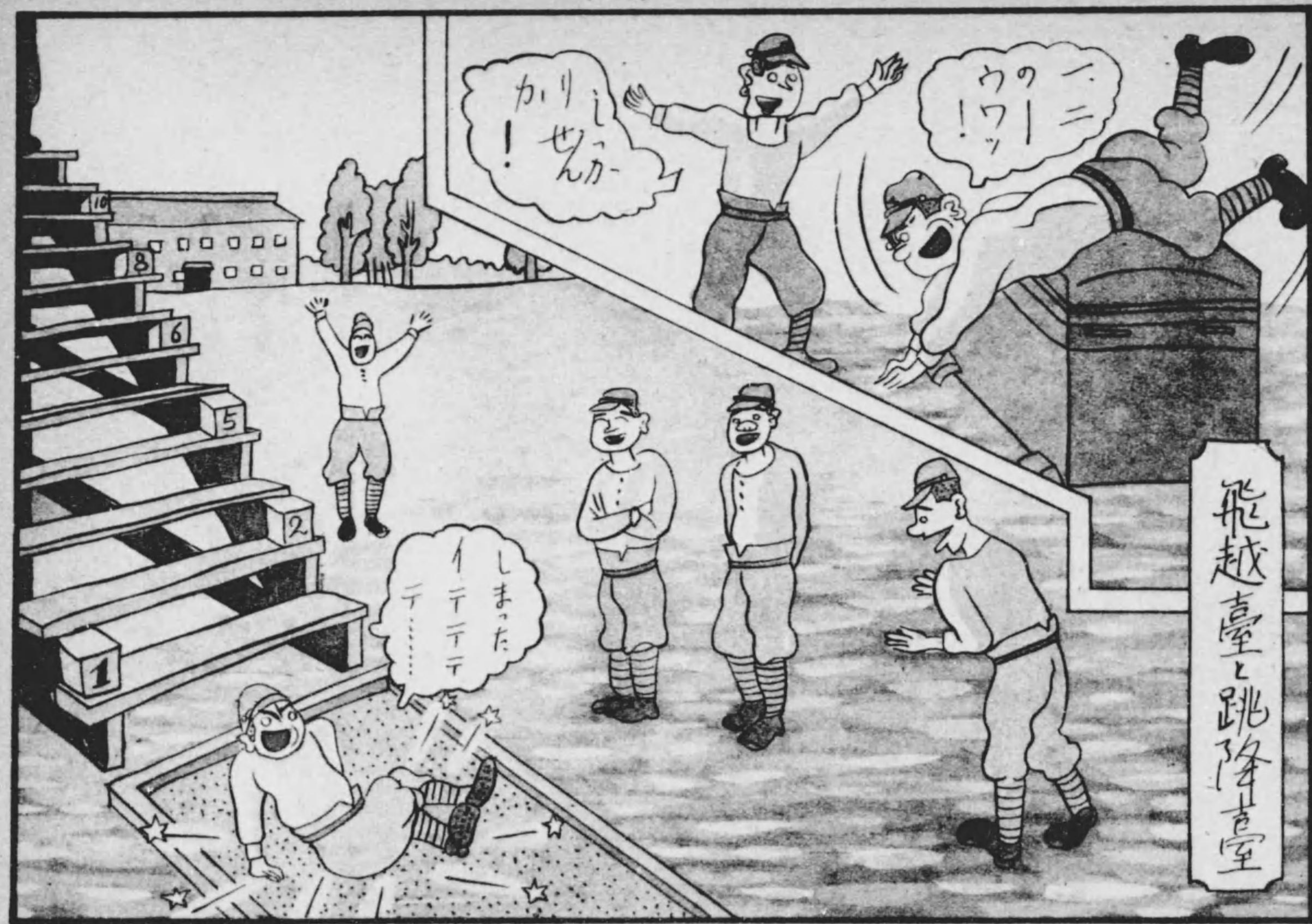
検閲は軍隊の成績を調べ、その進歩發達を促すもので、特命検閲と臨時検閲とがある。特命検閲は、特命検閲使(大将)によつて數年毎に行はれ、臨時検閲は師團長が毎年行ふ。この他、師團長、大隊長が一般教育、補充兵教育、特種教育、勤務演習教育、銃劍術等に就て臨時行ふことがある。



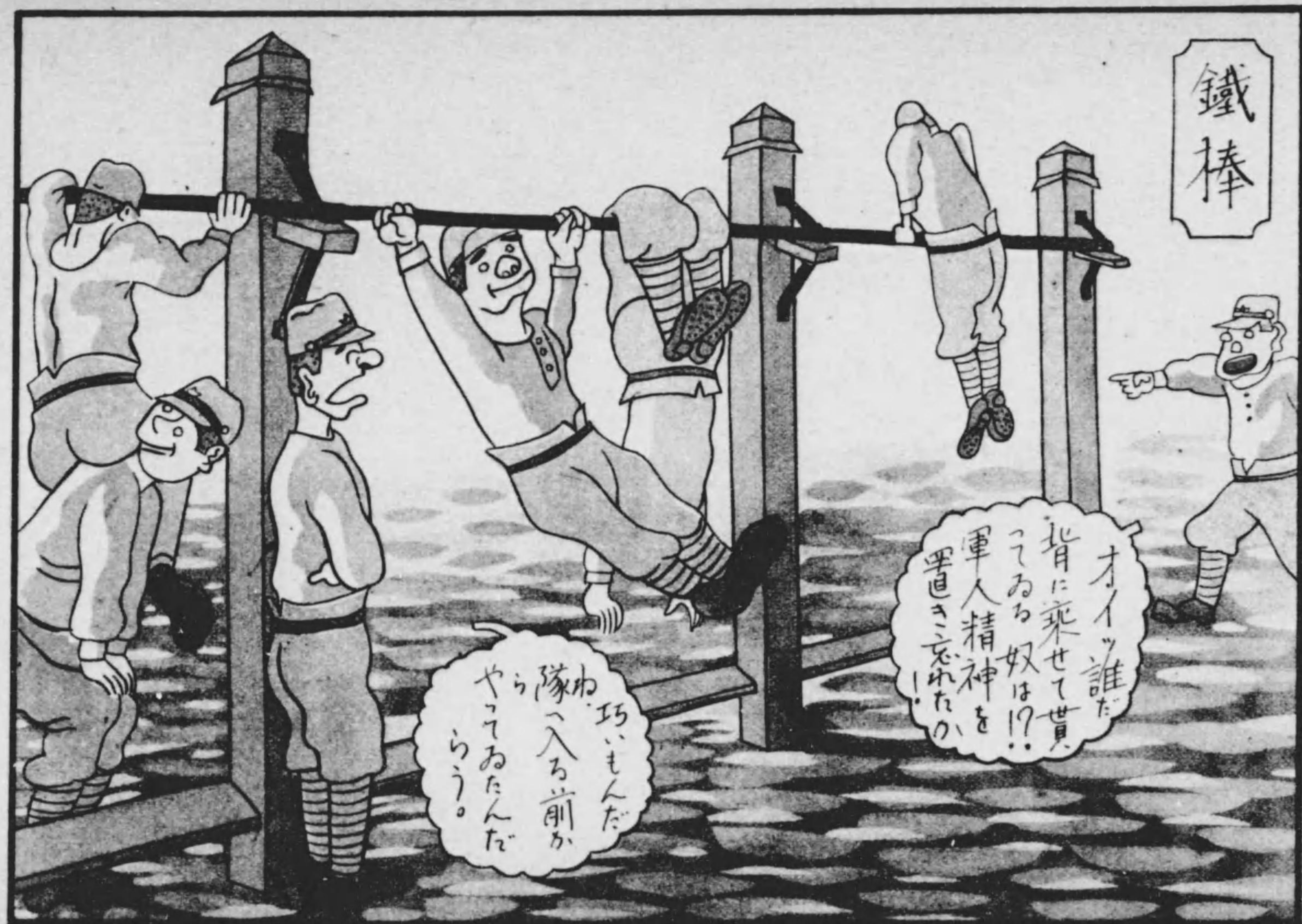
實戦に臨めば、断崖絶壁の一本橋を渡らねばならぬ場合にも遭遇しよう。谷川の丸木橋ならぬ梁木上を双手をひろげて恐るゝ渡つて行く新兵も、やがては狼のやうな敏捷さで、スルクと馳せ渡れるやうになるのである。身体能力の訓練は、強兵をつくる第一要諦である。



「オイッチニ〜」ハチ切れるやうな元氣イッパイの號令が、營庭中にひびく。かうして基本體操は毎朝つゞけられる。果敢無双の皇軍將士の闘志は、一にかゝる心身鍛練の賜物なのである。



歩兵は如何なる條件の悪い地形の影射に於ても、敏捷に行動出来なくてはならぬ。そこで平常から飛越、跳降、梁木、鐵棒等によつて訓練を積んでおく必要がある。支那事變に於て神速皇軍の名を世界に轟かし得たのも、一にかゝる猛訓練の賜物なのである。

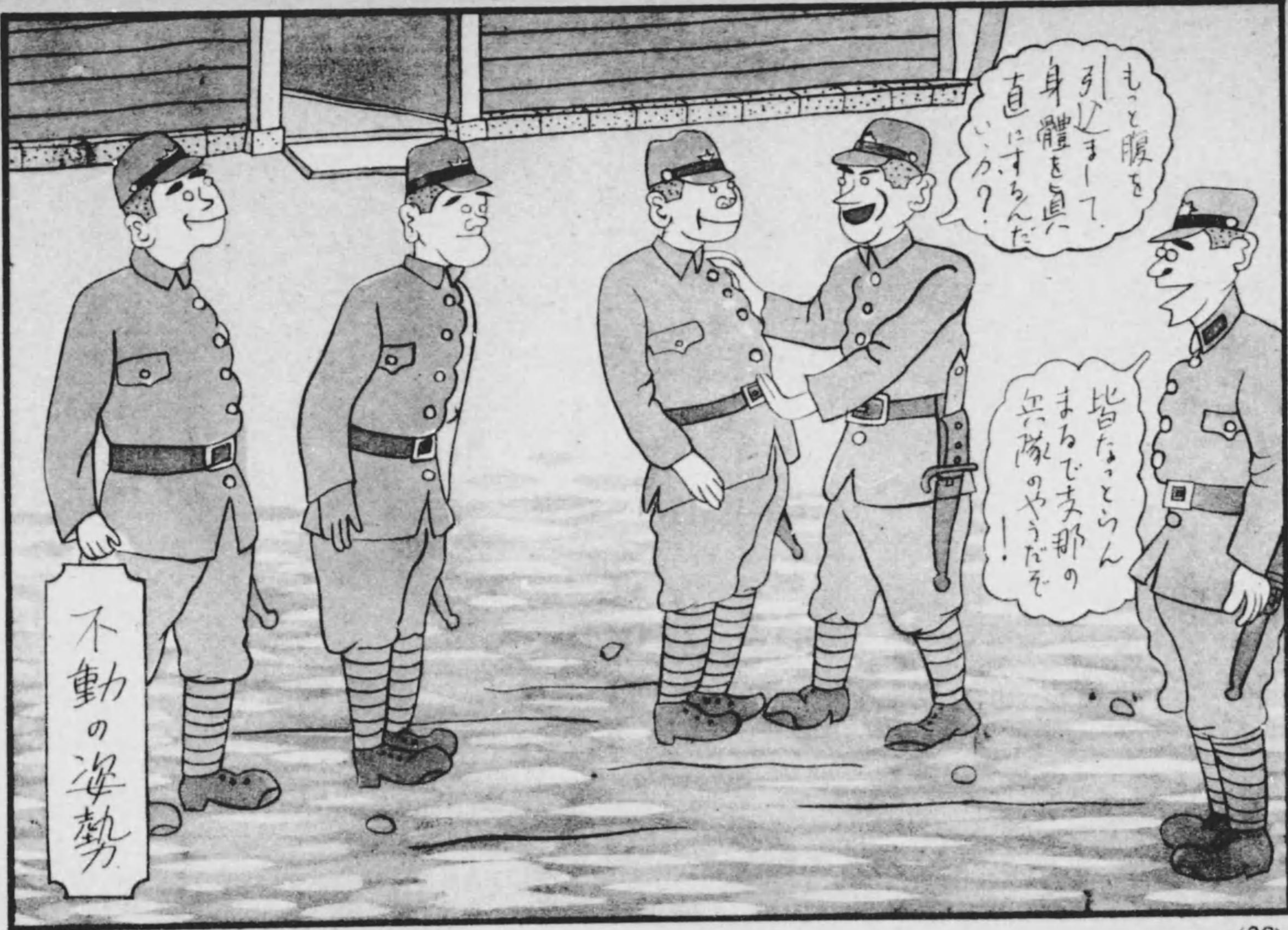


鐵棒は身體敏捷と戦時に於ける訓練を兼ねたものだ。行軍の敏捷は、歩兵として、最も尚ぶ所なので、平常から鐵棒によつて訓練を積んでおくのである。最初は「貴様英後が重いぞ、唯かりしろ!」などと叱られるが、間もなく強も能負けるほどに上達する。

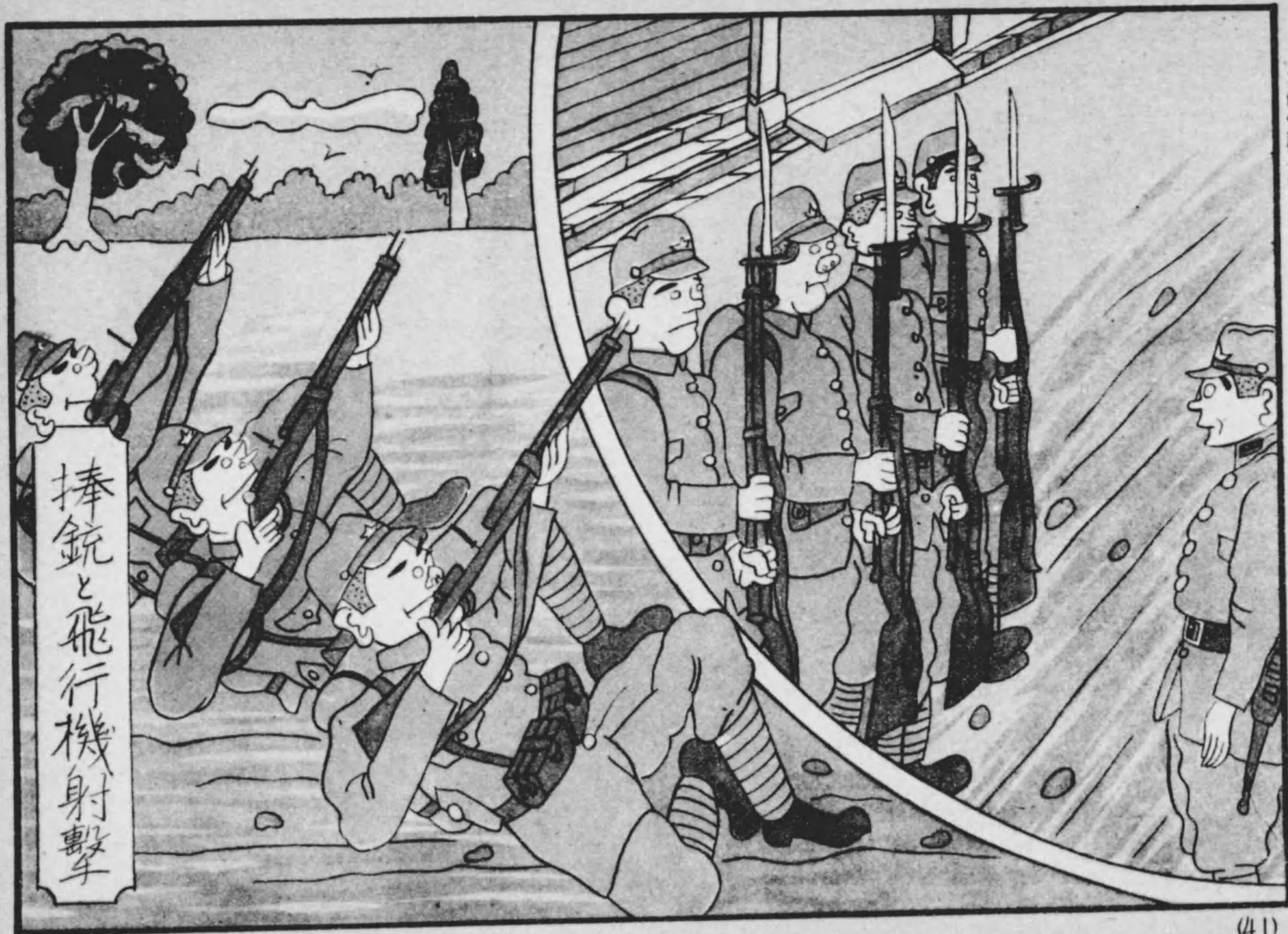


折敷は「伏せ」の號令が下つたら、左足を約半歩踏み出すと同時に、上體を半ば右に向け、左手で銃筒を前に拂ひ、右脚を曲げ、その股を地に着け、肩を右足後方の地に着け、左足を立て、右膝前に銃を立てる。敵活に地形地物を利用して行ひ、敵の目視から避けなければならぬ。

折敷と伏せ



不動の姿勢は軍人基本の姿勢であるから、軍人精神が内に充實し、外敵嚇威正でなければならぬ。「氣を付け」の號令と共に、兩脚は一直線上に揃へて着け、兩足は約六十度に開き、兩膝は破くせずに伸ばし、兩膝は稍後に引き、兩手は自然に垂れ、顔は眞直ぐに保ち、兩眼は前方を直視する。



(41)

擲銃は天幕、軍旗に對して行ひ、停止間にあつては將校に對して行ひ、行進間にあつては、中隊長以上の直屬士官に對して停止して行ふ。小銃による飛行機射撃は通常距離六百メートル以下の場合に於て行ふ。照準鏡は百メートル以内は飛行機の前線、二百メートル乃至四百メートルは眼に映じた飛行機の長さの三倍前方、五百メートル以上は眼に映じた飛行機の長さ六倍前方につける。



(40)

速歩行進は「前へ……進め」の號令で行進を始める。「前へ……」の時、銃を肩に擔つて、「進め」で行進を起す。踵は真直ぐに保ち、左腕は自然に振る。速歩は一步の長さは踵から踵まで七十五歩、その速度は一分間に百十四歩を基本とする。行進はすべて勇往邁進の氣概がなくてはならぬ。



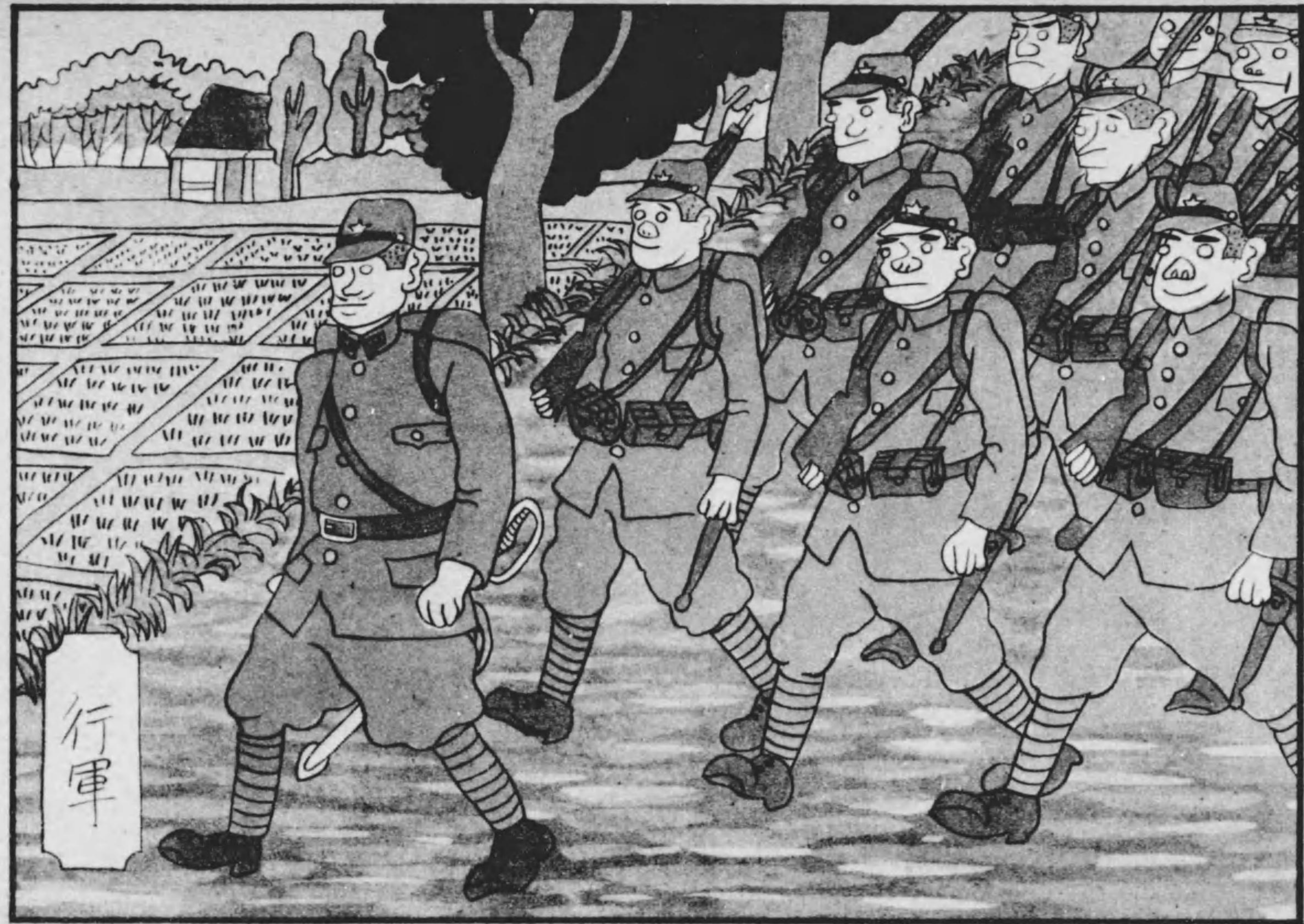
演習の目的は實戦に近い状態で集團訓練を施し、幹部及び兵の教育の完全を期するに在る。而して演習の種類には、諸兵連合演習、師團秋季演習、師團對抗演習、特別大演習、各兵特別演習、特種演習等がある。何れにしろ、諸兵種互ひに協力一致して、それらの目的に對し、各自固有の力を最高度に發揮する様に努めなくてはならぬ。



照準を定める爲には銃身上に照準具が備へてある。照準具は照星及び照尺からなり、照尺には照門がある。照準を定めるには、照門上縁の中央から照星の頂きを通視し、目標と一致させるのである。射撃には照準が最も肝心であるから、他までその正確を期さなくてはならぬ。



偽装とはカムフラージュ、即ち兵器の色を塗り變へたり、兵が草を被つたりして、他の物に見誤られるやうにして、敵の目を誤魔化すことだ。歐洲大戦にはこの方法が盛んに利用されて以來、日本の軍隊でも用ゐる様になつた。どうしたら巧く敵を取るか、そのために偽装の演習も度々行はれる。



行軍の種類には強行軍と急行軍、夜行軍の三種がある。強行軍は休息の時間を減少し、必要あれば晝夜急行軍を続ける。急行軍はその時の事情によつて短時間に目的地に達する爲に歩度を速め、休憩の時間を減らして行軍する。夜行軍は軍隊を急に移動する必要上、拂曉を待つ事の出来ない場合行ふのである。



(47)

軽機関銃による射撃は、體の前方を内斜面に接し、兩肘をつき、右手で銃把を握り、左手で照準を上方に起し、彈匣の蓋を開き、彈藥を取出し、彈頭を前にして裝填架内に備めて發射用意につく。軽機関銃の射撃は點射（約三乃至五發）を、時としては連發射及び連射を行ふこともある。



(46)

攻撃にしろ、防禦にしろ、地形地物を巧みに利用して、味方の存在を敵に知らしめず、且つ被害少く、敵に大なる損害を與へることは近代戰術の要諦だ。かゝる意味から、演習に際しては、地形地物の利用の研究がさかに行はれてゐる。



(49)

斥候に選ばれた者は、その責任極めて重きと同時に至大の名譽と言はなければならぬ。斥候の目的は敵情偵察に在るが、假令敵情を探り得ても、之を報告する時機が遅れては何の役に立たない。故にその任に當る者は、沈着、剛毅、警戒、熱心、冷静、以て進退の舉作に寸毫の遲延する所あつてはならぬ。

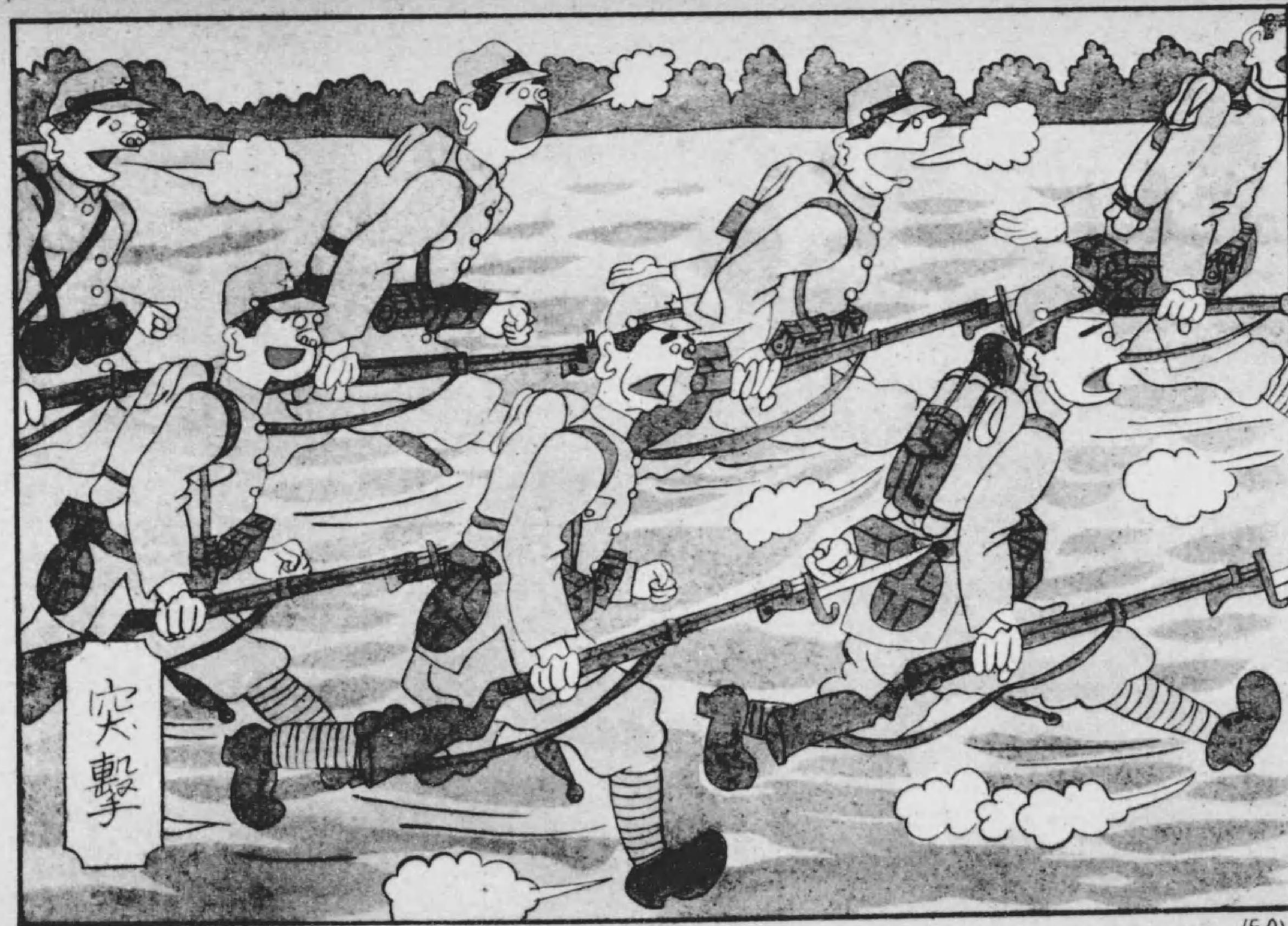


(48)

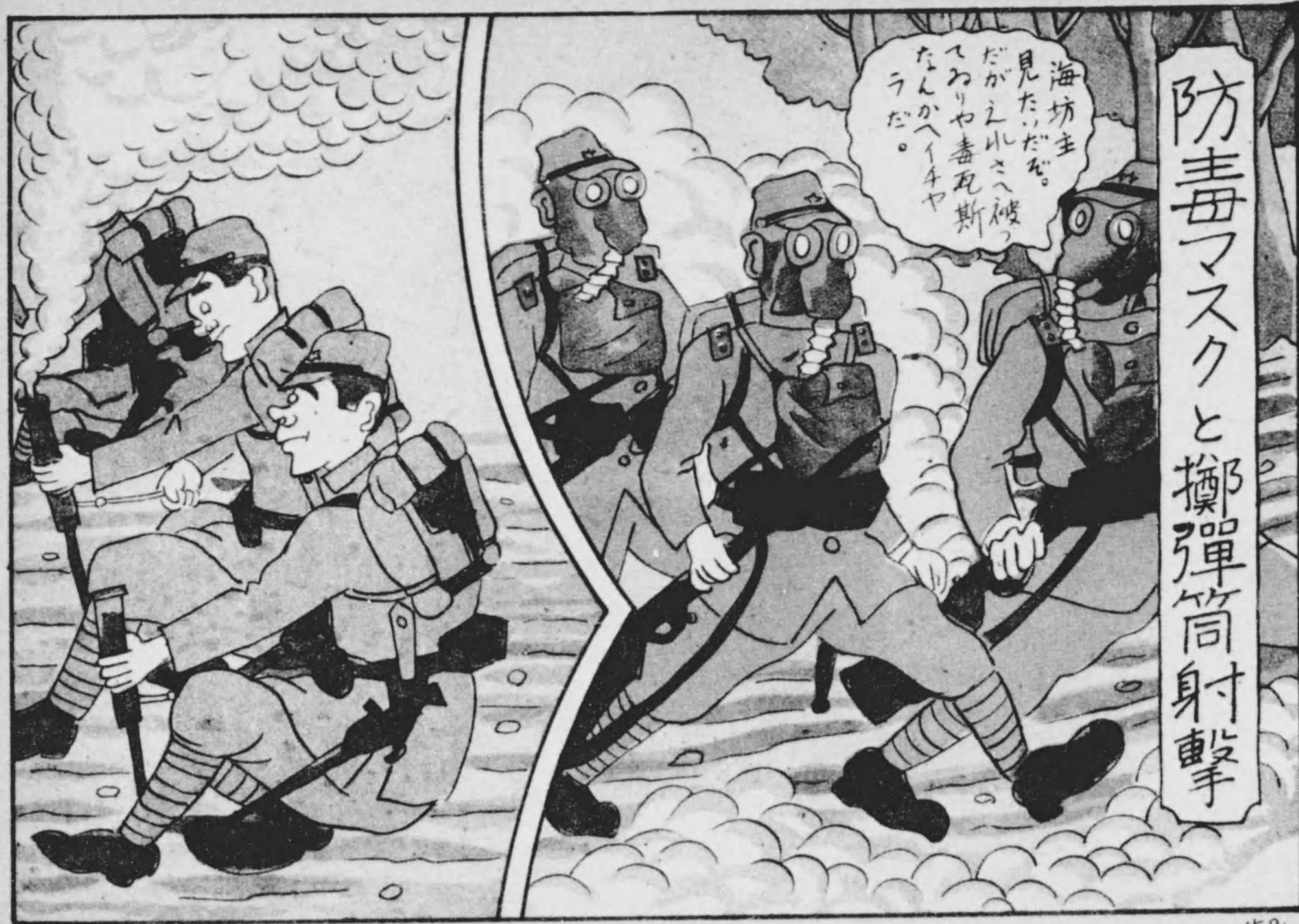
歩哨の務めは蓋として、我斥候に傳令使、味方の部隊に將校の、外を通さず止め置きて、小哨長に報告す。夜は殊に注意して、近づくものに銃を向け、是れを誰かと誰何する。三度間へども答へずば、唯一撃に撃ち殺せ、これぞ歩哨の任務なり。(軍隊歩哨の任務)



兵隊さんの俸給は十日毎に主計から渡される。俸給は等級及び任地によって異なるので一概ではない。但し、戦時は戦時手當として二割増し、出征すれば八割増となる。何處も同じ俸給日と言ふものは悪くないものと見える。兵隊さんのこのニコ／＼顔を見よ。



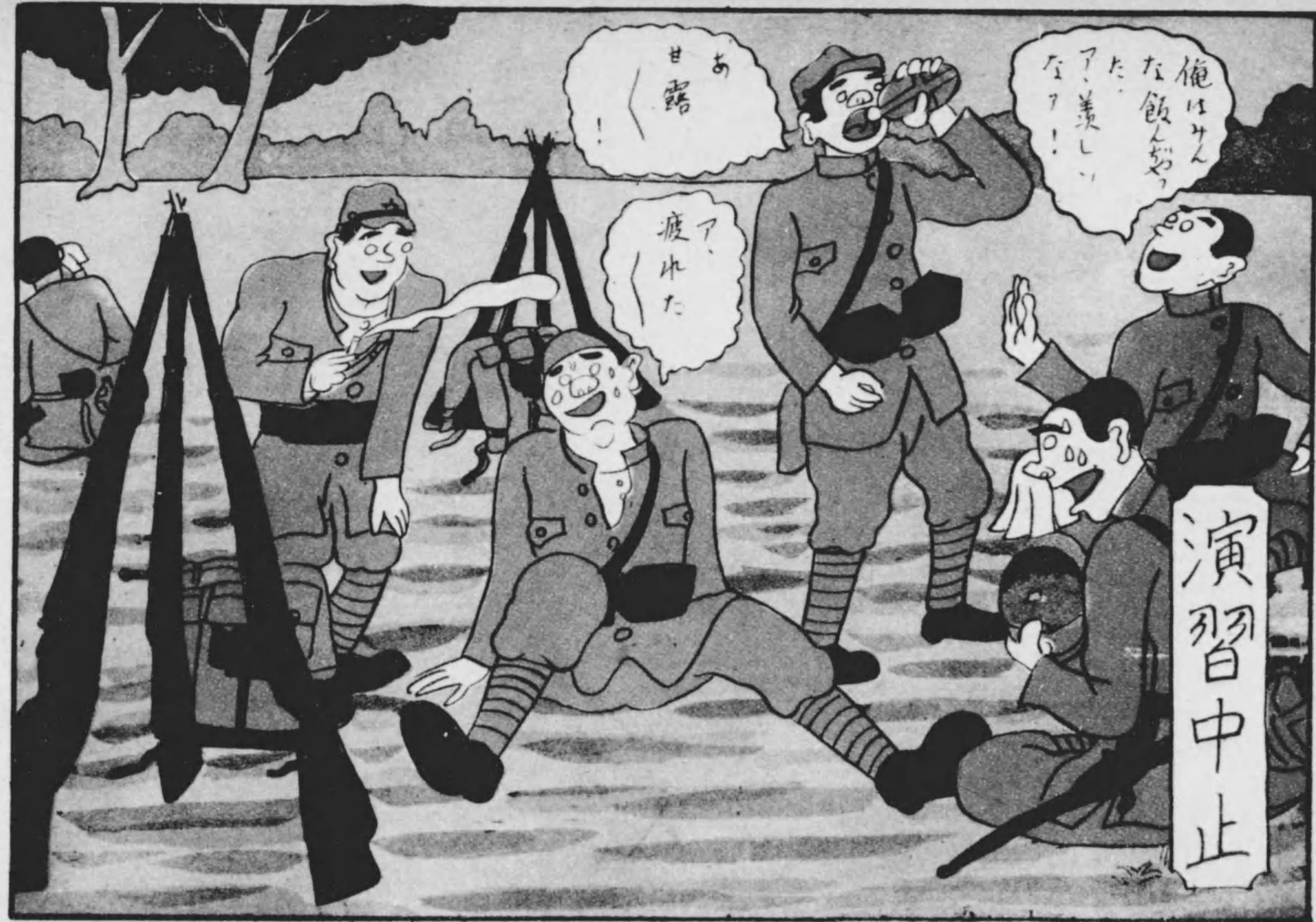
突撃には勇猛果敢、戦はずして既に敵を撃倒するの精神が充溢してゐなくてはならない。突撃するには先づ兵に著剣させて「進め！」の號令を下す。この號令で兵は銃を構へて突撃の態勢を執る。次いで「突つ込め！」の號令で、ワツと威嚇を擧げ、敵中目掛けて突進して格闘する。この突撃の果敢さに於ては皇軍は正に世界無比だ。



防毒マスクと擲弾筒射撃

海坊主
見たんだが
だがこれさへ破
てりや毒瓦斯
なんかヘイヤ
うだ。

毒瓦斯には窒息性のもの、嘔吐性のもの、腐爛性のもの等がある。これを防ぐには防毒面や防毒衣を使用する。防毒面は毒瓦斯を含まない空気のみを吸入する様、中和剤、吸取剤等を通過させて空気を呼吸する装置をしたものである。擲弾筒とは仕掛の極く簡単な歩兵用の短砲で、曳火手榴弾其他の特殊な弾丸を近い距離から射出するに用ひる。



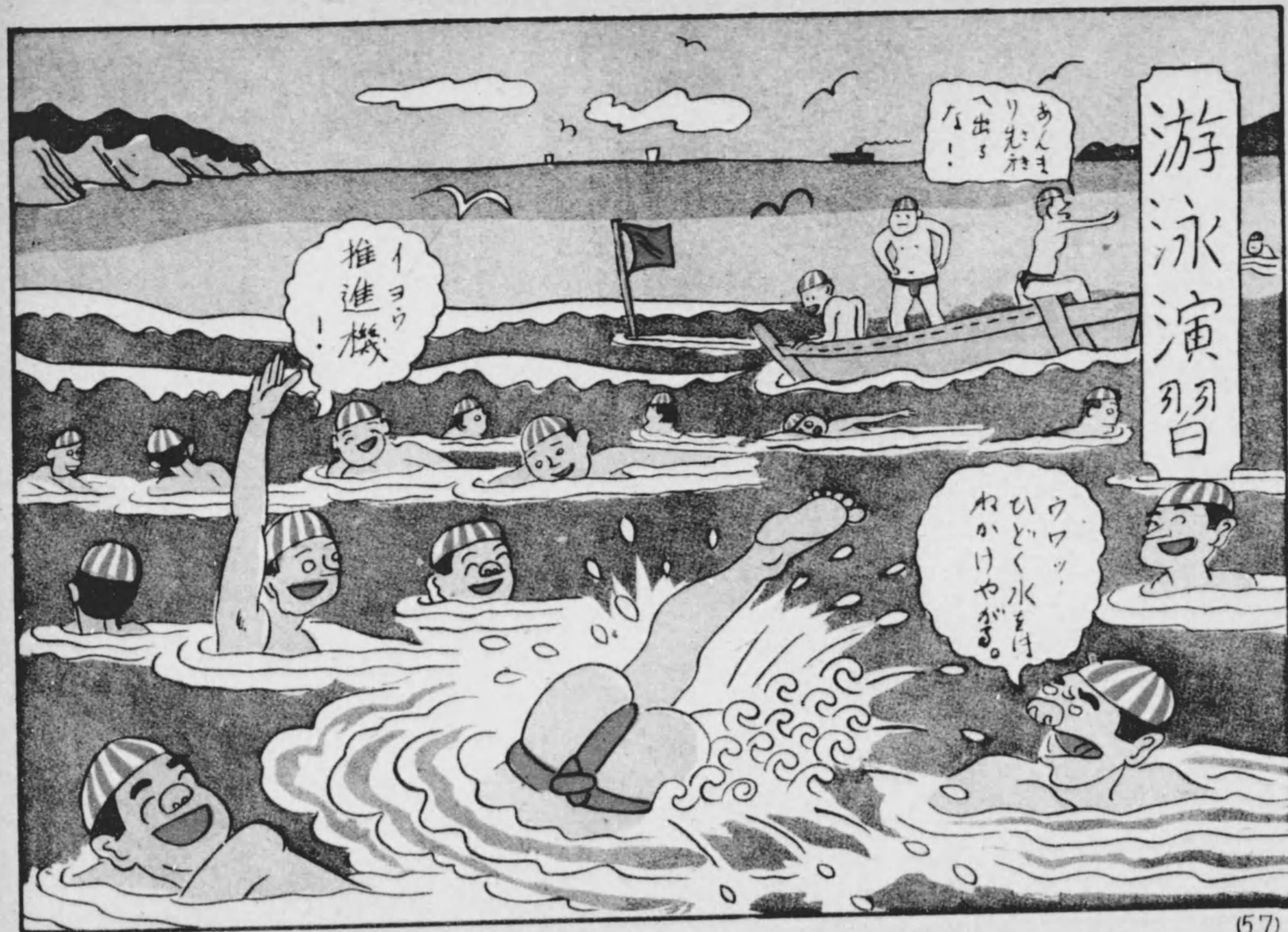
演習中止

俺はさん
な飯んぢや
ア、羨し
なア!

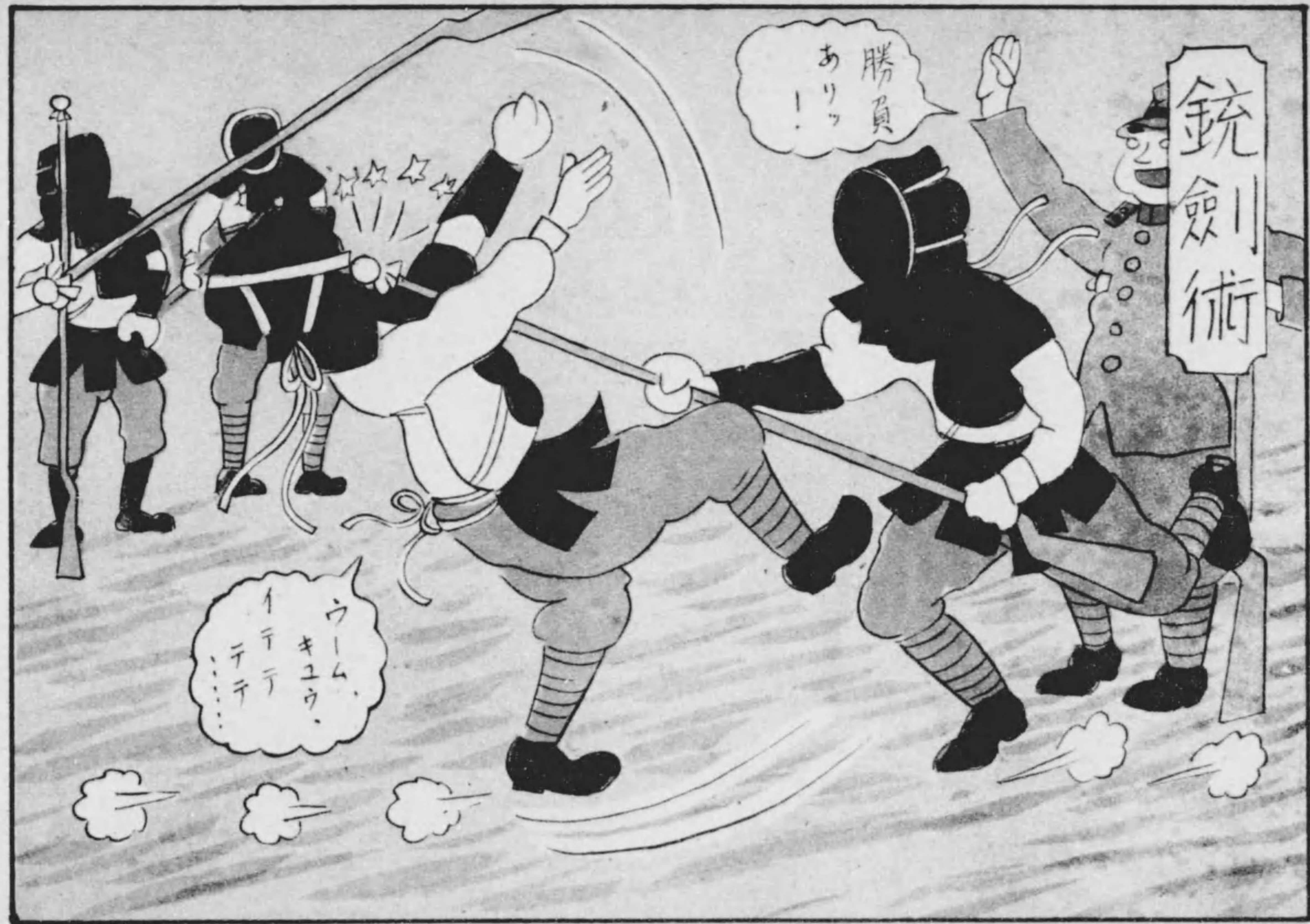
疲ア
休めた

あ
甘露

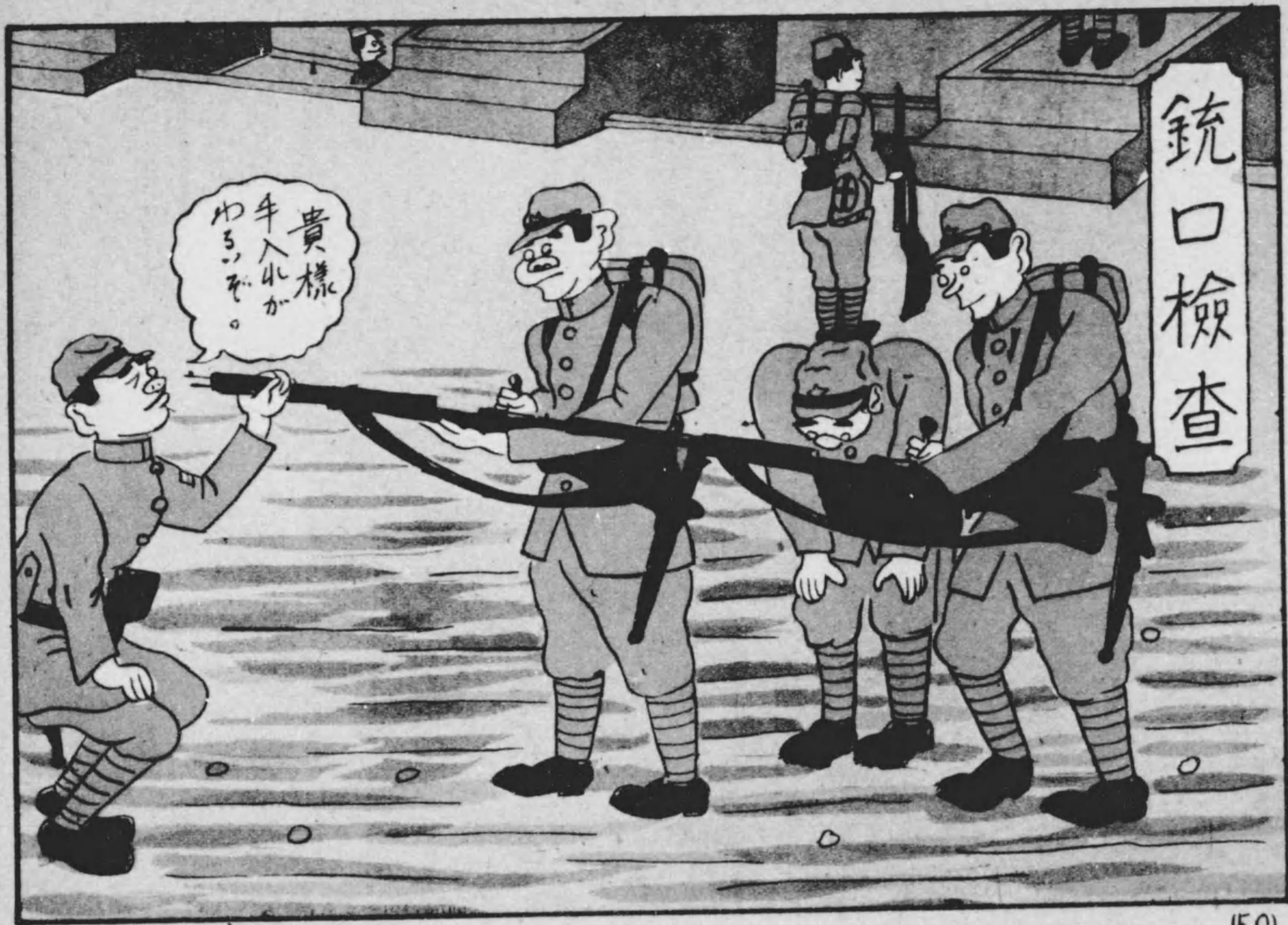
演習中止の信號が下つた時には、演習部隊は、斥候から散兵に至るまで現在の姿勢と隊形を變へることなく、その位置に直ちに停止する。そしてそのまま休憩しても差支へない。演習中止の信號は「一止まれ」の無音及び烟花で知らせる。飛行中の飛行機に對しては布板で知らせる。



如何に陸の精銳を誇つても、水へ入れば金龜同然では何にもならない。戰場には河もあれば沼もあれば海もあるのだ。そこで毎年夏軍隊では盛んに游泳演習が行はれる。即ち御覽の如く陸の精銳は、海へ入つても、河軍も敵負けするほどの手練を披露する。



「エイツ」といふ操縦、「ドウツツ」といふ腹の底から送り出る鋭い集合、途端、銃剣の切先は火花を發して相手の胸元をつく。サツと引く素早さ、又も突き出す勇猛さ。眞に電光石火の早業! 日本兵獨特の白兵戰の妙技はかくて鍛へ上げられるのだ。



銃の命中を確實にするには射撃前必ず銃腔に油を塗る必要がある。若し同じ銃で連続射撃をする場合には約五回毎に塗油する必要がある。又十五發發射後は手入れでなければ發射してはならぬ。なほ發火しない彈藥があつた時は内部をよく検査する。かゝる爲に銃口検査は射撃前、射撃後に必ず行はなくてはならぬ。

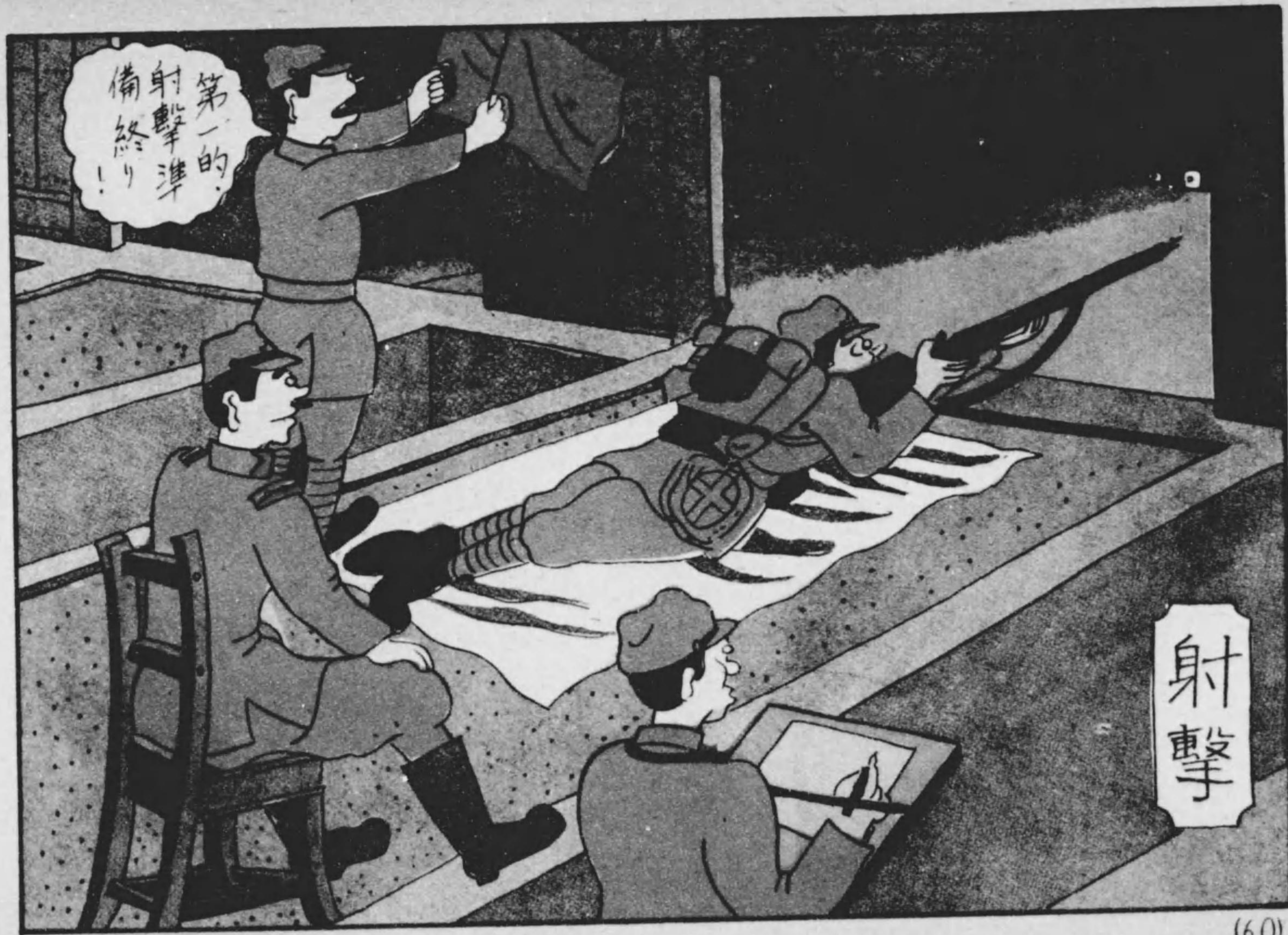


豫行演習とは觀兵式、檢閲或は定期射撃の前に練習の目的で以て行ふ演習のこと、之によつて十分の演習を積んでおき、當日の完璧を期するに在る。従つてこの演習は猛烈に行はれる。師團によつて異なるが、大體豫行演習は一年間に六回位行はれる。かくして晴れの當日には天晴れの手並を見せ、賞讃を博するのである。



(61)

銃の洗滌とは、射撃後に錆を防ぎ、銃を除去する爲めに行ふことだ。付属品を取外して掃除手入れをする他、外部を磨き、更に内部をも掃除しなければならぬ。銃腔、薬室を掃除するには洗滌用油をつけた布片で何度も拭ひ、最後に乾いた布片で洗滌用油を除去して油を落つておく。



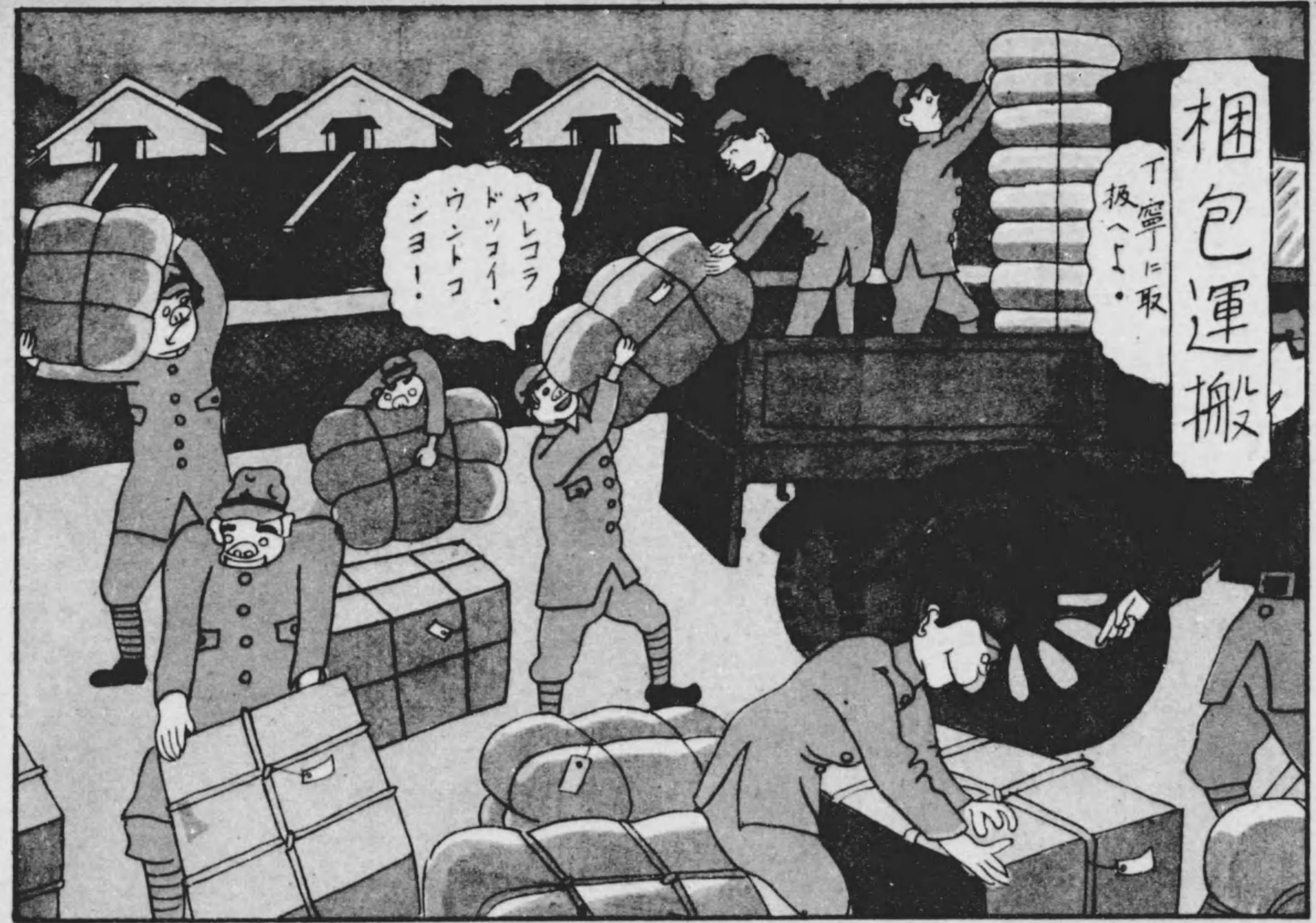
(60)

射撃の方法には立射、膝射、伏射の三種がある。立射は立つて射撃し、膝射は尻を地につけ右足を曲げて倒し、左足を曲げて立て、その膝の上へ銃を支へた左手の肘を載せて射撃する。伏射は體を地に伏せて上半身をもたげ、両手で銃を支へて射撃するのである。



(63)

廠舎は各師團専有のものと、共通のものがある。多くは夏期間、各科の兵が交替して夜営し、特別の訓練を行う。又、戦中出張して訓練を行うこともある。廠舎は多く閑静な所に在るので、兵營から此處へ来た兵は、籠から放たれた小鳥の様に、急に快活になる。



(62)

輸送兵は萬端を練して間断なく彈藥、糧食、被服等の軍需品の輸送供給を行つて、全軍に戰力の資源を供給する。その運搬は馬、車輛、自動車等を使用し、例へば彈丸雨霰の中でも軍廠に隨つて事も後顧の憂ひなからしめるもので、その責任の重大な點は兵と少しも異ならない。



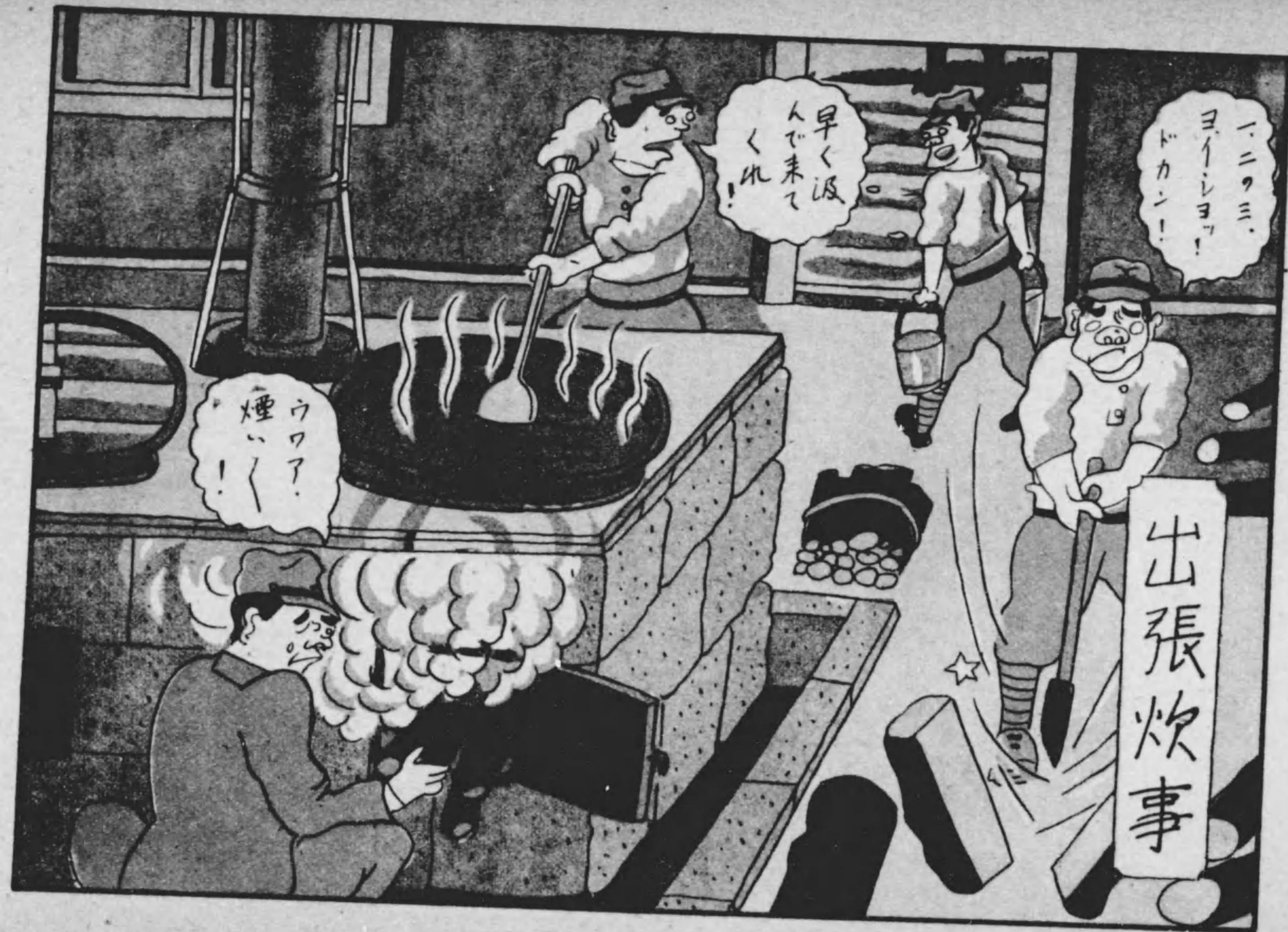
水の如何に節いものかと言ふことは今度の事變でもよく分る。だから、軍隊では平生から水を節約し貴重に扱ふ。炎天の行軍でも水筒一つで一日の行軍に耐へられる様に訓練し、更に水筒半分で一日の行軍に耐へられるやうにするといふ調子だ。かゝる水の訓練あればこそ、皇軍は水なき支那の曠野を疾驅して囂々たる偉功を擲つたのだ。



食事當番は、軍の兵站部だけに頼る使命軍だ。しかも一寸お毒見といふ術もあるので、食料の志願者が續々出る「オオイ、貴様今日は食事當番か、俺の飯の盛りをよくしてくれ」など、平生仲の良いくない奴までお世辭を言ふから現金なものだ。



演習とは兵隊を訓練する爲に、實際の戦争の如くにして行ふ陸軍の教練である。秋季演習は各師團が毎年行ふ演習であるが、實戦そのまゝの白熱戦が行はれて、將士の血を沸かす。演習地の各民家では、これら兵隊さんを慰勞する爲に湯茶を接待して大歓迎する。



今日日又進行軍ださうだ。フレ一ッ、緊要百パーセント、舌の巻く御馳走するやうな御馳走を捧げてやるかな「ワンさうとも、何しろエネルギーの補給は我軍の杓子加減でつだからなア」昨夜も兵隊、敵舎の御馳走と来たたら、全くたえられねえと言つてたぜ「ウハッ、さうかい、御世辭と思つてもうれいなア」兵隊さんの保健を一手專實に引受ける本部隊のハリキリ方つたらない。



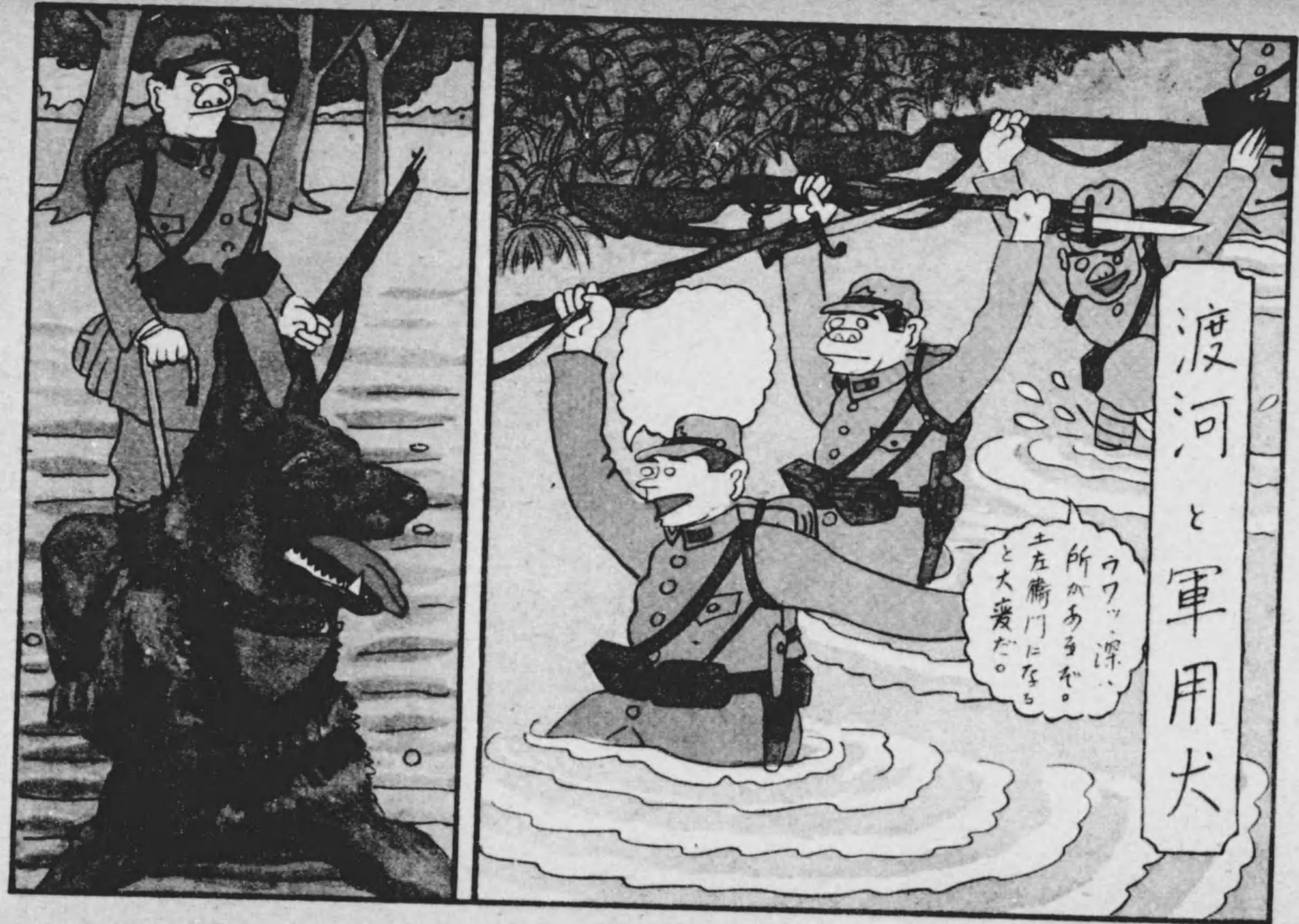
演習や行軍等で遠隔の地方へ軍隊が出張した場合には、人家のない所では露営するが、部落へ宿営する時には、人家を宿舎に當る。地方の純朴な農民等は、兵隊さんが泊つてくれるのを一家一門の名譽として、下へも置けぬ歡待ぶりをして、兵隊さんを面喰らはせる。



露営には携帯天幕を用ひて雨露を凌ぐ。これを幕営と言ふ。露営の場合には飯盒を用ひて炊事をする事がある。飯盒炊事は普通二人で共同して一つの飯盒で二人分の飯を炊き、他の一つで副食物を煮る。炊事場は溝を掘つて、その中で燃料を焚き、その上に飯盒を渡すのである。



「突撃！」の命令一下！ドツといふ喚聲天地をゆるがせ、銃鐵林の如くきらめいて、今や
 壯烈なる白兵戦が展開されんとした。途端、銃聲部より命令下り、戦線數里に亘つて休戦囁
 唄が對砲と響き渡り、さしも白熱の兩軍も、銃尖を相接して對峙のまま、休戦となる。



渡河方法には工兵による架橋の他、鐵舟、浮橋舟等があるが、浅い川ならその儘強行渡河を
 行ふ。物言はぬ戦士、軍用犬の任務は種々あるが、主として傳令職務、警戒職務、搜索職務
 運搬職務の四つである。今事變に際しても戰場を縦横に馳騁して、兵士も及ばぬ偉功を立て
 と名譽の戦死を遂げた忠犬美談は今尚吾人の耳々に鮮かである。



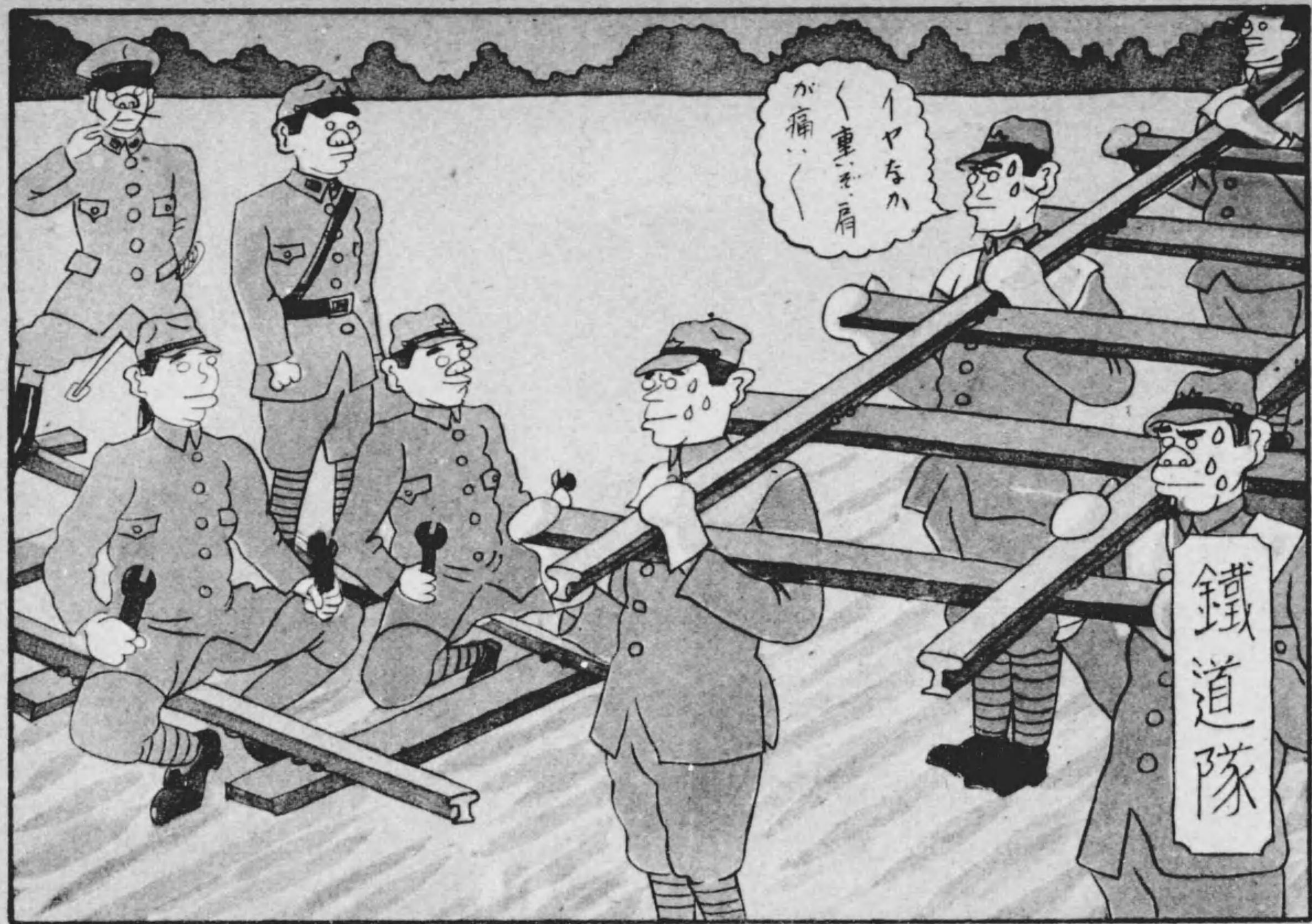
(75)

砲兵の目的は大砲を使用して遠距離から敵陣を射撃して戦果を擧げるにある。その使用する砲は、野砲、山砲、騎砲、野戦重砲、重砲、高射砲等がある。砲兵の射撃は破壊力猛烈なため、敵の眼を奪ひ、我軍の士氣を鼓舞すること頗る大である。

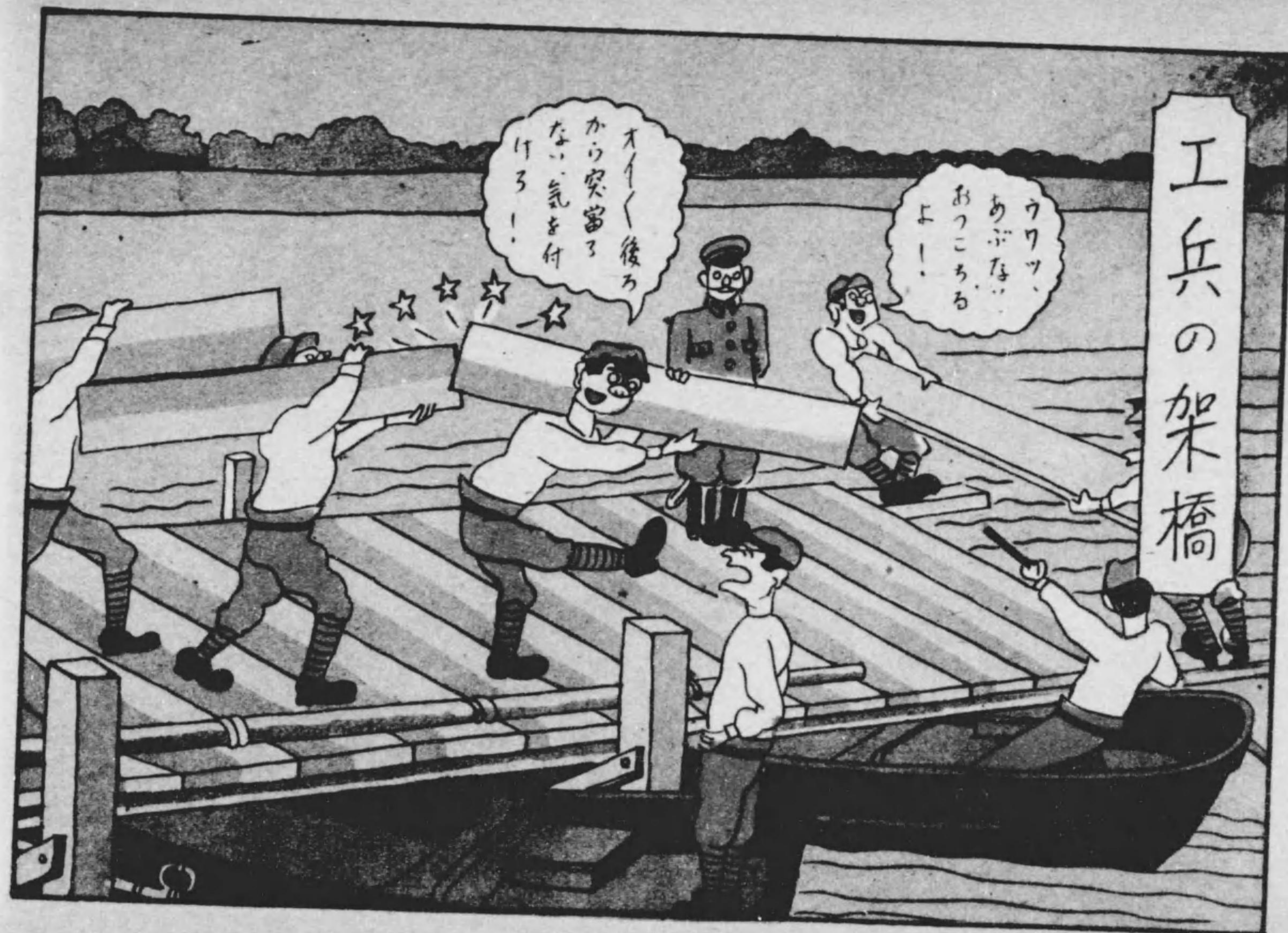


(74)

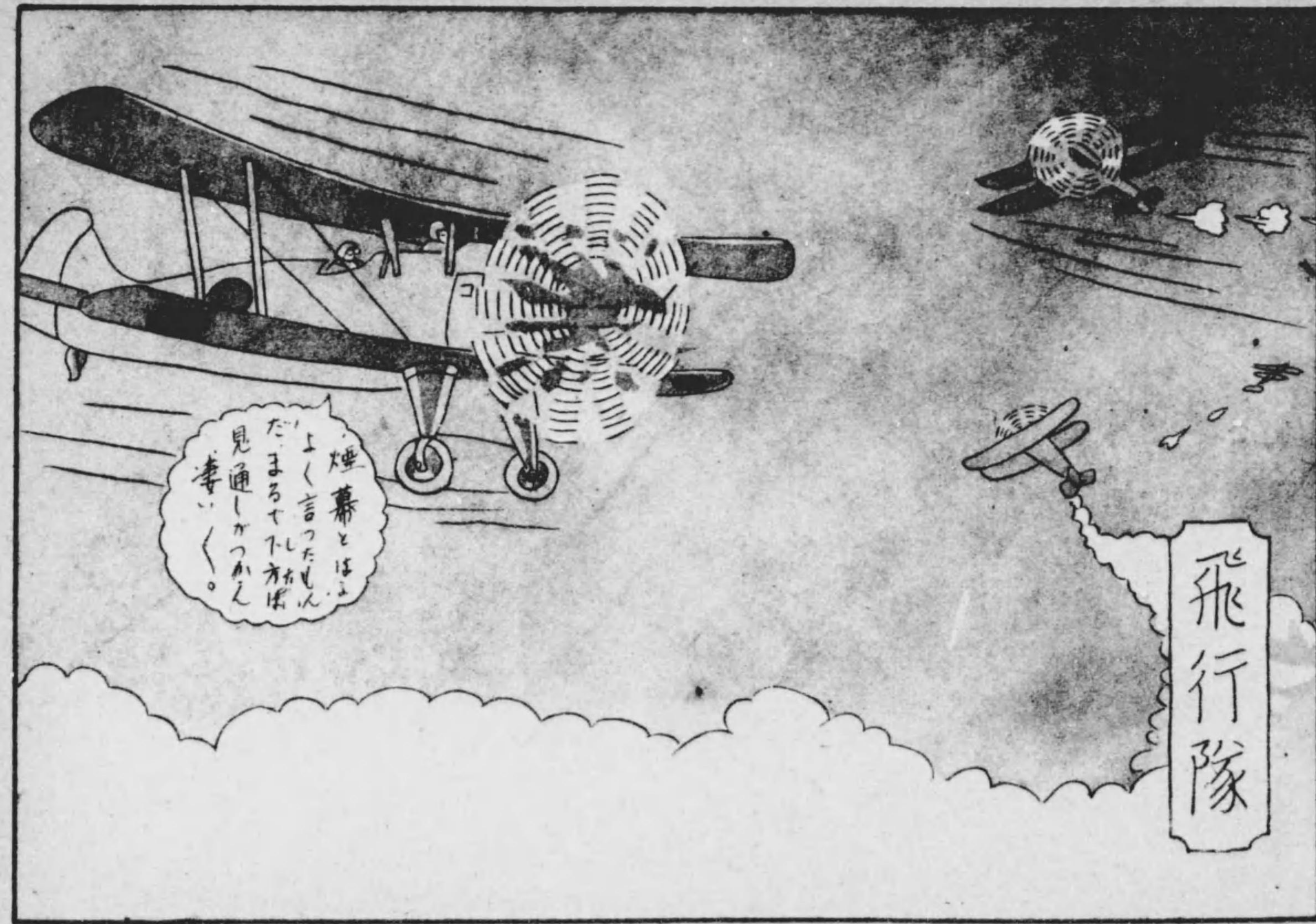
騎兵は馬を利用して戦場開始前に敵情を視察し、或は地形を偵察して、全軍の進軍場への案内役をし、戦闘中は機動を窺つて敵を奇襲し、敵が敗れて退却するや、猛烈果敢に之を追撃する。騎兵は乗馬戦の外騎銃又は機関銃で徒歩戦をも行ふ。其他橋、鐵道、電信等をも破壊する。



鐵道兵は工兵の一種で、鐵道の建設及び修繕或は運輸に従事して、全軍の活動力を保持増進し、また必要があれば鐵道の破壊にも當るものである。今次事變における鐵道隊の活動の如何に目覺しかつたかは既に何人も周知の事實である。



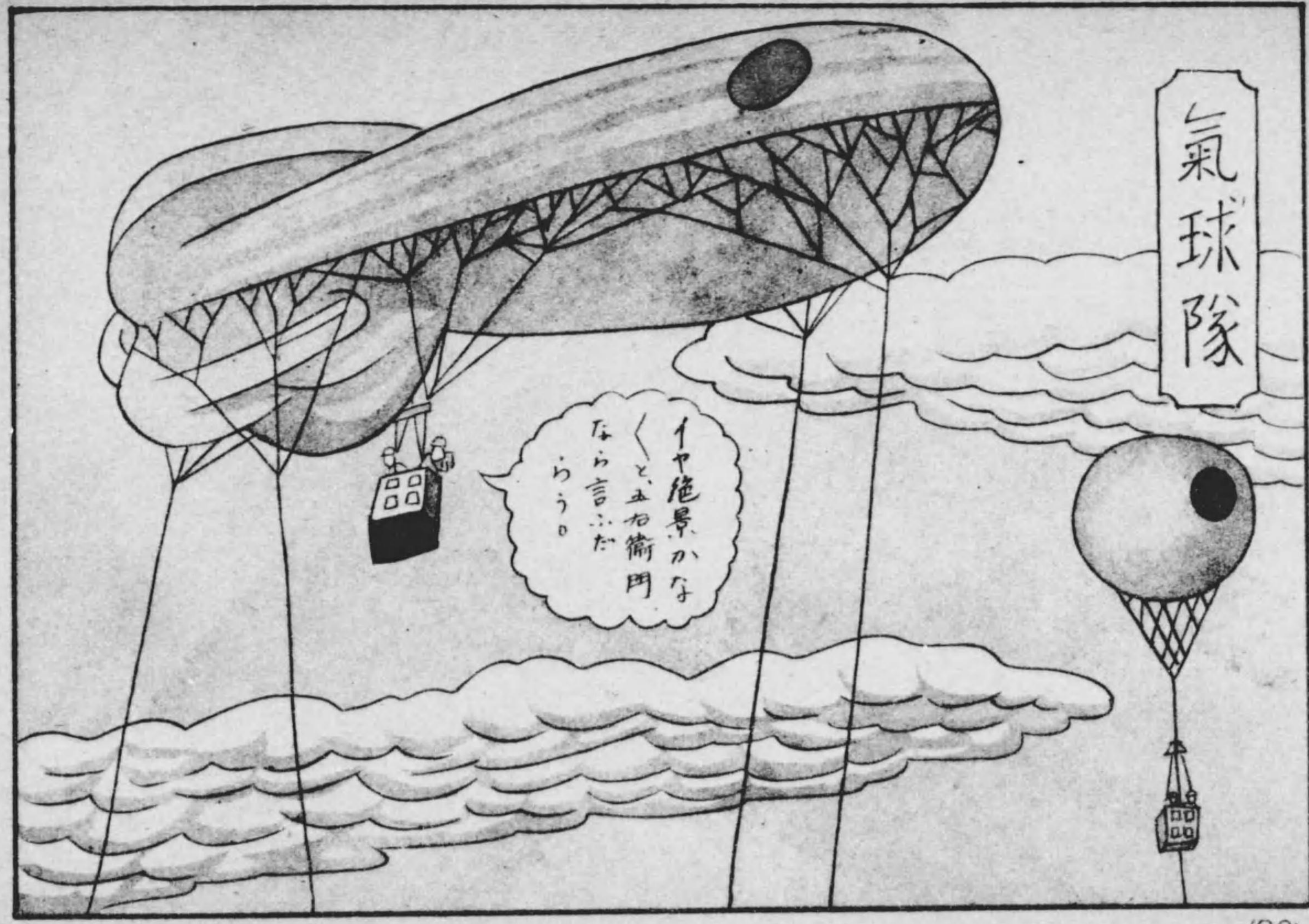
工兵は特有の技術を利用して戦場に必要なる工事を施して、全軍の進軍を容易ならしめるものであるが、時によつては歩兵と同じ銃を執つて戦ふこともある。又その任務には道を開き橋を架け散兵壕、障害物其他の構築及び破壊、或は坑道の掘削等がある。



我陸軍現用飛行機には九五式練習機、九一式、九二式戦闘機、九三式、九四式偵察機、九三式爆撃機等がある。練習機は練習用、偵察機は主として敵情偵察に、戦闘機は敵航空機に對する攻撃又は地上の敵陣に参加し、爆撃機は地上の敵及び重要建築物に對し爆弾を投下するにある。



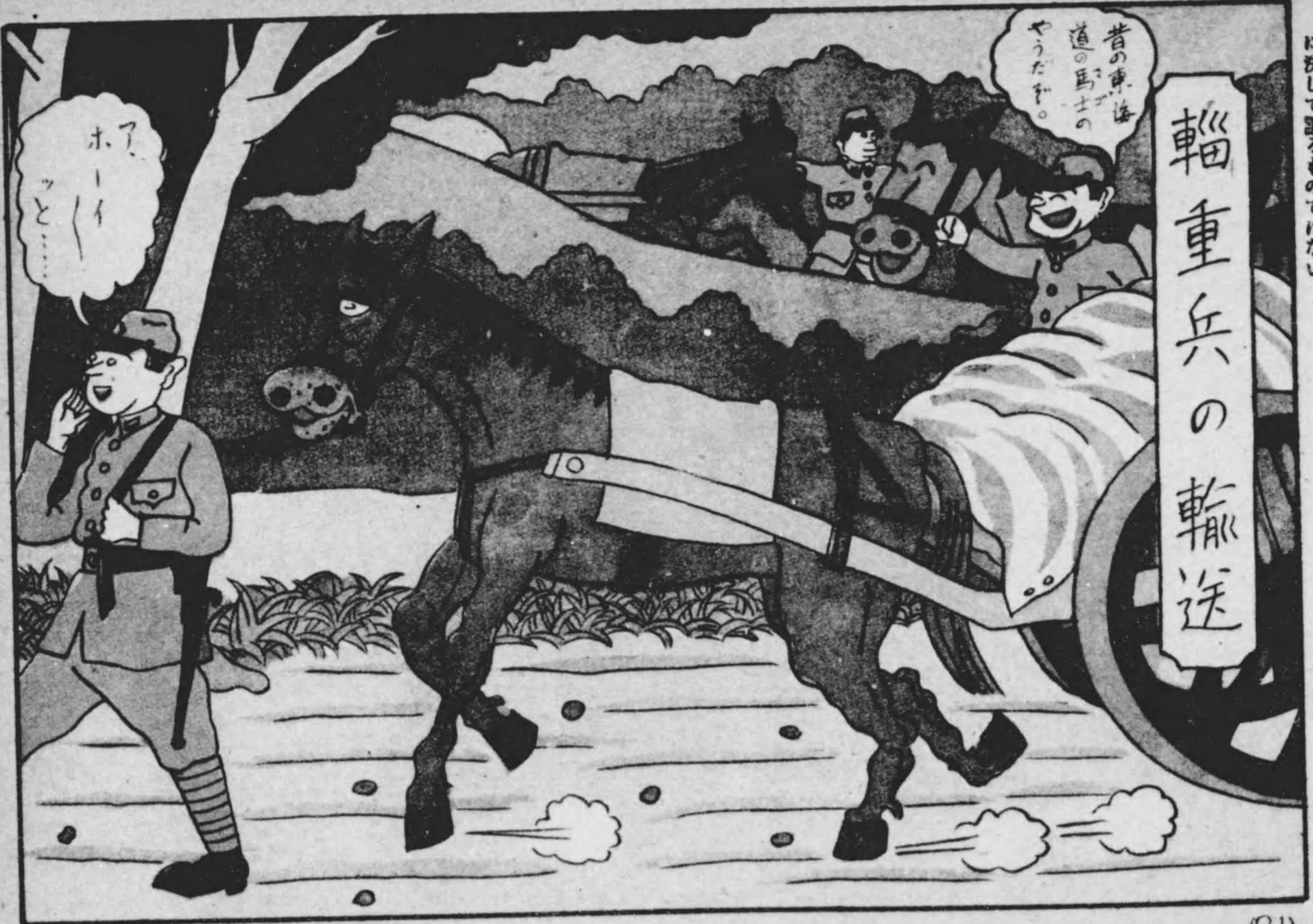
電信兵も亦工兵の一種で、有線・無線電信の建設及び通信に従事するものである。通信の網といふことが勝敗を決する鍵である以上、通信兵の任務の如何に重いかは推して知る可しである。宜なる哉、今次事變に際しても幾多通信兵の奮闘美談が傳へられてゐる。



気球隊

イヤ絶景か
くとも右衛門
なら言ふた
らう。

気球には緊留気球、自由気球、飛行船の三種がある。緊留気球は緊留索によつて地上に緊留し、敵の軍隊又は陣地の監視、砲兵射撃の観測、遠距離に視覚通信を行ふのに用ひる。自由気球は風力を利用して飛行するもので、攻固せられた要塞と外地との連絡等に用ひる。飛行船は發動機によつて自由に飛行し、飛行機同様の機能を有してゐる。

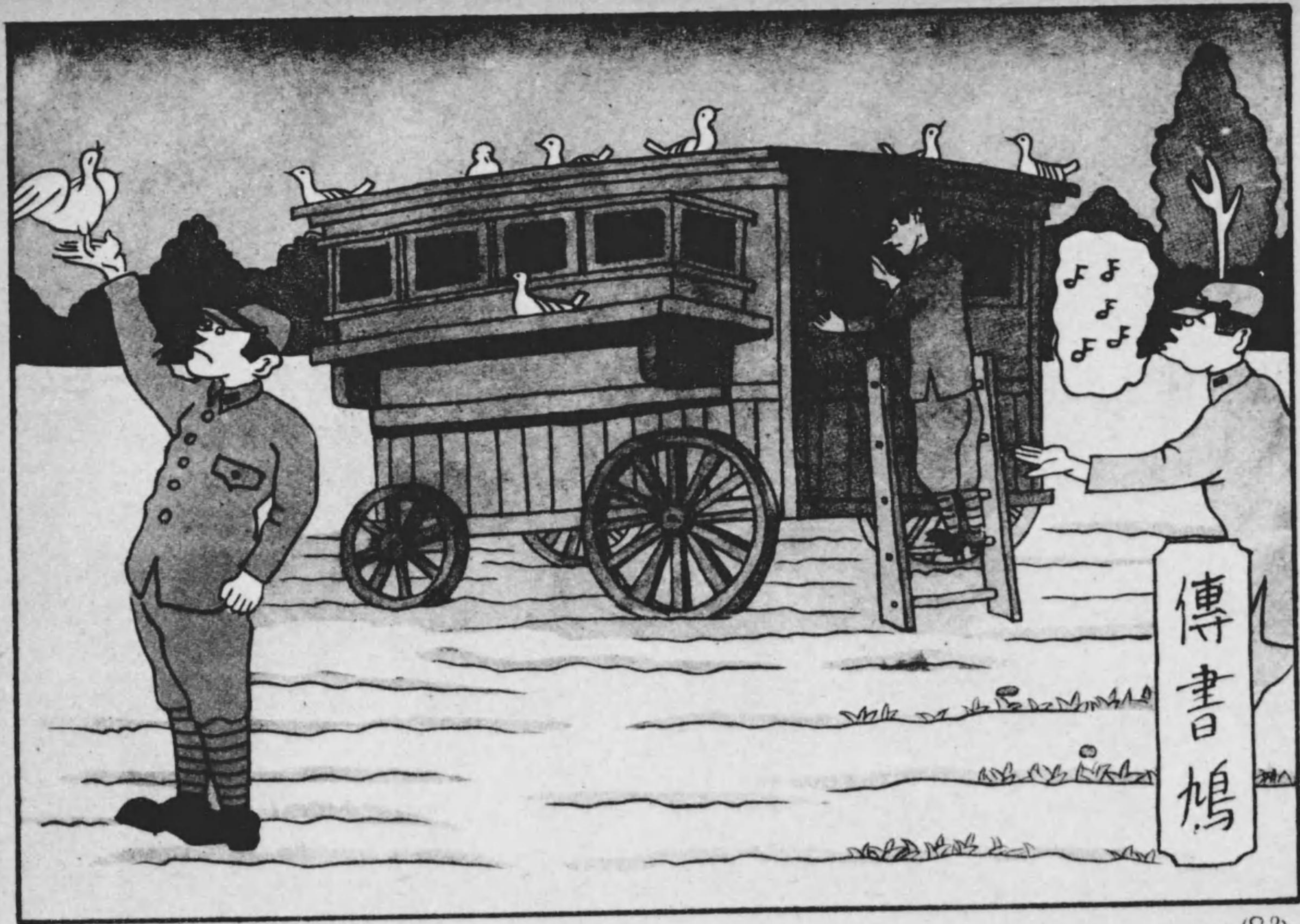


輜重兵の輸送

昔の車馬道の馬士のやうだが。

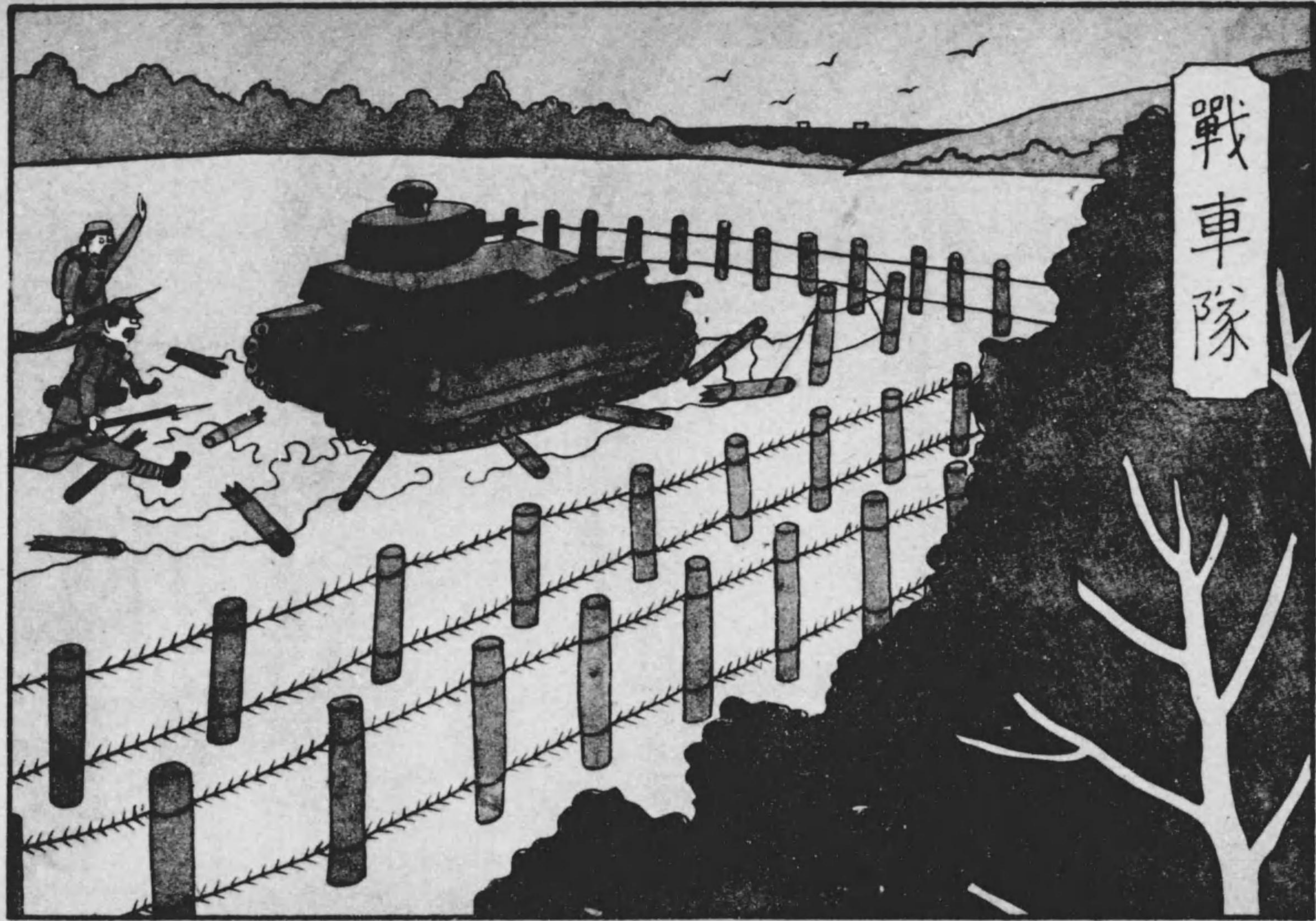
ホーッ
と……

輜重兵は萬難を排して間断なく彈藥、糧食、被服等の軍需品の輸送補給を行ひ、全軍に戰鬥力と活動力の資源を與へるものである。その運搬は馬、車輛、自動車等を使用し、如何なる運動の困難な地形でも、亦例ひ彈丸雨飛の境地でも苟くも軍隊の行動する所に之に隨ひ任務に服し、全軍をして毫も後顧の憂ひなからしめるもので、その責任の重大なことは他の兵種に決して譲るものではない。



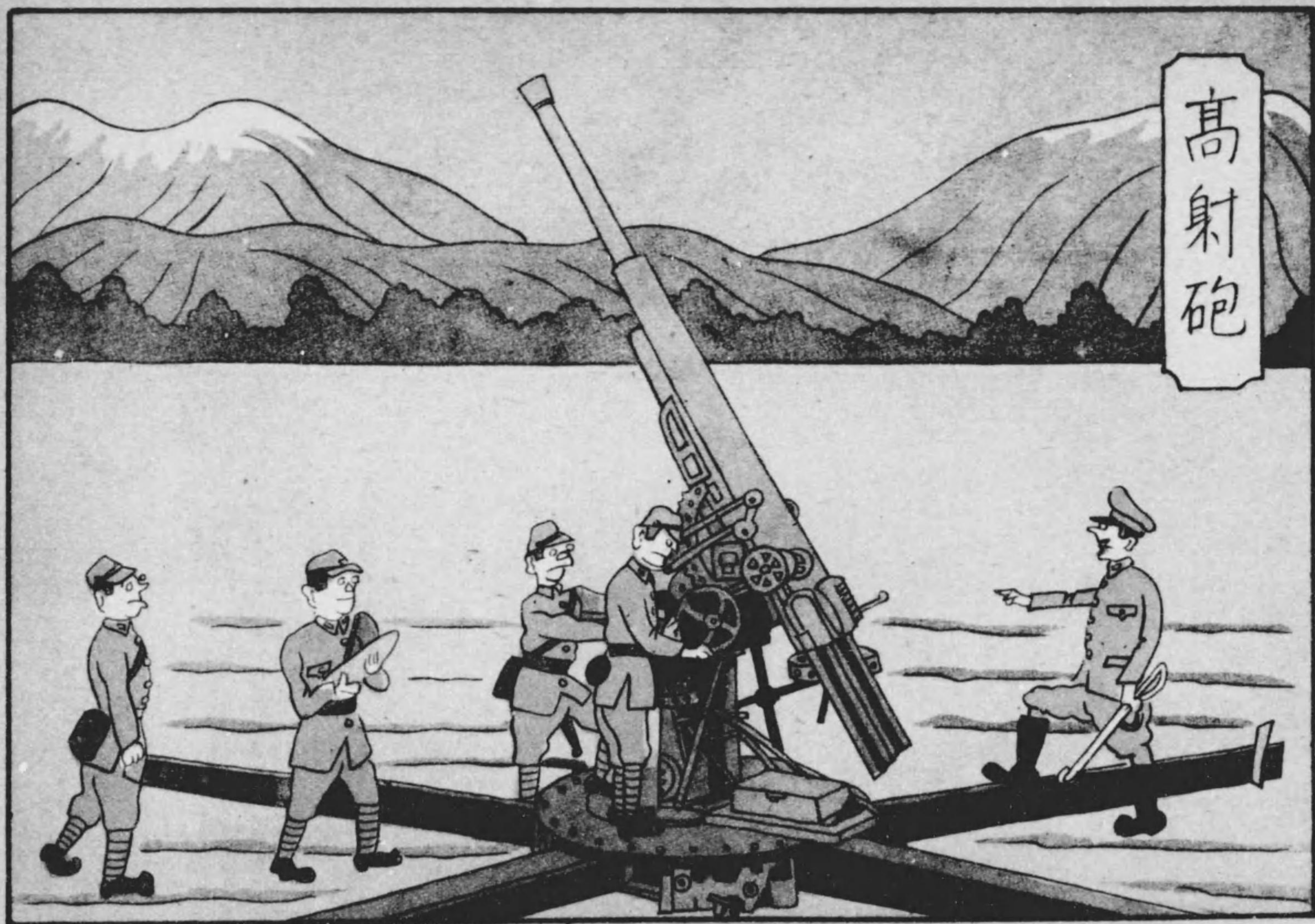
(83)

傳書鳩は鳩が眞直ぐに自分の巢に歸る性質を利用して通信に使ふもので、アルミニウム製の信筒を脚につけ、又は布製の信筒を胸につけて、その中に薄紙に書いた手紙を入れる。一分間に一キロの速度で一キロの遠方から歸ってくる。この可憐な無言の戦士が敵陣に傷つき乍ら、天啓れ使命を果した美談は今事變中幾多吾々の耳にした所である。



(82)

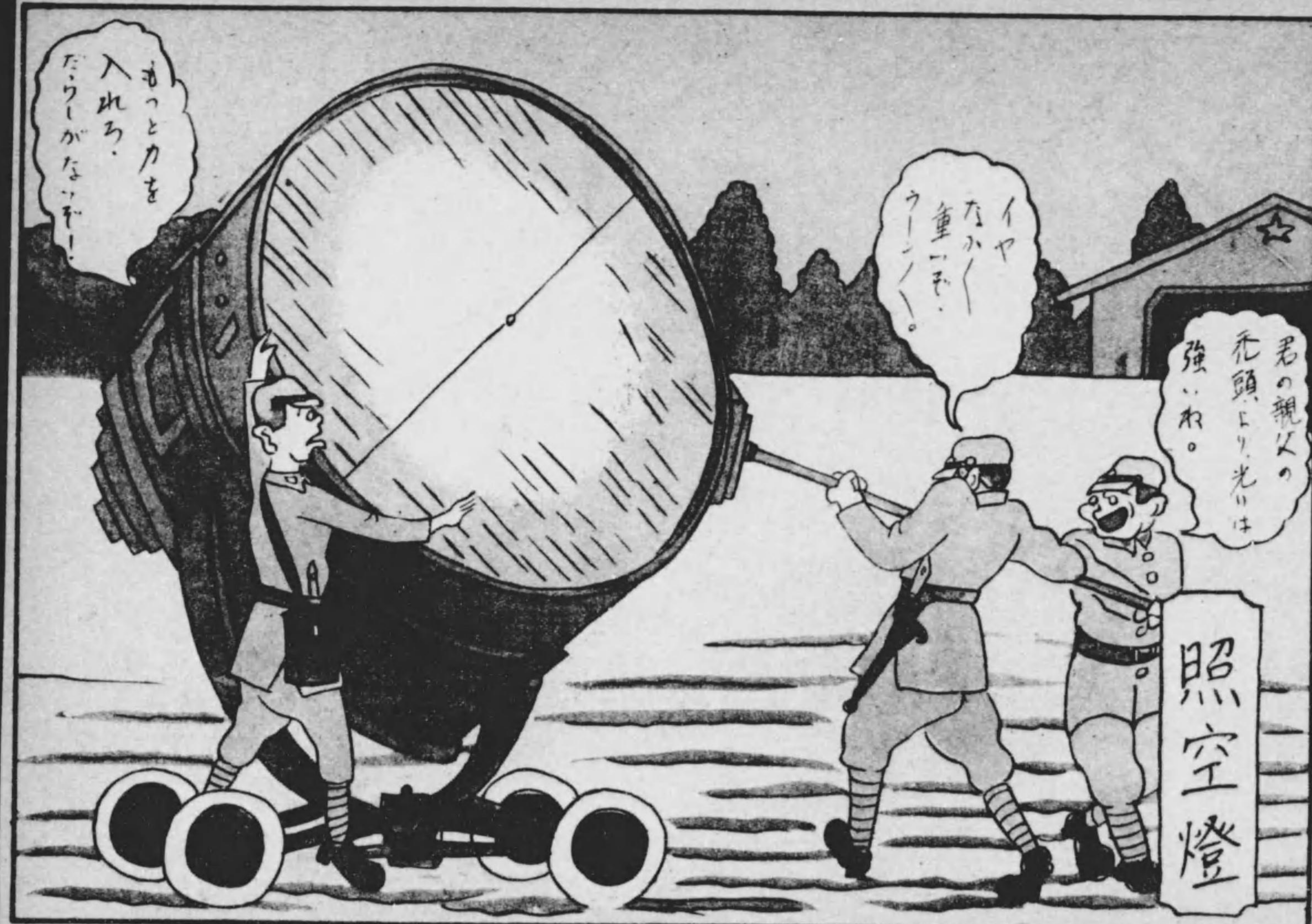
戦車はタンクとも言つて無限軌道で進む車輛で、大砲や機關銃を備へてをり、外側は装甲板で包まれてゐる。地面の軟かい原野でも凹凸のある地形でも自由に進むことが出来、又五十度近くの急坂を上下し、全長の半分の幅の溝は之を越へる事も出来る。世界大戦の時生れた新兵器で、鐵條網や練瓦礫でもドンク破壊して進むので、非常に恐れられてゐる。



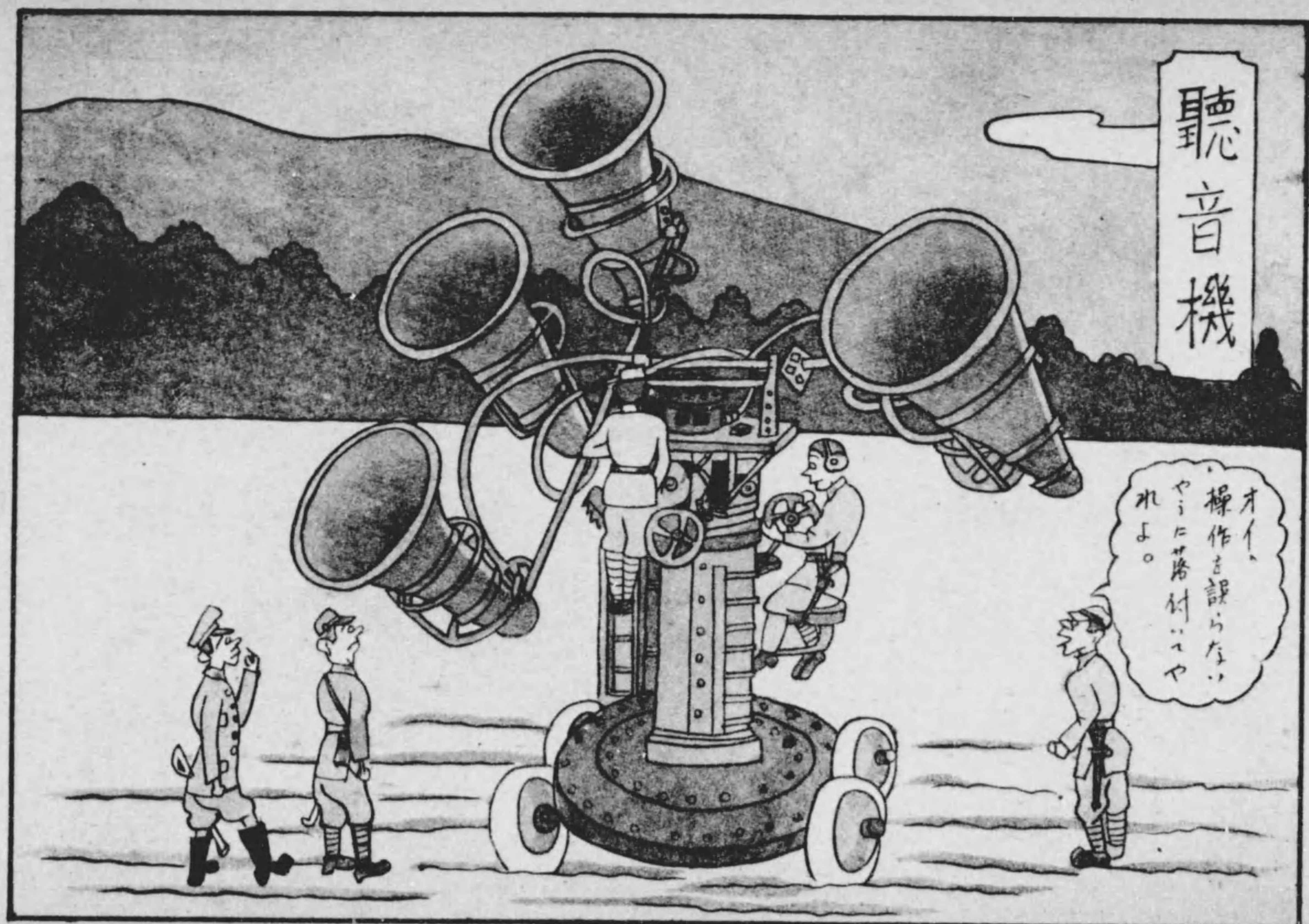
航空機を射撃する砲を、海軍では「高角砲」陸軍では「高射砲」と言ふ。高射砲には口径八センチの細砲と十二センチの重砲とがあつて、一萬メートル位の高空を射つことが出来る。射撃の方法も、他の大砲と異つて、何もかも自動式になつてゐるから、速力の遅い敵機を射つのに都合がいい。高射砲より取扱ひが簡単なものに、高射機銃がある。今後の戦争は空中戦なので、高射砲の使命はいよいよ重大である。



實戦の場合には、障碍物を跳び越へ、河を渡り、急坂を昇り降りしなければならぬ。そこで騎兵は特に平素から障碍物飛越への猛訓練を行つてゐる。中には曲垣平九郎そつちのけの名人もゐる、見る者をして思はず手に汗を握らせる。



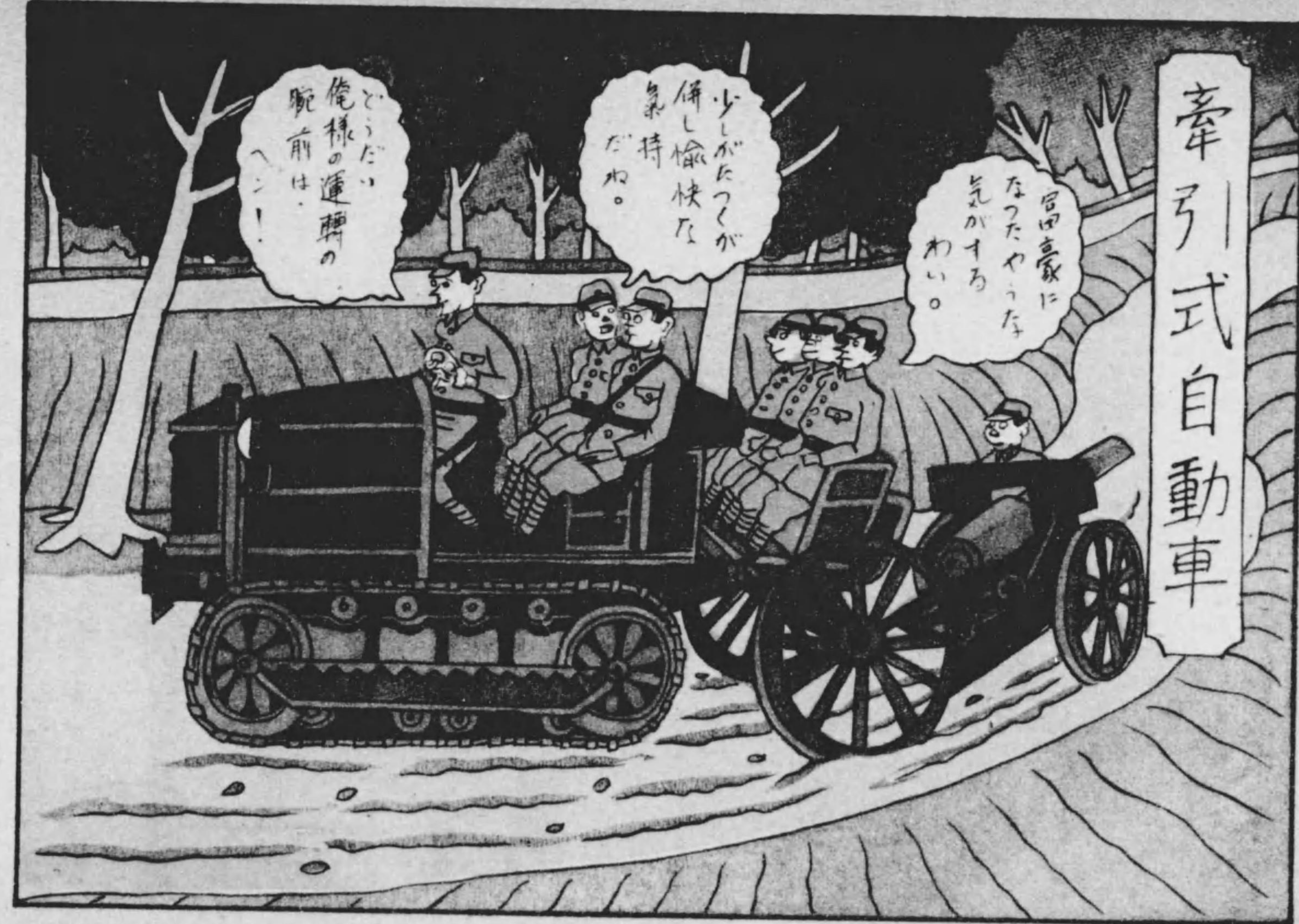
照空燈とは大きなアーク燈の光を反射鏡で一方方向に集めて強く照らし出す様にしたもので、夜間遠い所にある敵軍を発見したり、遠い所にある味方に光で信號したりするに用ひる。その軍艦に用ゐるものは探照燈、陸軍に用ひるものを探照燈、特に空中に用ひるものを照空燈と呼んでゐるが、その仕様は皆同じである。照空燈は、高射砲、聴音機と共に防空兵器として缺くことの出来ないものである。



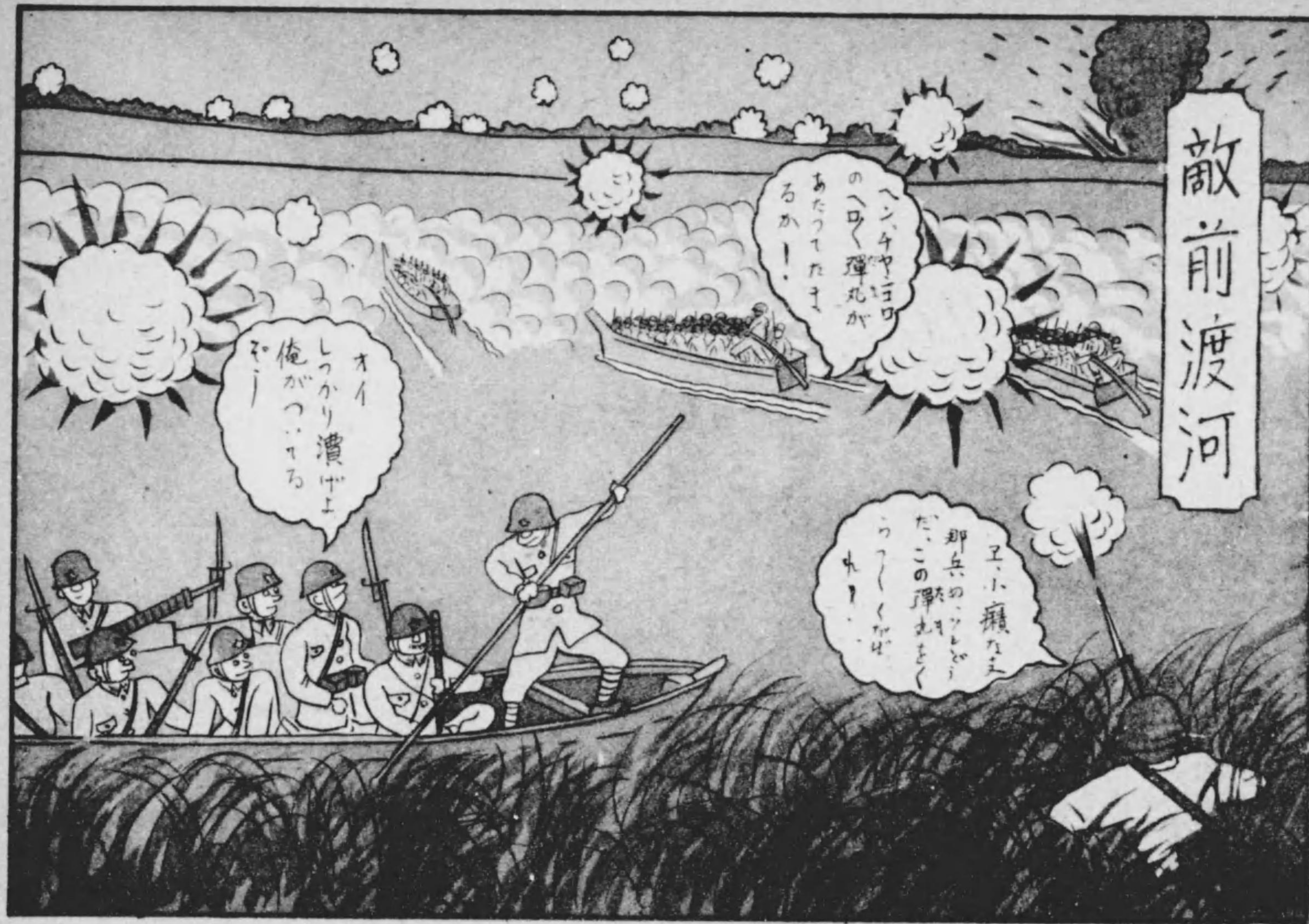
聴音機とは敵の航空機の機首を聞き取つて、敵機がどの邊に來たかを探り知るに用ひる兵器で喇叭型のもつと蜂の巣型のもつとがあるが、我國で用ひてゐるのは、多くは四つの喇叭を備へてゐるもので、係の兵はこの喇叭を左右に廻轉すると共に上下にも動かして敵機の機首の方向を探り當て、その方向と位置を計つて、更に之を照空燈や高射砲の係りに知らせる。その聽く距離は普通六七千メートル内外である。



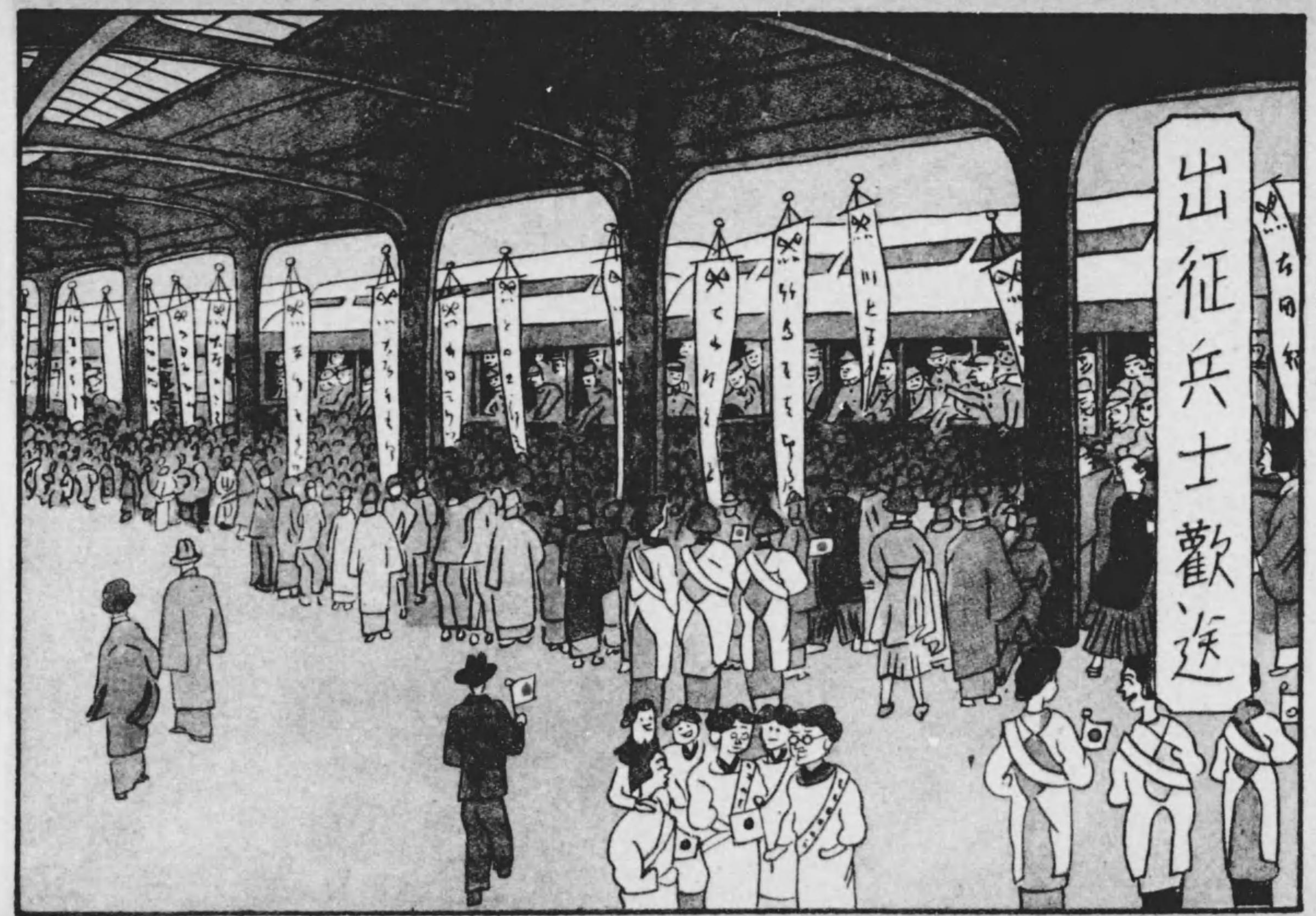
除隊は現役なら満二年、備後なら五年四ヶ月の兵役を服してから迎へる。但し、在營中品行方正學術職務の成績優秀な者は特に在營期間を短縮して除隊を許される特典がある。親子兄弟の様な上官職友に別れ、住みなれた兵營を後に、懐かしの我家へ歸る除隊兵の顔は悲喜交々感慨無量のもがさる。



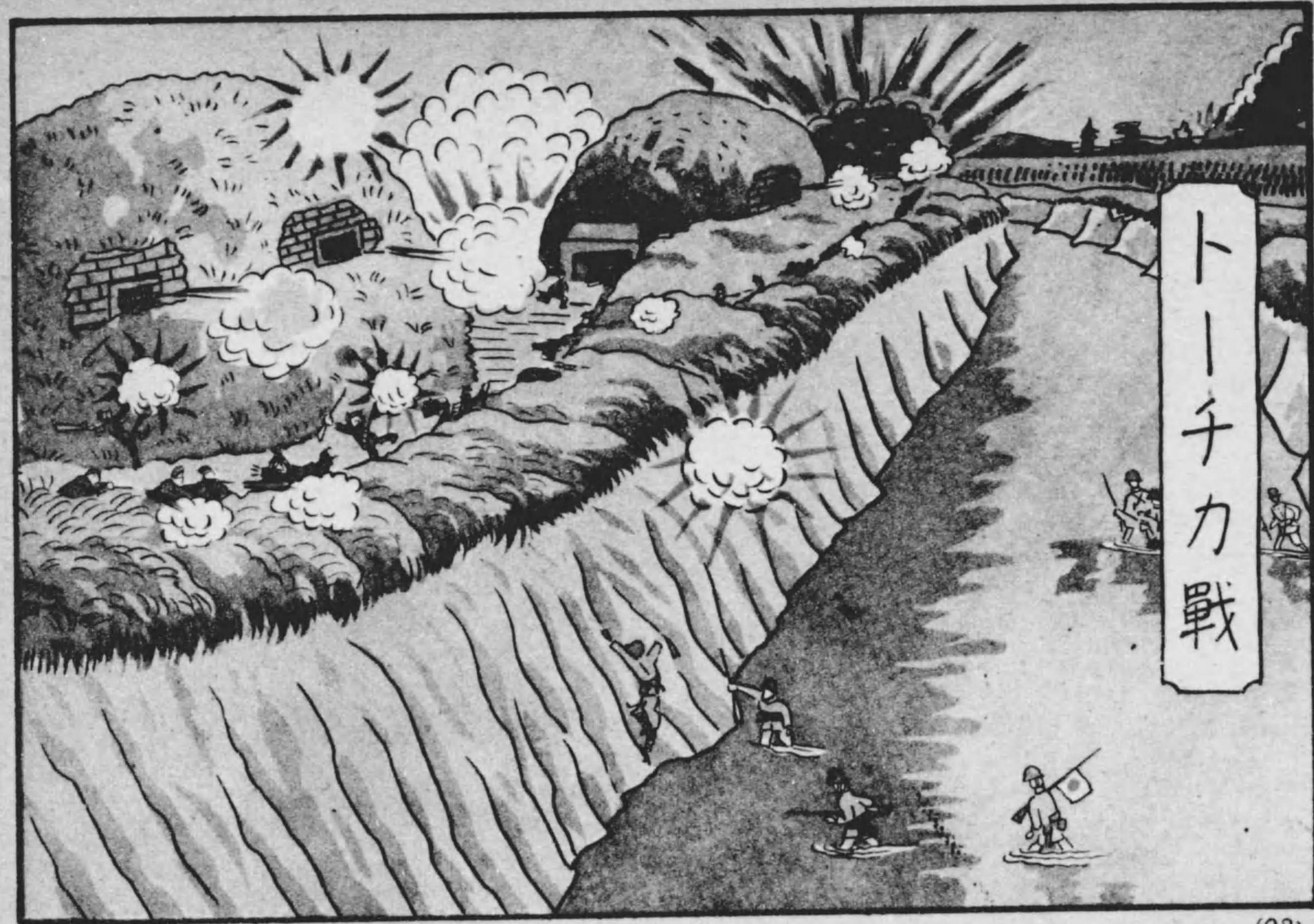
馬で牽くのと自動車に牽くのとを比べると、その速力に於ても牽引に於ても後者が遙かに勝つてゐるので、馬は漸次自動車に更へられ様としてゐる。牽引自動車は大砲、自動列車等に使用されるが、悪い地形を自由に走らせるには無限軌道のついた牽引自動車を使用する。



今次事變中皇軍獨特の戰術として敵の意表に出て、大いに敵艦を撃からしめたのは、敵前上陸と敵前渡河である。これらは何れも陸海軍の緊密なる共同作戦であつて、初みて成功するのである。即ち陸海軍將士が一身同體となつて決行したからこそ、吳淞上陸、杭州灣上陸、白那口上陸、蘇州河渡河、安慶上陸、バイアス灣上陸等々の赫赫たる戰果を擧げ得られたのである。



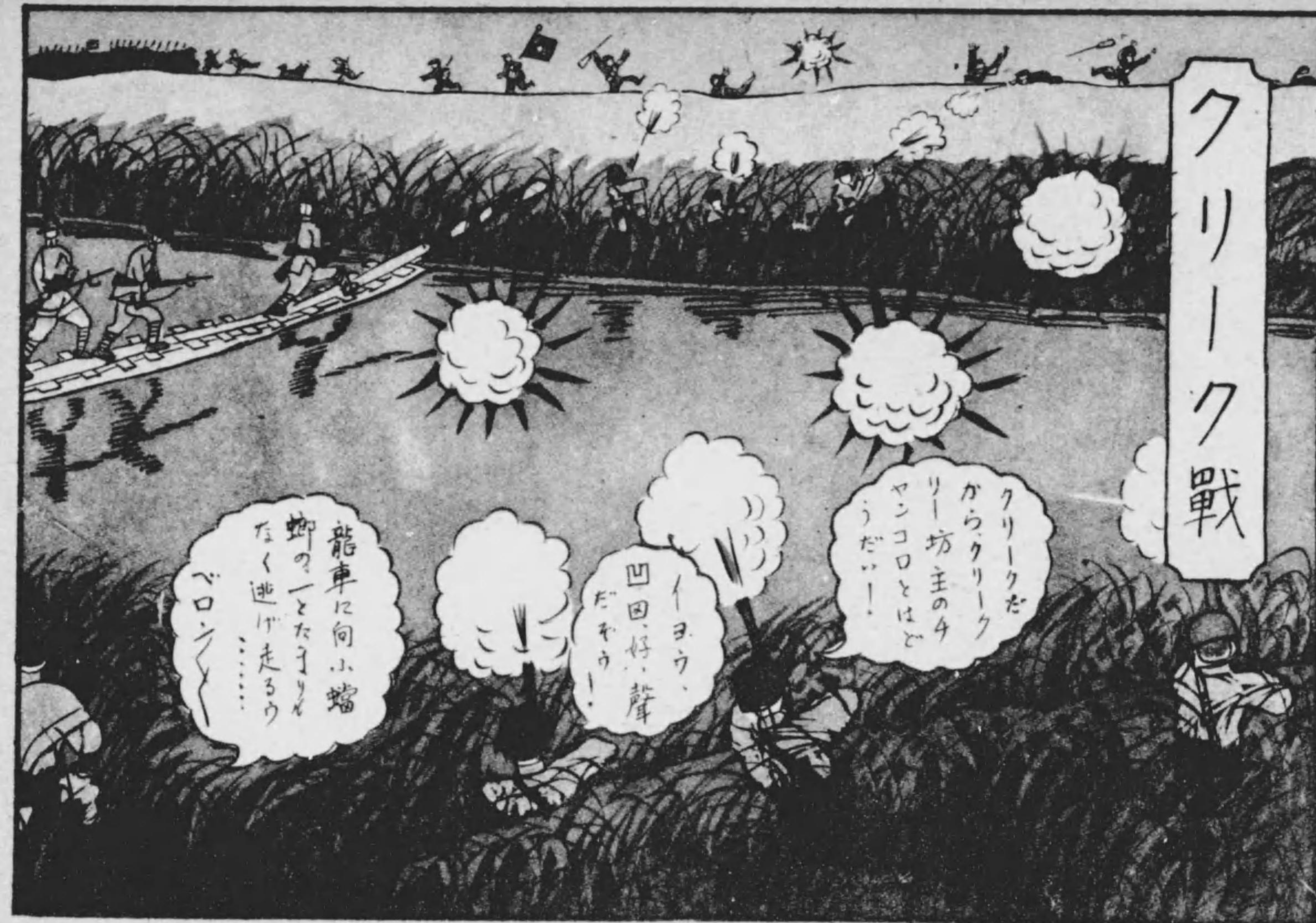
「戦呼の聲に送られて今ぞ出で立つ父母の國……」「勝つて来るぞと勇ましく誓つて國を出たからは……」「バンザイバンザイ」沸く様な戦呼！ 戦の波！ 戦頭を埋め盡す戦後の熱誠ぶりをまぎくと目の邊り見て感激した出征軍人の顔には、一死報國の堅い決意が鮮々と現はれる。では行つて來ます。お土産に蔣介石を持つて歸るか、それとも帝國神社でお會ひします。ハッハ、、、左様なら！」



トーチカとは一言にして言へば地中の要塞で、支那軍は今度の事變で、戦線に於けるトーチカに據つて、頑強に抵抗したが、肉弾を以て當る皇軍勇士にかゝつては、この最新科學の粹を盡したトーチカも一掃もななく、片つ端しから叩きつけられて、見る通りの慘敗又慘敗の體たらくだ。何と言つても、大和魂の籠つた肉弾はダンゼン世界一強い！



昭和十二年八月九日、我海軍中尉大山勇夫氏及び一等水兵齋藤與藏氏が上海郊外に於て支那保安隊に屠殺されたのを導火線として、第二次上海事變は勃發した。敵は二十萬の大軍を以て我居留地を包圍、一舉に之を殲滅しようとした。之に對し我陸軍は壯烈な市街戦を演じて、敵勢よく防戦し、頑強を一步も近寄らしめず、戦史上赫々たる偉勳を奏した。



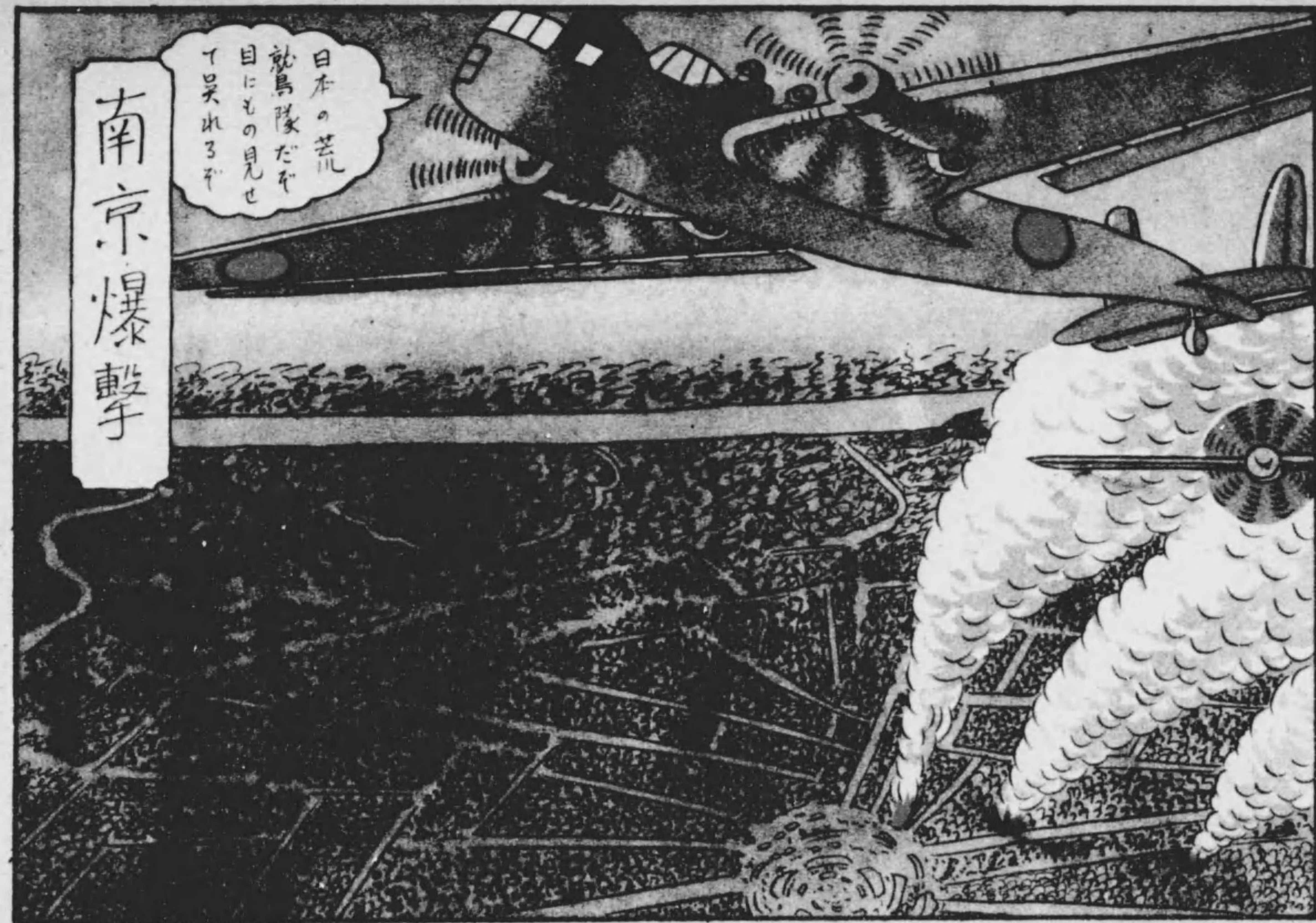
クリーク戦

船車に向小蛇
脚の一本たまりん
なく逃げ走るウ
ベロウ

イヨウ
凹回好聲
だそウ

クリークを
からクリーク
リー坊主のク
マンコロとは
うだ

上海方面の戦いで皇軍を最も悩ましたのは、各方面に縦横無盡に通ずるクリーク(堀)だった。敵は又このクリークを要害と恃んで必死に抵抗した。併し果敢無比なる皇軍將士は何で之しきに怯むべき、勇敢な工兵隊は彈丸雨飛の中で手続の手並で瞬間に架橋し、或は一刻を争ふ場合には自ら人柱となつて橋板を肩で擔つて、突撃部隊を渡河させた。



南京爆撃

日本の荒川
就鳥隊だぞ
目にも見え
てるぞ

世界戦史上に類する偉勳を輝かしたのは昭和十二年八月十九日、折柄の颱風を突破して行はれた我海軍航空隊の渡洋大爆撃だった。この日果然南京上空では壯烈なる空中戦が演ぜられたが、我海の荒鷲は、瞬く間に敵の十数機を撃墜、更に裕紀庫、滑走路、彈藥庫に正確な爆撃を行ひ、之を木ッ葉微風に粉砕又は炎上せしめ凱歌を擧げて悠々歸還した。



十一月中旬、道が堅固を誇る上海も、皇軍の果敢な猛攻を支へ切れず、敵は總潰れとなつた
 皇軍は追及の手を緩めず直ちに追撃、杭州、蘇州、無錫、江陰、溧水
 蘇州、廣徳等の各要害を一撃に陥れ、十二月十日慈々南京總攻撃を開始した。十一日には光
 華門を、十二日には中華門を占領、十三日未明皇軍は完全に敵首都南京を占領、十七日松井
 司令官以下の史上に類く入城式が堂々と行はれた。

支那事變忠勇美談集

壯烈！爆彈二將校

昭和十二年七月七日夜、蘆溝橋第一發の銃聲は支那の聖戦の火蓋を切つて落し、皇軍は電光石火、廊坊を始め、北京周囲の敵陣を襲撃、激減の大行撃を興へた。

七月二十八日、皇軍各部隊は南苑の三方より包圍態勢を取つてヒタ押しに迫つたが、御南苑は京津間に於ける敵の最大要害、凡ゆる近代的裝備が施され、兵營は高さ六メートルの頑丈な城壁を廻らし、更にその下には、深さ三メートル幅五メートルの塹壕を構築し、その中に敵精銳一萬五千が立籠つて頑強に抵抗し、容易に皇軍を近づけなかつた。茲に於て尋常手段ではダメだ。爆破作業によつて突撃路を作るより他はないと、部隊長が決死隊を募ると、率先、この重大任務を買つて出たのは、伊藤金次郎少尉と、千葉平吉少尉の二人であつた。

「お、やつてくれるか、確り頼むぞ！」
部隊長の激勵の言葉を聞くや聞かずや、兩勇士は素早く爆彈を身につけて轟らに駆け出した。全軍思はず手に汗を握り固唾を呑んで見守つてゐる中に、兩勇士は敵陣の雨を衝いて敢然城内に身を躍らせた。
「それ、二人を射たすなッ！」
味方は必死の掩護射撃だ。その中を兩勇士は一氣に敵陣を乗り切ると、すぐ爆眼前にそ

より立つ城壁へ狼の如く登り初めた。敵は愈々狼狽して火の雨を降らす。が、重き任務の前には兩勇士、面も振らず、歩一歩やもりの様に攀ち登つて行く。やがて手にした爆彈を投擲し、素早く點火した瞬間、空に兩勇士は集注銃火を全身に浴びて、ドツと許り轉がり落ちた。——だがその時、轟然！天地も砕くる一大轟音と共に、さしもの城壁も爆破され、忽ち開く一條の突撃路！
それとばかり我が部隊は怒濤の如き喊聲を擧げて無二無三に敵陣地へ突入、二將校の甲合戦と許り、撃つ、斬る、突くの白兵戦を現出、遂に敵を殲滅して、城頭高くへんぼんと日章旗を掲げた。

恨みは深し！通州城

七月二十九日午前二時の深夜、通州守備隊の電話のベルが消滅しくなつた。守備隊長藤尾中尉が急いで受話器を耳にあてると「保安隊の大部隊が西門方面へ出動した」と、我領事館警察署からだ。（さては怪しい？）と直感した中尉は、直ちに斥候を出して偵察させた。隊員ババソンと、突如、闇をつんざく銃聲！
「フム、さては、十九軍の敗殘兵だな、小櫃な、全員、守備につけ！」
命令一下、全員は沈黙態に守備に就いた。敵はどややら二千を超へる大部隊らしい。それに反して味方は百に上らぬ小勢だ。必死の防戦態、白々と夜が明け始めると、敵血六

十メートルに聳々と迫つた敵の服裝は、二十九軍と思ひの外、意外にも真東保安隊ではな
いか！ さては反逆かと思ふと、守備隊將士の
憤怒は極度に達し、吐き決し一同銃身も焼
けよと誇り奮戦した。然し、あゝ味方には重
火機が少い。敵は機銃、迫撃砲を以て連二
無二に攻めかゝる。この時、留上等兵と新
中一等兵は、矢面に手榴弾を引揚むと、火沫
あける弾雨の中へ突進し、群がる敵中目がけ
て投げつけた。バツと炸裂して敵は八方へケ
シ飛ぶ。その處に乘じて味方の輕機小銃は最
高度の威力を發揮してバツ／＼敵を轟き倒し
たが、途端尾中尉は、敵砲を胸に受けバツ
タリ打倒れ、「あとと頼むぞ」と只一言、眼
目を閉じた。この間に敵は勢ひを盛り返して兵營
内に侵入しようとしたが、手榴弾を投げ、
敵は銃剣で敵兵を刺しにする等、凄惨な白
兵戦を続けること三十三時間、敵は食はずの
苦闘を続けた。が、三十日午後三時四十分、
遂に我が空軍が姿を現はして敵の群がる兵營
中へ爆撃の爆撃を敢行、敵を全く殲滅した。
ついで午後四時二十分には、機軍司令部
が馳せつけた。かく守備隊は寡兵よく死守し
たが、他の保安隊は通州の我機務機關を襲撃
して、樺木中佐、甲斐小佐を始め数名を戦死
せしめ、且つ在留邦人百八十名の過半数を虐
殺したのだつた。

盲目の二人傳令

八月二十二日、良郷西方平頂山に果敢な攻
撃を試みた長尾部隊は、退却する敵を小氣味
よく見送つたが、部隊長の傳令通り、果敢敵
は逆襲し來つて部隊は殆んど危殆に瀕し、部

隊長も遂に戦死された。——この長尾部隊の
苦戦と隊長の最期を報告に行かねばならぬ。
その時である。その連絡の使命を願ひ出た二
人の兵がある。一人は手榴弾の破片で兩眼を
やられて盲目になつた青見伍長、もう一人は
右足貫通銃創、右手にも負傷して歩行の出来
ない某一等兵だつた。
「いや、その氣持は有難いが、何しろお前達
は二人共重傷だ。この險路を而も敵中を突破
することは不可能だ。まあ休んでろ」
「何、大丈夫であります。二人は一人で目と
なり、一人は足となつて必ず参ります。負傷
した我々は銃を執れないのでありますから、
せめてこの傳令をやらせて下さい。必ずやり
ます」
かうして青見伍長と某一等兵は強つて願つ
て傳令に出た。青見伍長は某一等兵を背負つ
て歩いた。眼明きでも困難な暗夜の險路、而
も敵の出没する中を二人二脚で行かうとする
のだ。
「伍長殿、そこを右へ、岩角にそつて、あつ
もつと右へ」
某一等兵は青見伍長の背中に負はれ乍ら指
圖して、絶壁を下り、谷を越へ、溪流を渉つ
た。その中に夜が明けた。夜が明けてはとて
も二人は敵の目をかすめることは出来ないの
で、高粱畑の中に隠れて、日の暮れるのを待
つて、必死に歩きつづけた。
一念は恐ろしい。二人は遂に二十四日の夜
明け頃、本部に達して、隊長に委細を報告し
たが、使命を果すや否や、二人は安堵と疲労
とでドツとその場に倒れた。戦友達はこの

殊敵者を衛生隊へ後送すると共に、直ちに有
力な救援隊を平頂山に向けた。

颯風突破！渡洋大爆撃

支那飛行機の上海自爆撃に憤激した我海軍
航空隊では、一舉に敵空軍基地に大爆撃を敢
行すべく、八月十六日早曉、折柄の颯風を衝
いて出動命令を下した。海の荒波〇〇機は風
翼を死ね、鋭つく豪雨の中を、或は雲雲の上
に出で、或は濤浪渦巻く支那海の海面をスレ
／＼に翔破して、愈々大陸へ入つた。が、そ
の頃から風は烈しく、機の動搖は刻一刻と増
して來た。而も進むに従つて雲雲は愈々濃く
視界は百メートル内外に遮られて、遂に目ざ
す句容飛行場の上空に達した時は、各機離れ
／＼になつてしまつた。

大杉機は「よし、こうなれば單機爆撃だ」と
決心、低空飛行を試みた。渦巻く黒雲の隙間
から見下せば、格納庫前には敵の精銳機がズ
ラリと並んでゐる。早くも地上からは一齊に
砲火を浴びせて來た。大杉機が機首を敵機群
目がけて弾丸の如く急降下したかと思ふと、
翼下を離れた魔の一彈は、狙ひ誤らずスツ
と敵機群の中央へ命中、サツと黒黄色の爆煙
を擧げた。後には木々葉微塵の敵機の残骸だ。
續いて、挑へて來た爆弾を投下して、炎
々と焰に包まれた格納庫を尻目に、愈々颯
の途に就かうとする、小艇にも、何處から現
はれたか、敵の戦闘機が五機、上空から集
の様に襲ひかゝつて來た。

ダダッ、ダダダ……忽ち壯烈な空中戦が
始まつた。が、日頃の猛訓練の腕前に如何に
敵し得よう！ 忽ち一機は機頭部から火を吐

いて矢の様に落下した。續いて二機、三機、
四機……と矢張り早に撃墜した。が、この時に
敵の一機は尾崎三空曹の下腹部に命中し、座
席は血の海となつた。剩へタンクもやられ
てガソリンが噴出する。が、沈着な大杉機長
は重量物を投下し、傷つける愛機を勇はりつ
／＼、飛行を續け、再び大洋を横断して、見事
基地に辿り着いた。重傷の尾崎三空曹は、幸
ひ一命を取止めた。歸還後調べて見ると、愛
機は實に五十八箇の敵弾を受けてゐた。

空の華！梅林中尉

（世界空中戦が始まつて以來の豪華極まりなき
大編隊の長距離渡洋大爆撃の壯舉に選ばれて
二度も参加する事の出来た俺は、何といふ幸
運兒であらう）

濃霧立ちこめる支那海の上を、快いエン
ヂンの響きを立て、飛翔する愛機の上で、梅
林中尉はさう思ひ乍ら、操縦桿を握りしめた
南京の上空には雲雲が流れて、視界は狭か
つたが、勝手知つた再度の訪問だ。地上では
サイレンがSOSを絶叫し、高射砲がはため
いた。さうした騒ぎを冷やかに見下して、先
頭の機が垂直に近いダイヴを開始すると、
續いて何れも猛烈な急降下だ。梅林中尉も胸
の透く様な猛爆撃を続け続けた。

フト見ると、来た／＼、黒胡麻の様な敵機
の大編隊が！ 御座んなれと誇り、忽ち友機
は群がる敵機群の真只中へ飛込んで、壯烈な
空中戦を展開した。梅林中尉は照準孔にとび
こんだ敵の一機を的確に捉へて打放した。見
事命中！ もんどり打つて落ちてゆく。夫い
で二葉目の獲物を狙つた時、機體がグーンと

烈しく動揺したかと思ふと、機銃から、白い煙が尾を曳いて流れ出した。

「アッ！ 梅林がやられた！」
上空を飛んで来た敵機が、手に汗を握って見詰めてみると、白煙はすぐ真紅の焰となりそれは又滾々たる黒煙に燃つて、雑揉みとなつて落下し初めた。——と、その煙の中からサツと一枚の小さいハンカチが出て、ヒラヒラと何度も打振られた。

（左様なら諸君！ 健在で戦つてくれ給へ）
おう、それは訣別の辭ではないか！
「梅林ッ！」
眺めてゐた敵友は誰も彼も、こみ上げる熱い涙を感じて手をふつてそれに應へた。

體當り空中戦

八月二十一日早朝、我航空隊水上機六機は上海戦線上空を警戒中だったが、午前七時、彼方雲間から怪しげな編隊を組んだ敵のカチス・ホーク戦闘機六機が小縦にも立向つてくるのを発見した。好敵ごさんなれと訝り、わが偵察二機は猛然と襲ひかかり、忽ち敵機二機を小気味よく墜した。残る四機は出鼻を挫かれて一戦も交はず雲を霞と逃げ去つた。

「チエッ！ 飽氣ない奴だ、もう少し手懸へのある奴が来ないかなア！」
矢野機の矢野兵曹は物足らなさに吠いて悠々旋回飛行を續けてゐた。——と、程なく午前七時半、待望の敵の精鋭ノースロップ爆撃機六機が、虹口方面に姿を現はした。

それッ！ と訝り我が四機は、敵の真上からのしかり行つて、壯烈な空中戦數分の後驟く間に二機を墜し、矢野機は命辛々逃れる四機を迫撃した。と、突如ブーンと下方から舞ひ上つて来た敵のボーイング及びカーチス・ホーク戦闘機の四機が矢野機を取圍んだ。敵は只一機と侮つて四方から狙ひ射ちた。矢野機は敵の亂射の中を巧みに機體をかばひして、鮮かに應戦したが、あゝ然し、残り少

な弾丸は、遂に射ち盡してしまつた。
「弾丸がなくなつた！」悲壯な羽美野兵曹の聲！「ようし、この上はプロットでのしてやれ！」間髪を容れず決心した矢野兵曹は、敢然と敵機の中へ突進、下駄ばきのプロットを敵機の頭目に向けて叩きつけた。ガラ／＼！

大音響と共に敵のプロペラは粉微塵と散り、機體は見る／＼もんどり打つて墜落した。愛機のプロットも無惨にも取り取られたが、天佑なる哉、奇蹟的にも墜落は免れた。
「萬歳！」二人は思はず顔見合せて叫んだ。かくて同機は操縦不能に陥つた愛機を悠々黄浦江上に不時着せしめ、我〇〇艦によつて無事救助された。

敵前機銃修理、兒玉水兵

八月二十二日午前四時過ぎ、虹江路の北四川路の我守備の手薄と侮つてか、敵大部隊は北停車場附近からする迫撃砲、曲射砲、砲等の掩護射撃の下に、機銃、小銃を照射しつゝ、怒濤の様に襲撃して来た。虹江路の陣地を死守するのは宮崎部隊隊下の前友二等兵曹を班長とする池田、兒玉、中山の各一等水兵、山田、富永二等水兵、西田三等水兵の僅か七名。

敵は鐵路を突破して潮の如く殺到してくる彼我の距離百五十メートル、百メートル！

「撃てー！ ダマッ、ダマダマッ！ 敵は死體を發して退却する。又來襲する、擊退する。又來る。何しろ敵は我に數十倍する大部隊だ。精悍無比の我陣も兵の悲しさ、一人二人、敵弾に墜されてゆく。前友兵曹が眞先にやられた。つゞいて池田一水、山田二水、西田三水と、次々に悲痛な聲を最後に吐かれたやがて兒玉一水一人だけとなつてしまつた。

そのみかゝるとする三挺の機銃も、今は悉く破壊されてしまつた。我陣が沈んだと見て敵は開の扉を擧げて肉迫してくる。この儘では大死だ、あゝ銃が欲しい！と山田水兵は思つた。瞬間、晝間故障が生じて傍らに置いてあつた機銃の事を思ひ出して手にかけた。南無彌陀の神靈、我が武運を守らせ給へ！

兒玉水兵は郷里の淡川神社に一心に祈り乍ら彈丸雨飛の中で修理にかゝつた。十五秒、二十秒！ 刻々敵は迫つてくる。四十メートル、三十メートル！ あはや我が陣地突破かと思つた利那、鏢しや機銃の修理は成つた！（しめた！）手早く機銃を銃座に据えて手をかけた。ダマダマ！ 俄然沈黙した我陣地からは灼熱の火を吐いた。不意を喰つて倒れる敵兵算を知らず、忽ち驚愕狼狽して潰走し初めた。兒玉水兵は敵友の仇と訝り、銃身の燒ける迄射ち捲つた。さしもの頭敵もかくて完全に撃退され、虹江路最前線の護りは兒玉水兵一人の奮戦によつて確保された。宮崎部隊長が言葉

保定城一番乗り

を極めて彼を絶望した事は言ふ迄もない。

九月十七日、涿州の大包围戦に曠古の大勝を収めた皇軍は、膝を浸す泥濘も濁水も物は、急進又急進、翌十八日には高碑店を、二十日には固城鎮、徐水を陥れ、大册河を渡つて破竹の勢ひで保定へ、保定へと進軍、二十二日夕刻には、早くも高さ五丈と言はれる保定城壁近くに各隊突進して、包圍の態勢を取つた。翌二十四日午前敵々總攻撃を開始することになつたが、時に北門に空襲路を開く標、部隊長から命ぜられたのは軍曹石田實、上等兵後藤秋義、足羽幸作の決死三勇士だつた。三勇士は何れも武裝甲斐々々しく白鉢巻に鐵兜、勇躍高さ五丈の城壁に肉迫した。

敵は三勇士の姿を見るより早く、機銃、小銃、手榴弾を雨散と浴びせたが、既に死を覚悟した三勇士は物ともせず、ビタリ城壁下にへばりつき、先づ後藤上等兵、用意の細綱を投げかけ、これを頼りに狼のやうに攀ち登り初めた。と言つても城壁は高さ五丈、殆んど垂直に近く、足をかける隙もない。手に汗を握つて眺める中に、十分程費して漸く頂上に達した。と、早くも敵兵二人がそれと知つて駆け寄つて、銃口を向けた。その利那後藤上等兵は腰の短劍抜くより早く、躍り込んで一人を刺殺し、一人を體當りで突き飛ばし、怯む隙に敵兵の銃を奪つて、仁王立ちに立ち寄つた。かくと見た城壁上の保安隊員約六十名は左右から殺到したが、その時早くも敵は攀ち登つて来た石田、足羽の二勇士が抜劍して威嚇すれば、相手は膽を抜かれて立ちすくんだ。その隙に三勇士は準の如く身を躍らせて城内に飛び降り、北門をサツと開いて「オーイ、突撃路を開いたぞー」と大音

軍に呼ばはつた。この聲に城外に投到してゐた友軍部隊は、大喧嘩と共にドツと潮の如く城内に雪崩れ込み、敵を散らして、城頭高く日章旗を翻した。

決死「白壁の家」爆破

「白壁の家」は羅店鎮の南端にあり、高さ五メートル位の煉瓦壁に圍繞され、数條の鐵條網を張り渡し、壁の銃眼から機銃小銃で絶えず射撃した。その上わが第一線との間には幅四メートルのクリクが流れてゐるといふ要塞堅固なもので、何の事はない「白壁の家」全體が巨大なトーチカだつた。上海戦線に勇名を轟かせた和知部隊は八月二十七日羅店鎮入城以來、この敵陣を一舉に奪取しようといふ度か猛烈な夜襲を敢行したが我々乍ら成功しなかつた。飛行機から爆撃しても怯む色なくしかも敵陣からは毎夜小面備い着音器の音さへ聞へてくるのだが、如何とも手の下し機がない。そこで残された最後の手段、地下道によつて爆撃する事とし、九月十九日からクリクの底を掘る地下道の掘進工事を始めた。工場の勇士によつて二筋の坑道は慘憺たる苦心の下に掘りつけられた。かくて四日目の掘進工事は遂に成功した。いよいよ爆破だ。和知部隊長は九月二十三日の秋季皇靈祭を期して爆破粉砕を敢行すべく決死隊を募つた。われも／＼と競つて願出たが結局銃引といふ事になり丹波少尉以下二十名の決死隊が選ばれた。明ければ二十三日、一同は白壁を肩に冷酒で別れの盃を交はし、夫々遺書を記して、隊長の號令「一行つてくるぞ」と亮爾と笑ひ、勇躍もぐらの様に二筋の坑道の中

に姿を消した。時に午後三時十分！

やがて、二十五メートルの坑道を傳はつて猿の様に躍り出た勇士達は矢面に發煙筒を投げつけて煙幕を張り、次いで爆弾を投げつけた。忽ち轟く大爆音！おゝ、「白壁の家」は木つ葉微塵となつてケシ飛んだ。その時突如突撃ラッパが鳴り渡つたかと思ふと、戦車の進歩、歩兵隊の突撃、空には友軍飛行機の爆音突撃又突撃！遂に不落を誇つた要害「白壁の家」も潰滅した。しかも何といけ天佑であらう二十名の決死隊には一人の犠牲者も出なかつたのである。

噫 加納部隊長の最後

雨はいつ果つるともなく降りしきる。加納部隊は吳淞クリクを隔て、頭敵と相對し、胸まで浸す泥水につかつて、五日間に亘つて苦戦をつつてゐるが、敵は連日連夜の我が猛攻を斥けて逆襲し來り、上陸以來の大激戦が展開してゐる。十月六日には卯野積二郎部隊長を失ひ、八日には高見順三部隊長が腹を貫通銃創で倒れ、殘る川崎秀一部隊長も足を射抜かれてしまつた。多くの部隊長と部下を失つた加納部隊長は、毎日「申すまい／＼」と呟いては、悲憤の涙を呑んで奮戦した。八日の夜、折柄の豪雨を隔てて父しても敵の大部隊が襲つて來た。足に傷つた川崎部隊長は軍醫の勧告にも耳を藉さず。「これしき傷が何だ！ 俺は卯野と高見の仇を討つのだ、誰か俺を背負つてくれ！」と言つて背かかなかつた。敵機銃を血に染めた川崎部隊長は、遂に兵の背に負はれ、軍刀を打振つて進んだ。泥濘の海には血の雨が降り

迫撃砲手榴弾は潮の目の如く降つた。藤崎部隊長は二十メートル前方の塹壕に飛び込むや、當るを幸ひ斬り伏せ突き殺し、忽ち敵兵二十六名を斃したが、味方も少なからず犠牲者を出した。かくて我が決死突撃隊によつて漸く敵第一線を確保したので、翌九日午後二時、この進撃路を衝いて加納部隊長は自ら陣頭に立つて前進を開始した。更に十一日には敵前三百メートル曹宅へ進出したが、敵陣は益々密しく、前方二十メートルに續いて五彈落下して土煙を擧げた。

「一歩も退くな！ 敵は太陽に向つて打つてゐる。我軍には天の加護があるぞ！ 進め！」加納部隊長は指揮刀振かざして突如命令を下した。その一刹那！ 無念飛び來つた三發の迫撃砲弾の一發が、加納部隊長の頭上に炸裂し、さすが剛毅の部隊長も朱と染んで打たれた。あゝ壯烈！ 加納部隊長の最期。

譽れの片翼、櫻村機

十二月九日午後二時、海軍航空部隊三原大尉指揮の〇〇機と、大林大尉指揮の〇〇機は南昌機場の壯途に就いた。目ざす南昌飛行場に近づくや、敵戦闘機が如くに群がり、び立つたではないか。見ればソ聯機と十六號とカーチス・ホーク機だ。(ワムよき獲物！)と我々驚きは、真只中へ躍り込んだ。ダダッ、ダダッ……彼も火を吐く、吾も火を吐く、南昌の空は忽ち火網に被はれた。

この時、大林部隊付、櫻村三等航空兵曹操縦の新鋭〇〇機は、敵の戦闘機七機に圍まれたが、下から急角度に上昇して來た十六號と先づ組み合つたが、瞬く間にこれを撃墜し

て瞬時、高度を取らうとしたその真正面から小艇にも機銃を射ち乍らカーチス・ホークの機が襲ひ來つた。

(よし！) 傾いて眞しぐらに全速力で立向つたが、櫻村兵曹は思はず「しまつた！」と叫んだ。その時は既に機銃弾を射ち盡してゐたのだつた。と言つて敵に背後を見せてなるものか！ よし、この上は最後の切札當り、捨て身の戦法より他はない。覺悟をきめて櫻村機は敵陣を避ける爲に宙返りを一つ打つて、相手は眩惑してゐる隙を狙つて眞上から吾と吾が機銃を強く叩きつけた。喰ふか喰はれるか？ ドカーン！ メリ／＼！ 大きな衝撃を感じたかと思ふと、天佑！ 奇蹟！ 櫻村機は左翼三分の二をもぎとられたが、カーチスはホーク機は、無事上級の左翼をむしり取られて、その儘黒煙を吐き乍ら、誰もみ状態でもつしぐらに落下して行くではないか！ 櫻村機は凱歌をあげて安定を失つた機體を巧妙に操縦して六百キロを翔破、やつと懐かしの地上空に達したが、さて着陸が問題だ。櫻村機は着陸を踏ふ様に二回三回と旋回飛行を繰り返したが、六回目に思ひ切つて下降、鮮かに着陸、隊友達の嬉し涙の中に抱き迎へられた。

南京光華門一番乗り

抗日支那の首都南京には總帥唐智生の下に蔣介石の親衛軍とも言ふべき教導部隊、第八十八師、第八十三師の三ヶ師に、廣西軍及び廣東軍の精銳を加へ、更に數萬の雜軍を擁して一大防衛陣を張り、我が軍を迎へ撃たんとした。之に對し我軍は、堅固上海を席捲した

敵の狂撃を冒して前進、午前七時頃敵前三百メートル、はつきり城壁の見ゆる地盤まで進んだ。自分と兵と二人で爆薬を背負つて外濠を通り抜け、わが胸まである濠を泳ぎ、城壁に迫りつき〇〇キロの爆薬を背負つたまま、城壁の掘りに穴を開け、爆薬を二ヶ所に装填、點火したところ、轟然たる爆音と共に城壁の一部が破壊された。これによつて待ち構へてゐた歩兵機關銃兵が、鉄々擲弾子をかけて、城壁の上から逃げて行く敵を猛射し、遂に城壁西北角高く日の丸を掲げ、附近を全く占領したのは午前九時三十分だった。

○隊第一の大功をたて

伊賀二等兵

南苑兵營に突撃の際、私は敵兵一人を鉄劍で突き刺したと思ふ瞬間、敵の投げた手榴弾で足をやられ、第二の手榴弾で三ヶ所に負傷し、目下野戦病院で療養中であり、後で自分の持物を調べて見ると、十五發の彈痕があり、中にも一弾は上衣の襟を射抜いてゐるのであります。更に二十八日の戦ひに私は斥候に出て、敵の將校を討ち取り、重要書類を奪ひ、〇隊一の大功をたてました。左耳下に入つてゐる彈丸も除かれ、全快の上は、今一度第一線に活躍したく切望してゐます。

敵兵十三名突殺した

一等兵 川島 親

【註】北支南苑の激戦で名譽の戦傷を受けた伊賀二等兵が、野戦病院から嚴父に寄せた勇ましい戦線便り。

【註】北支南苑の激戦で名譽の戦傷を受けた伊賀二等兵が、野戦病院から嚴父に寄せた勇ましい戦線便り。

會ひ、その時自分は、敵の將校斥候長を倒し、敵の報告材料を取り、〇隊副官に露出したら非常に賞められたよ。自分だけでも敵兵十三名を突殺したよ。實に痛快だった。丁度、その晩、同盟通信の記者が自分等の所へ來られて、その話しをしたら、非常に喜んで早速その晩七時頃、自分等の傍らで無銭をもつて内地に知らせてくれたよ。これ位のこと新報に出されては恐れ入る次第ですよ。(後略)

【註】臨坂部隊の川島一等兵が、南京を目前十六キロに控へた土橋嶺に於て顯した殊勳談を、郷里の實家妻女つた子さんに報じたものである。

私の戦死を喜ばれ度し

海軍大尉 梅林孝次

天皇陛下下の御爲に戦死す。武人の面目にして男子の本懐なり。非常時局に海軍に入り教官、先聲の御指導及び級友の友情にて、今日の榮を得たり。

北支事變起るに際し、この懸置あり、國防の第一線に立ちて職責の稱、且つ大なるを思ふ。たと感激と感謝のみ。父母様に先立つも、君に忠

ならばまた親に孝なり。私の戦死を喜ばれ度く、御上の御恩典は、専ら教育のことに使はれたく、我家の生活の費とせざること。

老ひたる両親を残すは忍びざるも仕方ない。弟妹は助け、亡き兄の分まで孝養を盡され度し。私の墓は不用、是非建てるならば極く小さきものか。

今は亡き親友の遺族の時々は訪れ、慰められ度し。終りに臨み、父様、母様の御健康を切に祈ります。

八月七日夜〇〇〇〇
隊に於て出動の夜
梅林 孝次

御両親様

梅林 孝次

【註】敵陣に落ち行く炎の愛機の中から、悠々ハンカチを打ちふりつゝ、南京空爆の華と散つた故梅林大尉が南京空爆決行の前夜両親にあてた絶筆の遺書である。

愛機諸共火遠慮となつて

入佐 俊家

前略 我が海軍空爆隊の極めて壯絶果敢なる大爆撃は全支を恐怖に陥らしめ、地上部隊の無人の境を行くが如き奮戦と相俟つて、敵に致命的大打撃を與へ居り候。嗚らざるも

昇次郎君、この千載一遇に際し、日夜奮闘なる空中生活に鍛へられたる新しい大和魂の豪傑と申すべきか、實に平然として渡洋爆撃、或は敵地數百哩の輿地空爆に比類なき氣魄も凄しく數十回に亘る空爆に奮戦され、武勳赫赫として目撃しき戦績を歴史に遺しつゝありしも、十一月二十二日敵空軍機據地たる河北省周家口に集結せる敵航空兵力激波の命を受け、第〇隊二番機として勇躍壯途に上り、一發必中を期して周家口上空に達し、地上待機中の敵機數機に高度二千メートルにて第一撃を決行し、多大なる損害を與へたる直後、かねて上空に待機してゐたる敵機數機と遭遇し、壯烈なる空中戦闘中、敵弾數發ガソリン・タンクに命中し、火災を起したる爲、如何ともなす術もなく、操縦性を失ひ、火墜機となつて、愛機と共に敵飛行場一角に墜落に碎け、壯烈なる戦死を相送げられ候。時に午前十一時五十七分、昇次郎君の榮ある凱旋を御待ち申し居られし事と御推察申上げ、殊に御氣の毒に御座候。櫻花の如く潔く散るは武人の本懐にして

永遠に武勳を留められし御命令の御實を慰め、つゝ幾多犠牲者に、我等誓つて大御心に副ひ奉るべく益々奮闘致す心算に御座候。

【註】細田兵曹の壯烈極まる最後を、上官たる入澤部長長が自ら綴つて、故人の令兄榮一上等兵に報じた手紙である。

慰問袋有難く拜受

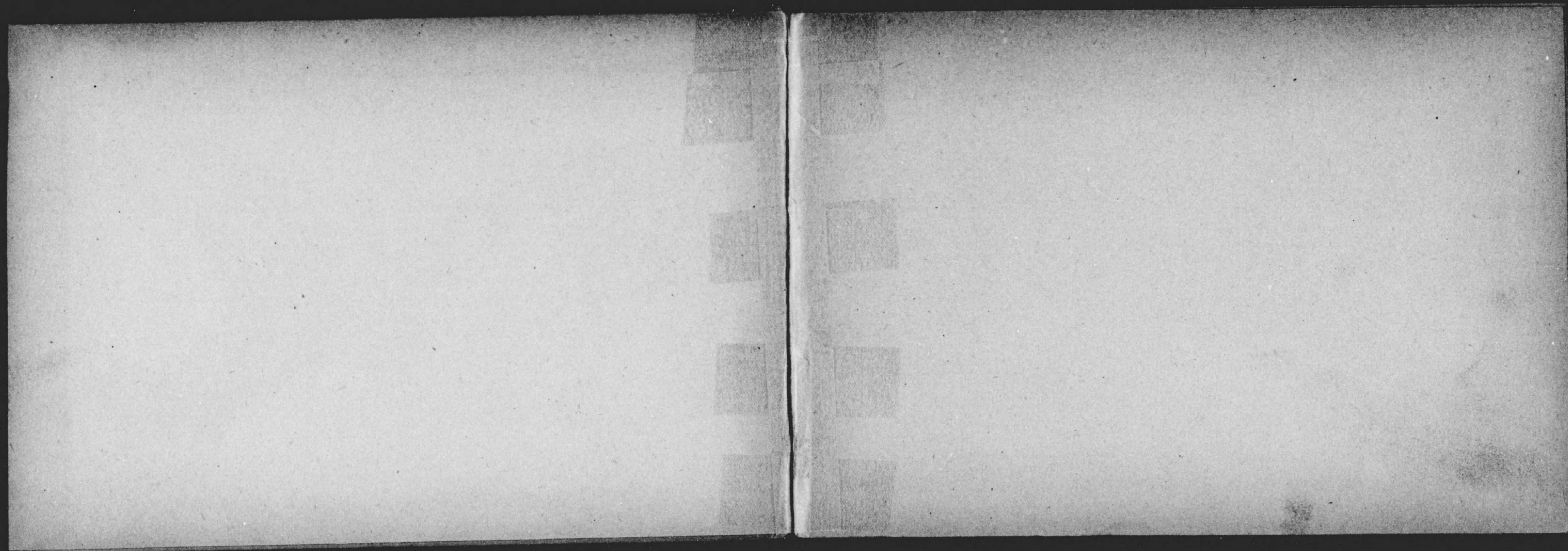
〇〇部隊長

今日は明治節の翌日四日です。私達の部隊は大規模の攻撃がすんで、次の戦の準備の爲に河北の北方の村々に集つて種々の仕度をしてゐるところです。僕は〇〇歳に近い老兵です。今日當に慰問袋が分配せられると言ふので、この老兵である私も子供の様になつて喜んで分配を受けました。

中の手紙は繰返しく拜讀しました。

味方の將兵は誰も彼も一樣にほんとに生命を捨て、攻撃したのです。私は部隊長として、これ等忠勇なる人々の在天の英靈に對して、心からなる弔意を表して居ります。

(後略)





地番六三ノ二町保神區田神市京東
行發會及普事車